



017931-000-8

特10-853

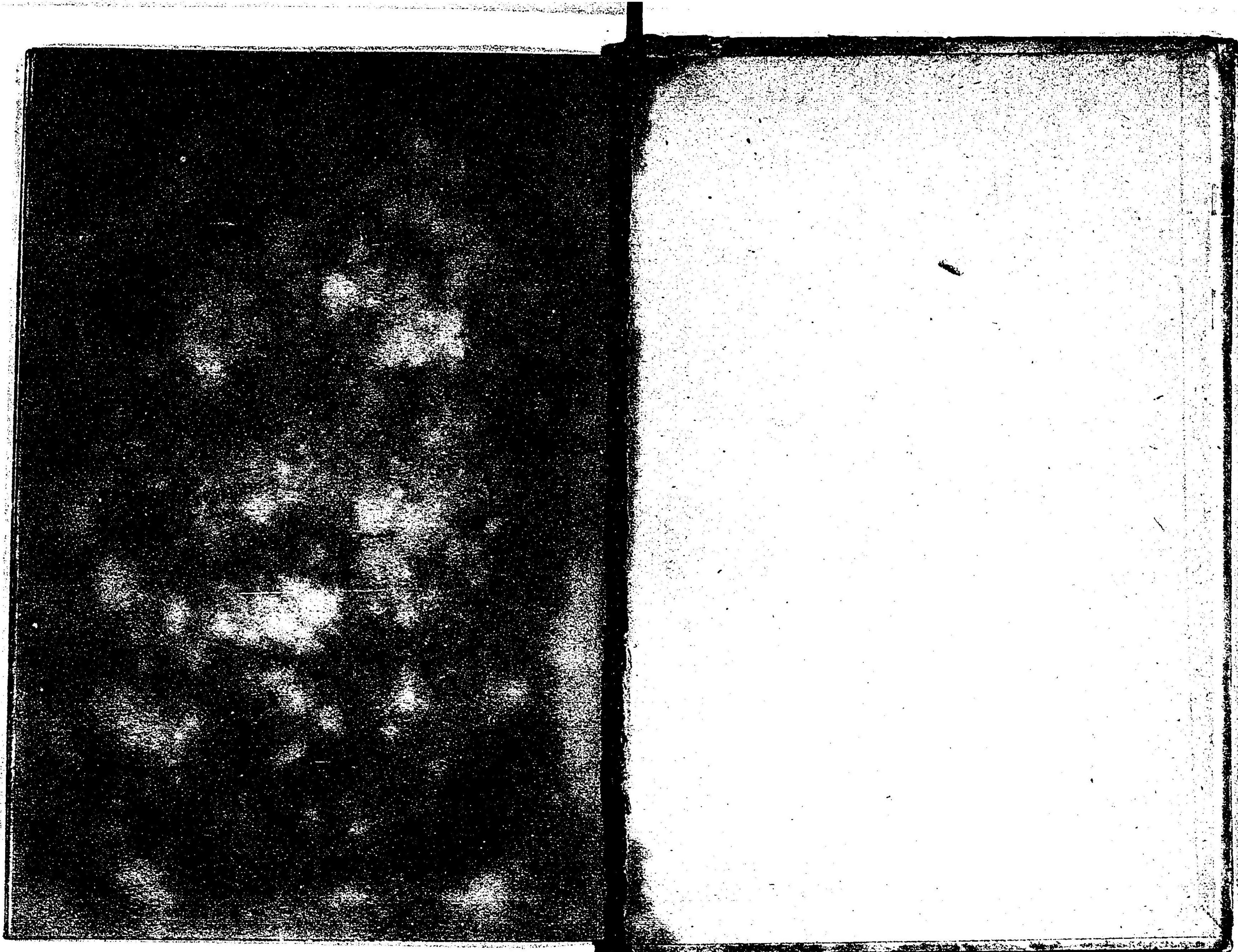
三国七高僧伝図会

一禅居士/編

M19.10

ABF-0927





明治十九年十一月一日

三國七高僧傳序

大聖釋尊教を垂れ玉ひしより此に幾千年其間佛法の隆替時變の異ありと雖も幸にして護法の聖弘教の碩師續々輩出して能く有無の清濁を看破し輪廻因果の道理を悟

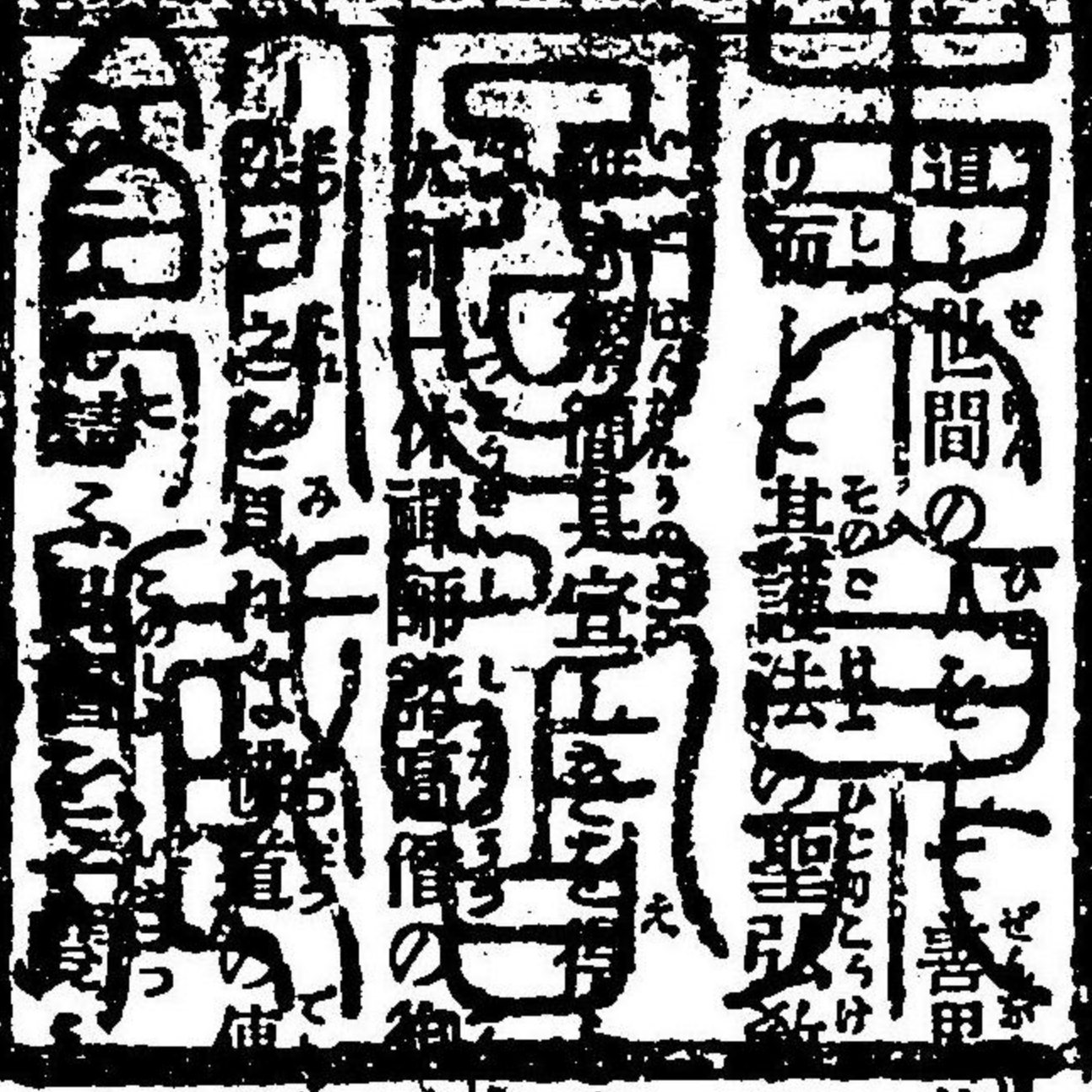
善女たらしめんと濟度あさしめ玉ふ事かこくもあまひの碩師の事跡を記せし書物の流布するもの寡あしとせずとも

のを見す此に善哉書肆團銀樓の主人嚮に親鸞上人弘法一代記を發行し今又三國七高僧傳を刻して市に懸かんとす

統より天竺支那我邦の高僧碩師の諸傳異説を掲げて遺すこと

て以て一切藏經の奥に悟入し佛道受授の深妙を窺ひ得るに

於ては其功德蓋し廣大無量ならんかと爾云



粘華庵主識



護國夜刃神

時國一勢去至丸



江南傳陶隱居

巽驚大師

夜刃神女綱林

善導大師

聖德皇太子像

石寸直



三國七高僧傳總目錄
 龍樹菩薩傳
 一印度梵士四
 種並諸傳異說
 二釋尊於楞伽山說未來記
 三龍樹大十發心因緣並術家求隱身法未記
 梵士八皇居侵凌宮女五大龍菩薩授經典四
 六龍樹弘佛法七龍樹爭術八龍樹授經典四
 大乘法二毗搜紐天親菩薩傳一婆藪般豆牛北弘
 竺四迦師之耻辱子王靈驗三阿僧伽上兜卒北天
 天親雪師之耻辱子王靈驗三阿僧伽上兜卒北天
 二靈鷲講武常二靈鷲大師傳一南兩朝
 一善導探有緣經二善導入定○道綽師傳一崇盛
 道善導異說有緣經二善導入定○道綽師傳一崇盛
 靈夢本朝之卷
 ○源信僧都傳一源信幼稚感
 靈夢本朝之卷
 ○源信僧都傳一源信幼稚感
 多田源信遇母臨終五朱聰仁見源信往八
 源信入水想觀心九源信遷化奇瑞十往一生要
 集時國一源信自續文○源空上人傳一漆
 學佛經四阿闍梨源光試奇童五勢至丸受大
 乘戒六佛再建九於上西門院說戒十遠洲
 大寺大佛再建九於上西門院說戒十遠洲

櫻池來由 十一源空論諸宗碩師 十二重衡
 請源空授戒 十三維盛粉川寺講源空 十四
 東大寺供養 十五明遍僧都夢想源空 十六於空
 院談聖道淨土二月四郎悔先非歸佛門 十六於空
 十後白河法皇崩御 二十九顯真法印遷化 十八碩
 差別 廿二東大寺大佛供養 廿一源空修不斷念佛
 廿六 井源空談義 廿五源空智無智教化
 淨土法門 廿八明惠破擇集 廿七桓舜僧都歸
 詰選擇 卅三南都北嶺嗽訴源空 卅九雲朗僧正
 滅山王猿春日鹿怪異源空救免 卅四粟生丘茶毗
 尊骸 卅三波畫豎者破選擇 卅四粟生丘茶毗
 ○附錄之卷
 ○聖德太子傳 一厩戶皇子降
 素姓 二蝦夷寇 三那再與論 三河勝奏日羅
 怨靈 六物部守屋企叛 四日羅密奏長策日羅
 本朝 七帝攝政之權 九太子守屋戰官軍 八
 御墓 七條 太子薨 斑鳩宮 驪馬悲鳴 鷲異鳥守

目錄終

欠

MISSING

三國七高僧傳圖會天竺之卷

持10
853

枸杞庵一禪居士編輯

龍樹菩薩傳

大明夜西山月光耀之。大聖釋尊化緣の薪盡たまひて、跋提河の波と消む沙羅樹の煙
世々に高僧跡を繼て出現在し衆生を濟度し給ふこと偏に彌陀釋迦二
尊の末裔高僧相傳の流傳を以て龍樹菩薩の南天竺橋羅國梵志の種大家貴の家に誕生した
凡標佛經魏譯九(十二)唐譯六(十八)摩訶摩耶經下(十三)付法藏經五



藤橋の四姓の如く天竺よての住民にして一刹帝(王氏)二婆羅門(梵
須陀(農民)都合四種あり就中梵士の婆羅門の種あり尤此菩薩の懸記
凡標佛經魏譯九(十二)唐譯六(十八)摩訶摩耶經下(十三)付法藏經五
(十五)西域記八(八)同十(十二)法苑珠林六十六(二)左(十二)門論宗教義記上(廿三)等其中に
於て付法藏經楞伽經魏譯同ふして且詳なり城記と義記と滅相を記し稱同からず又景德傳燈錄
一(廿三)傳法正宗記一(七)五燈會元(卅二)等は禪家の別傳にして大に諸傳より異り佛祖統紀

三國七高僧傳

五(十八)合採して一傳とす 甚難りすとす

○金剛頂經義決上(初尤)密部傳承縁を載せ○金剛正智經にの妙雲相佛と説き○大莊嚴三昧經にの徧覆初生如來と説けり慧果阿闍梨(弘法大師の師匠)は妙雲如來是觀自在王如來の異名なりと説く釋論聖法記よ出

今こゝに説きころは姚秦三藏鳩摩羅什翻譯の楞伽經の意よるあり惜またこの菩薩の出現に異説あり摩訶摩耶經と涅槃經と佛祖統記によれば如來の滅後七百年の後とあり又中論の説には五百三百年或は九百年とあれ共法范珠林六十六卷に玄奘三藏の傳によれば佛滅後三百年に出世すし七百年の長生を保たすふとあり然れば御一生の化導七百年ならん歎尚異説のまぢりあれども略す然るに此菩薩は褚宗の高祖にして天台眞言禪宗華嚴の三論の法相の淨土眞宗等に至るまで皆以て祖師に立ざるのなし其來由の釋迦如來楞伽山にまじりて未來記を大慧菩薩の説給ふ經に云未來當有レ人大慧汝諦聽有レ人持レ我法一於二南大國中有大德比丘一名龍樹菩薩一能破二有無見一爲レ人説二我乘大乘無上法一證二得歡喜地一往二生安樂國一(魏譯楞伽經弟九總品一唐譯第六偈頌品一同之) 去住に如來滅度の後はるかかの星霜を経て出世し給ひ龍樹菩薩と名けられたる能知道の徳を碎き有無の邪見を破り大乘無上の法を明し給ふ其中に十住毗婆娑論を作て難行易行の二道を明し彌陀本願の法は唯他力にして易行道なるを教へ又自ら彌陀十二禮の偈を作りて回施衆生彼國とて淨土往生を經に人にも勸め自ら願ひ給ふ也さて此經文の中に無上法といふの宗風によりて無上法の一句を取て譯ふとそ亦法去龍樹菩薩の宗の血脉相承の師あり故法相宗よは空疎非無と説する是無上法とす三論宗には假名の因縁の顯道無方の四種を立て勝義皆空と説するを無上法とす華嚴宗よは妙乘教の大乘始教大乘終教顯教の圓教の五教を立てるといへども已界の佛界衆生界の是三無差別と説するを無上法とす法華宗にの四教五味を立てるといへども一心三觀一境三諦を解を無上法とす眞言宗には顯密二教を立て顯教を遮情門と一密教を表徳の法とし父母所生身即證大覺位と説するを無上法とす禪宗にの教外別傳不立文字と説く物と拘はらざるを無上法とせり斯の如く我修する所の法を無上法と譯へり九表記いはいはく今の經文に往生安樂國とあれば无上法の詞まさしく念佛なり故に欣求淨土の念佛宗には修する所の念佛往生を無上法とす是誠經文よ宜し後學の人これを判じ給へ今私よ云華嚴天台眞言禪宗等にの勝の義ありといへども易の義をし此故に無上法にあらす又念佛宗には勝易の二義あり故に念佛の法は無上が中の無上の法あり誰かこれを譯んやと云々楞伽山といふは楞伽といへる城のある山にして夜叉の住居す地なりといへり文

三國七高僧傳

類聚鈔踏岩記云楞伽は城の名山を摩羅那山と名く僧伽羅國の東南にあり心支義に云梵に楞伽
といふ此には難入といふ亦は峻絶といふ復下畏といふ亦莊嚴といふ此摩羅那山は南海の中に
孤峙つ山岳にして其山削し如くある故に峻絶と名く山の頂さ城あつて四圍は戸扉なく唯
神通ある者空を飛行して下り入方に其中に預する故に名づけて此城を難入といふ羅刹中は居
すゆへに復可畏と名く衆の寶をかざるゆへに復莊嚴といふと云々釋迦如來此山に於て説法し
玉ふ其とき大惠菩薩といへる知識ありて上首たり難じて一百の問を立玉へるに釋尊一々にそ
の答を審にしたりは是を委く説宣たるを楞伽經といへり其中に未來記を説たまふ文は南天
竺國の中に大徳の比丘ありん龍樹菩薩と名くべ名能無の見を破し人の爲に我乘の大乗無上
法を説き歡喜地に住し安樂國に往生せしめんと説玉へり有無の見は人の人に生れ虫は虫に
生死相續して常住ありと思ふ是有の見なり又人も犬も死すれば火の消たるがごとく灰とあり
土とありて迷も證も無ことなりと思ふは無の見あり此有無の二見より六十二の邪見を生ずる
是皆九十五種の世を穢すとある外道の教なり夫を能破り盡して大乘の無上法を説て弘むと
なり我乘といへ佛自内證の大乘法あり我物我教といふに同じ四教義に云乘といへ運載荷負の
義に牛馬に乘船筏に乘乘て我思慮に至るべき時なり釋尊は乘乗に乘上て道を運びて行義

八

水り聲聞の四諦を乗物とし支佛は十二因縁を乗物とし此二大は四轉十二因縁の船に乗て分段
生死の愛河を渡りて但空法性の彼岸に至るべき也轉薩の六度を乗物とし生死の愛海を渡佛
果菩提の彼岸に至るべきあり。但天台によらば菩薩は四教の不同あり藏通の菩薩は二乗とお
あしく分段生死の河を渡る別圓の菩薩は分段變易の二種生死の愛河を渡るべきに四教とも
に菩薩は佛果を以て彼岸に踰べき也云云是故に乘の字を與るなりと云々又大乘小乘といふは
人に約し法に約する二の意あり人ふ約する時は二乗を小乘と名すく自行限る故に其智力狭け
れば小乘といふ也菩薩をは大乗と名づく自行化他兼濟して觀智廣大あるが故ありと云々され
は大乗は佛の内證智とて聲聞にても菩薩たりとも佛より外よは知ものあき智慧のとを内證智
といへり大經に所謂佛智不思議不可稱智等の五智の事あり無上は一乘勝たる上もあき法とい
ふこと也龍樹菩薩南天竺に出現して有無の邪見を破り大乘の上もなき法を説教て歡喜地に住
せしめ安樂國に往生あさしむるごと釋尊未來を察して説給ふ也歡喜といふ身によろこぶを歡と
いひ心によろこぶを喜といふ獲べきを得んと思ひてよろこぶを歡喜と云と有り

備此龍樹菩薩發心出家の由縁を尋るに天竺月支國といふは西域の中の南國也其國五分にわかつて
より東天竺西天竺南天竺北天竺中天竺あわせて五天竺を號するの南天竺國薩羅國ある梵志の種

大賈賈の家に生れ給ひて名を龍樹と稱す其母樹下にて産す阿周陀那と字を阿周陀那は樹の名なり龍ろの道成その故に龍を以て字に配し號して龍樹と曰云や或は龍宮に入はじめて成道を得るによつて龍樹と號すと統記に見ゆたり又龍勝と號す共云り夫聰奇悟事不三再告と有て天聰て萬事を奇く悟り聰命啟智よして何事により本に回闕其義理を明らめ聊も忘たまるといふことありしまた乳をのみ食を餉るの中より諸梵志の四國陀典(外道の書籍)を誦を聞たまひて三十二字づゝある偈文四萬頌を悉く誦じたば之其義理を心に領し明らめたまふ尋常の人なりせば十歳以上のものたりとも暗におほゆるとかたかく假令ららば誦ものあるとも畢竟鸚鵡の心經を讀に齊しく争ふの甚深の句味をあきらめ識とありんや今龍樹は幼稚にして十二萬八千の文字を宙に會得しあかのみならず其ふかき義理をあきらめ給ふと誠に安養久住の菩薩大慈大悲の方便あることおもひてしるべし二十歳の頃にいたりては五天竺を巡歴て天文地理易學をよび諸の道術等悉く所なく學得て天竺國もといへども誰も口では是に續く者なく其名四方に轟りしかれども天竺は所謂大國なるが故に此彼に龍樹に彷彿の朋友三個あり是亦頗豪傑なり一時の契友會合し相談ふて曰既天下の義理にたみて神明をひらき國言を悟るべき者のこらす吾等これを盡せり此上は何をもつてか自一機とせん身に數機を究るの樂あるべからず夫は人情を

悉く以て色欲を究む一生の樂をらめたりながら吾諸梵志國士の徒にして一國の王公にあはざれば思のまにに豪華を究樂樂がすこと難し所隱身を隠すの術を學びて王宮にしのび自由に出入して淫樂をさわむべしと數個もつとも談ひつゝ相連立て其術家に至りける此隱身の術と云の俗に忍術といへる類にして遊偵。謀者。細作。通候。探伺。間諜。以上左傳の注に見えて皆忍者のこと

五雜組云漢時解奴輩張紹みも隱論出入するに門戸に由らず此後世遁形の祖なり介象左慈の于吉孟敏。羅公。遠張果之流らよび晋書的女巫身丹。陳琳等が術皆是に本づく謂て神仙とす其實は非あり其法五あり曰く金遁曰く木遁曰く水遁曰く火遁曰く土遁其物をみて則隱べし
 惟土遁最捷あり蓋も處として土なきと無故之須く遁神を煉ると四十九日空山人無の中に於て獨坐結念をへし更に符呪あり百神を役ひ若一念の妄起れば便重て煉べし即大明に命を諷といふ者あり(字は啓敬)人を導きて大倉庫に入事發われて迷われ飲を求め即跳て瓶の中に入撲破て片々皆應即て竟に所在を知らず此水遁の者也正徳年中老翁太監を流賊に脱しものあり又三書を讀し土を一塊の握り遂に見えず此土遁の者也云々
 龍樹をばいも三國の朋友のびやわも同伴し其術の師たり其に至り禮を正ふして其術を學べん

志を乞時は彼術師たる人つとて、此四國はこれ天下におひて變なき輩にして名
を世に推しし世の人を翫弄の如くよす、争表等が家に屢を屈て來るべき者にあらす此諸死志
 才明世に絶すとはいへども未我術をしらす故に斯は屈辱するものあり我もし今速に法を授け
 ば必我を棄て復來ること有べからず先且その藥のかりを與へて法を傳ること待へし然れハ
 藥盡るときはかならずまた來るべし斯るとき長く吾を師とし尊敬すべし善哉々々と心を決し青
 色の丸藥を取いたし各一粒づゝあたへ教て云く是下等此丸藥をもつて人なく極めて靜なる處に
 引こもり水をもつてこれを磨つふし各眼にぬりたまふべし然るときいいかばかりの人の中に出
 るとも姿のみゆることあしと雖に敷ければ四個大に悦びつゝ厚くも禮を謝し藥をもちかへり王
 城にしのび入ん事を議しける茲に國樹は其丸藥を嚙み入水をもつて磨つふし給ふとき其香氣を
 嗅ぎてしばらく考へ遂に此藥其數七十種にして何々をもつて調合する處あり尤其分量の多少
 必至るまで悉く鑿察し給ふ是によつて再彼術師の許にいたりて此由を語給ふに術師大に驚嘆
 も問て云足下何の由か此藥の方を、許に知給ふや答て云藥自ら夫々の香氣あり何をもつてか
 知さらん哉と師しは、嘆伏し僅に三種の藥たゞも其味ひ分量まで飲分る者有べからず斯の
 如き人は之を聞も難かた十面には現や相違をや吾腹を斬るを惜むに足んやたとへ應ずとも何

の詮なき事なりとて其藥の製法万端具にこれを授けしと也龍樹はすでに隱身の術を傳り得て三
 個の朋友にも委く授け諸共は王城にいたり女官の室にしのび入るよ原本の姿見ぬれば許多
 の禁門にひいても咎むるものなきに委かせて后官女の房々に到り宮中の美人を悉く侵し色
 欲を恣にし給ふ然るよ百余の日の後女官の上階におひて懐妊の人影しと如何ある譯といふ
 ことをしらす女官の面々只管驚おそるよといへとも是匿によしなく種々評議の上終に止事を得
 す其旨帝王へ奏も奉るに帝大に驚おせたまひ此術の不祥にして斯怪事を爲哉と敎智の臣下を
 めして術者の所爲あると案議あるに一個の老臣進み出でて奏すや凡斯のことき奇怪に二
 種あり一は鬼魅、魍魎、狐狸の類の所爲あり亦一は方術之言し身を隠すの術を以て忍び入事あり
 是を調るに諸門の内にてまかなる砂を布き敷しと監人を以て隠らしめ給へい鬼魅の類ひは候は
 るの足跡有べからず隱身狐狸の案ならは必しも足跡現るべしもし鬼魅等の所爲に候は、術を
 もつて是を滅すべしもし人間所爲ありせば兵士をまつて是を退治すべし敢慮懼せさせたるふ
 ことをなれども奏しける帝を初後許多の群臣實よもつとも同じつゝ鬼魅降伏の術者を招き又
 力士數百人を備へて諸門の内疾白殺をもさ法を擧げて待たしむが案にたがはず四個の足跡庭
 庭にあらはれたまは曲者でさな勢を退治せしむる國の諸門を堅めしむ勇臣許多宮中よ若人

劍を揮ふて時定る下左右縦横無礙に殿中の隈隅隅に空削伐て廻りし程に何かの以てたま
 るふもつても隱身の術を得たる徒を透ぬあらせず伐立ち就即時に三個切殺され忽ち形容をあら
 はしけぬ龍樹も其時危かりるを棄より智慧騰れたまひし故帝王の側そばに寄るひ身を縮め氣を屏
 して坐しける帝のほどり七尺四方は劍を揮ふこと能はず是より依て劍難を脱れ辛き命を助り玉ふ
 このとき初て熟思惟し玉ふやう誠まことに始欲は是苦の本たり好色は是禍の根あり徳を敗り身を危
 めることをみれば此より起る有べきことにあら樂と悟り給ひ一心に誓を立て曰く我もし今日の厄難
 を免るゝことを得て出家とありて佛法を修すべしと決定し玉ひしと是經には即 自 誓 曰
 我若得脫當詣沙門受出家法と説玉へり迷に龍樹の此難をまぬがれ宮中をしのび出
 て山に入二箇の佛塔は詣て出家受戒し九十日の間に三藏さんざう(經律論)を誦つくし玉ひ大小乗の深義
 を究め尙其余に更に疑うたがひもやありんと十方を兼ぬ玉へともすべて得たまふところありし是より
 つて迷に雪山に登りたまふに山中に塔あり塔の中は一箇の老比丘あり講へて法を尋ねたまふに
 摩訶衍經典まかえんきん(大乘の經卷)をもつて是を與ふ龍樹さづかりて既に誦し其實義を知といへどもいまだ
 た通利を得玉はず故に諸國を周遊て只管自經を求め且閻浮提えんぶてい(娑婆世界)中をおまねく求め玉ふ
 とも言て學びたまふへま經まがなしてゐる程に外道も聲聞も沙門も諸宗も咸く摧伏し給ふ時よ外道の

弟子曰く師は一切の知人たり今既に佛弟子と爲玉へりしかるに其道の足ざるを承玉ひて居る
 と思ひ給はざるや只一事足ざるも一切の智に非ざる也と龍樹問て答ふるに辞なく幾情屈した
 まふ此に至て忽邪慢の心と起しつらゝ念やう世界中の法其數太多し原來佛經妙也といへど
 も利をもつて之を推とさば故いまだ盡さるる所ありとのいまだ盡さるる所を我これを推て演て
 もめて後學の者を借すべし理におひてたがはされとも事に於て失なしされ何の咎あらんやと
 心を決し玉ひ即ちこれを行へんと欲したまふ

〔第五〕大龍菩薩以深奥經典授龍樹 斯て龍樹の所に法を立玉ふに先師たる者を見立ててこ
 れを置戒を教へ衣服を更め造り佛法を准ひて聊異ることを有しめ衆人に受學せしめんと欲す斯
 ありし程より日を擇時を選び諸弟子に新に戒を授け新ある衣を着せしめ爾して龍樹獨靜なる處
 の清淨の水精房の中に在せり其時菩薩位に任ぜられし大龍神出現し此形勢を見て 數惜みこれ
 を慰み即時に龍樹を憐ふて海中に入龍宮城にいたり宮殿中におひて七寶の藏をひらき七寶の函
 を取いだしよろゝの方等深奥經典無量の妙法をもつてこれを授く龍樹これを受て讀誦するこ
 と九十日其經卷の數すこぶる多し尤經説の心の深きを入て實利を會得し玉ふといへども佛法の
 有がたきを求眞實に領解したまはず其時龍神これを察し而て問ていはく足下看る所の經卷や

いさや龍樹等曰く諸國中の經卷甚多く無量にして盡すべからず今讀ところの經すてに閻浮提に千倍せり龍神の曰今是に見玉ふ經のこときは此宮中の諸處に藏せり是其員を數ふべからず則これを見せ進せんとて無量の經藏をひらきて見せしむ龍樹見たまふに是まで見玉ふ所の經に百千万倍せり龍樹しばし感嘆し實に佛經の廣大言語に絶せり也其時己に諸宗の一相を得て深く無生を入り二忍具足すと云々かくてハ龍神ハ龍樹が佛道を得玉ふにより頓て龍宮城を伴ひ出せ閻浮提に送りかへしける

五雜組に云蘇州の東の方海に入ること五六日程に小島あり闊さ百里余四面海水皆濁る獨此水清く風無して浪高きと數丈常に水上を見るに紅に光る事日のごとし船人敢て近付かず云これ龍王宮也と云々法華經提婆品よ文殊菩薩海中に往て龍王の女を教化の事および佛說龍王經等あり

〔第六〕龍樹於南天竺弘佛法一時に南天竺の王諸國を順覽し給ふよ邪道を信用の沙門釋子一個も見ゆる事を得ず國人遠近皆其王道に化す龍樹つくく思ひ玉ふやう樹の木の本を伐されは傾か主人主化せされハ則道行れずと然るに其國の政法王家錢をいだして人を雇ひ行列の人夫遣す龍樹幸ひに此便をもつてうの募に應じて人夫の將とあり我を携へて前隊に列せり其行列の

佐を兼へ部曲の次第を正して進退遲速を指揮すること嚴しからずして令行ハれ法彰われずして衆卒隨ふ事奇あり國王之を見て歡喜び給ひ問て宣く是はいかなる者を從臣とたへて言そやう此者催促に應じ務る處あり尤扶持を食せず又錢をとらず用して事に在ては恭く謹んで勤ること斯のごとし其趣意何を求め何を欲するを知らずと王近くめして宣く汝は何人あるや龍樹つゝしんで我ハは一切智人んと答ふ王甚驚き給ひ而して問て宣一切智人は曠代一たび有て今有事を聞かず汝自智人なりと稱する事何をもつてか之を驗とせん答ていはく智をしらんと欲玉はマ何にまれ問せたまふべし具に說奉るべしと王即自ら念らく我ハ智主大論の護主たり問て彼を屈伏せんこと安しといへとも猶學とすべからず問はずんば彼誇らんかいはいはせんとも良久疑惑に覆預し玉ひしが已を得ずして問玉ふやう天今何をか爲哉龍樹の言く天今阿修羅と戰ふと王るべし詳きし其言を非とせんと欲するに復以て是を證とする事なし又其事を是とせんと欲するに事の明むべきものあり故よ王いまだ言を出し給はざる間龍樹復曾此虛論をもつて勝を求るの談にあらず帝須臾これ待せ玉へ稍てその驗あるべしと言終る時忽空中に干戈兵器あつて相係て地は落たり王の宜く干戈矛戟これ戰器ありといへとも汝何の故よ是天と阿修羅と戰ふ事を知るや龍樹はく是を虚言とせたまはれ實事をもつてせんよ如きと斯折から阿修羅の手足指おす

尊皇等空に從て下る又王ふよひ臣民望羅門衆をもて空中天竺阿修羅の兩陣相對するを見て王乃ち稽首して龍樹を敬ひ其法化に伏す殿上に萬の婆羅門ありしが各々束髮を切棄て成就戒をうけて弟子とされりこの時龍樹南天竺に於て大ひに佛法を弘め外道の有無の邪見を摧破し廣く摩訶衍大乘を明かにす是則ち大工無上の彌陀の本願にして自行化他を施む給ふなり斯て龍樹の優婆提舍十萬偈を作り又莊嚴佛道論五千偈大慈方便論五千偈中論五百偈を作り摩訶衍の教をなして大に天竺に行わしむ又無畏論十萬偈を作る中論其中ふ出と云々

天台名目類聚抄に云眞言宗の凡如來滅後六百餘歲に中天竺の龍樹菩薩南天竺に往て鐵塔をひらき金剛薩埵菩薩に値て傳ふる處の法門なり依經は大日如來三世常住法界宮に於て説處の三部の秘經也謂る大日經金剛頂經蘇悉地經也と云々又三論宗は如來滅後龍樹菩薩出世して諸法皆空の旨を宣ふ又青辨菩薩出世しておなしく此旨を宣ふこの宗の根元ありよつて天竺にハ馬鳴龍樹提婆羅睺等弘宣せり三部の論を以て依憑するゆゑに三論宗を名づくるあり一に中論四卷(龍樹作)二に百論二卷(提婆作)三に十二門論一卷(龍樹作)

第七龍樹與婆羅門論 諸龍樹菩薩は十萬二十萬の偈を説て普く佛法を弘めたまふ婆羅門國王轉依し轉入に國中の萬民風は尊のまひくがごとく佛法盛んに行われける時一人の

婆羅門(龍樹)の道士のていふものなりとて龍樹を説て種々の奇瑞を驗わせりかるがゆへに龍樹を大に妬み其術を行ひおひて勝負を試みて龍樹を一時に取ひしがんと思ひ天竺國王にねがふやう龍樹と術を争ひて弘る所の法の勝負をさわめたま旨を婆羅門王の宣わく汝が如き大愚痴の身として争か龍樹の所對となるべきや龍樹の智慧の明かあることハ日月と光を争ふが如し汝これを崇敬して必しも敬むることなかれと婆羅門のつして言やう恐おがら大王御師依りせらるるがゆへに其善惡としらしめさず王はこれ智人あらや何ぞ理をもつて之をあらはさずして勝負の分ることあらんやひとへに術とくらべん事を較願ひたてまつるに王も今ハ術し兼給ひて然らばこれを許べしとて即時に龍樹をめし玉ひ此由をのたまひつゝ日を撰て龍樹と共に政徳殿に出御ありて待受玉ふに婆羅門の後より來り此體を見より便ち殿前より歩みて口に呪文を唱ふれば忽ち大なる池を現し清淨の水涌まうの中に千葉の蓮華を生ず婆羅門すかた其蓮華のうへに斯清淨の蓮華の上に座したりされば大徳智人あらや論議をさんと抗言す其時龍樹の聲も玉はを暫く咒術を行ひたすつたちまた大衆の白象象の六ある白の大なる象也現れ出たり積中象は七本池の中に入て婆羅門の乘たる象の脚を鼻をもつて入るる

引拔つ山巖空に投上は大地にふるど響けければ、蟻蟻門は眞骨を打たかれ大に悶苦み頭をか
 べて誤りて龍樹に皈命してはばくわは身の量を知らずして大脚を履しめんと欲せしころ
 おれねがひくハ我を哀み其愚蒙を啓かせ玉へと先非を悔て嘆ければ龍樹はこれを哀み玉ひ弟子
 に加へ玉へり

第八龍樹菩薩破三有無見弘大乘上無法
 斯有し程ふ國中の外道の徒ごとく龍樹を信
 じ上は國王より下万民にいたるまで龍樹を仰ぎ尊ぶざるものあく迷に大乘無上法を弘め衆生を
 濟度せられける僧星霜多く移り變りて小乘を信する一個の法師あり常に龍樹の大乘を忿疾
 めり龍樹將に此世を去らんとす而て此法師に問て曰汝われ久しく世に住せざるを樂や否や答て曰
 實に願はざる所ありと龍樹聞て頓て退き關室に入扉を立て在せり然るに日を経るといへども出
 給はず弟子の人々奇異に思ひ戸を破つて内に火を看れば更に在らず其行方をあらす故
 南天竺の轉國其爲に廟堂を建て敬奉すること佛の如しと云々龍樹菩薩龍樹大士を稱す
 天台教觀時名目私鈔の解曰大士といふは小に非ざる也生は事也運心廣大よして能佛事を建る故
 大士といふ亦上士といふ瓊儂論に云自利利他の行を爲するものを下至と名く自利ありて利他不
 爲す中至と名く自他二行を具するを中至と名く利他不爲す

同書云天竺に論師の興起ハ凡如來滅後一百年の後摩訶提婆(此云太夫)鷄園に出世し詳論
 を興す阿育大王大天を敬ひて有教を信す五百の羅漢これを見て悲て目を撃て言す恒河を測
 て去は育王大に悔み血を吐事一斗しかれども尚五竺の學侶獨に有教を習ふ滅後三百年(或五
 百年或六百年或八百年)龍樹菩薩出世して空の義を述て有教の義を破すと云々
 楞伽經の中龍樹菩薩の未來記を説て證得歡喜地往生安樂國といへり歡喜地とは初地の菩薩
 の名なり新譯ハ極喜地といへり是則初地見道の位之初て眞無漏の智を得て二空平等悟を
 開き自他利他して大歡喜を證する故に歡喜地といふ瑜伽唯識等の論ハ見えたり案のごとく佛
 の未來記ハ違わす佛滅後に龍樹菩薩出世し給ひて外道有無の見を破し大乘無上の法を説き初
 地の悟を得て極樂に往生したまふなり

付法藏傳に依るに即龍樹は第十三の祖師なり假に仙藥を餌し現に長壽し三百余年佛法を任持
 するの度せる所の人稱て數ラべからすと云々
 龍樹陀偈曰本師龍樹摩訶薩。眞形像始理頹。彌明邪惡開正。藏
 是闍浮提一切眼伏承尊。悟歡喜地。歸阿彌陀生安樂。量如龍雲。顯
 必隨闍提提。身并一舒。南無慈悲龍樹尊。至心歸命頭面禮。

○天親菩薩傳

〔第一〕婆數般豆生北天竺富婁沙羅國。天親菩薩ハ北天竺富婁沙羅國の人也富婁沙羅國にて丈夫とす富羅と譯して土とす故に譯して丈夫國とす天親の父は此土の國師婆羅門なり姓は鳩尸迦と云三箇の子あり三子ともは婆數般豆と名く婆數は譯して天とす槃豆譯して親とす天竺の風にして子の名を立る事同一名をもつてし復別名を立ると以てし各これを分つなり于時此菩薩の傳説甚多し其大概を言へり

付法藏經六(十)○百論序疏(十)○慈恩三藏傳三(初)○西域記五(十一)○唯識樞要上本(四)○俱舍神泰疏一(初)○俱舍頌疏法盈序記(初)等の中に於て付法藏の婆數般多今の婆數般豆と同異の論尙し○如止觀證真私記一本(十)證文を引接するに百論序疏付法藏等の文をひけり○實疑を考ふるの一編たり○傳燈錄二(十)○正宗記一(九)○五燈一(四十八)等禪家の別傳大に諸傳に異なり○師子學を以て今師の弟とせるは元の念常の佛祖通載五(十七)を權輿とす蓋西域記を讀んで此降會をいたせり承用すべからず○三井圓珍の法華論四種聲聞日記(三右)に唐の無慶和尚の弟子慧則の説を擧て曰大日普賢を以て天親菩薩と名く迹名釋迦尊と顯す又經を引と云ん

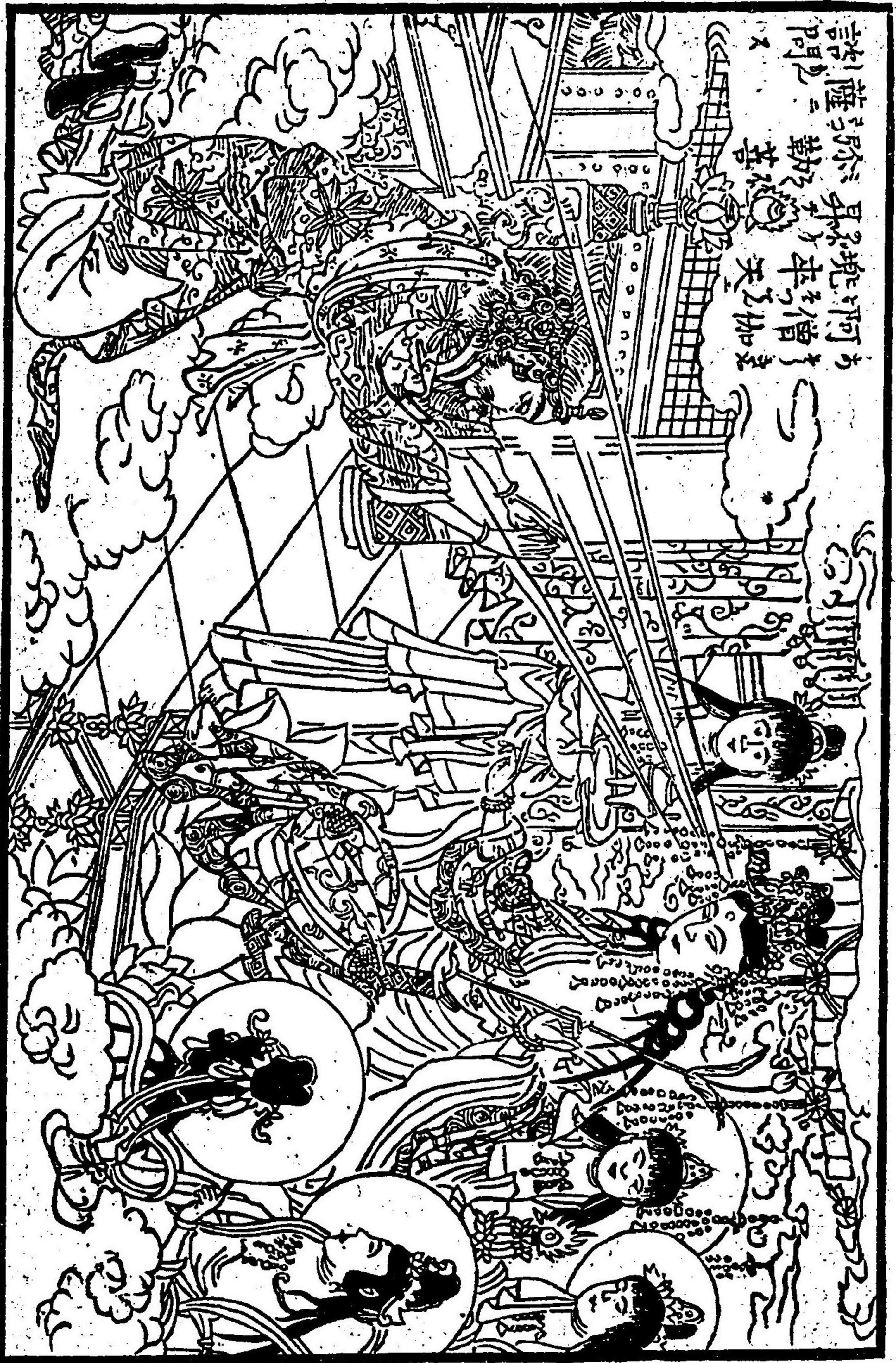
〔第二〕毗搜紐天王靈驗 天親菩薩の釋迦如來滅後九百年に北天竺丈夫國に生給ふ又小乘論に

如來滅後千年とあり御壽命ハ八十年の間の御化益あれハ一千年の前後か或ハ一千年の間なるべし天親を梵語には婆數般豆といひ又は婆數般陀或は伐蘇呬度あるひは和修槃豆とも云へり擬天親と號ること天竺國却初の時毗搜紐天王(帝釋天の弟あり)此土よ來下して開闢したまふ其徳を感じ天王の像を長二丈につくり廟を立ていはひこめ婆數般豆と稱す諸人歩を運ひ此天に祈るに諸願成就せすといふことあり然るに天親の父母子無を愁ひ此婆數般豆は祈誓をかけ給ふにたちまち一子を設給ふされば婆數般豆よりさすかり給ふ見ればとて即兒の名をも婆數般豆と號くと也是す亦はち天親(漢語)にして天は毗搜紐天の天をかたざる也試ハ親と訓する也諸人あゆみをほこひ彼天王をいければ此天王の親の兒を親むかごとくに親み給ふ故に則彼像を天親と號するなり然るに此天親の像ハ祈願して得たる見なるがゆへに天親と號る也新譯の論にハ世親といへり是は世の人の親近する意に依て世親といふとぞ

或云梵語の婆數は世あり槃豆ハ親あり天は梵語に提婆といふ(さか)といふ

〔第三〕阿僧伽上三兜卒陀天 諸三阿彌勒菩薩 ざる程に天親の兄弟三個なるが共に婆數般豆と名く然に第三子の婆數般豆は薩婆多部に於て出家し阿羅漢の果を得る別に比鄰持跋婆と名く此

此郡持といは其母の名あり跋婆は譯して子とす人畜通じて梵語女子のとを跋婆といふ長子の婆
 槃豆は菩薩根性の人ある故に亦薩婆多部に於て出家せり後に定を修して離欲を得空氣を思惟
 すれども入ことを得ると能わず自ら身を殺さんと欲す寶頭盧阿羅漢東毘提訶ありて此事を觀
 見して遙に彼地より來て長子の婆跋槃豆の爲に小乗の空觀を説く教のごとくこれを觀じて即便
 入ことを得玉ふ偕小乗の空觀を得るといへども意猶いまだ安がざるは只其理の爾らさればなり
 此に於て神通に乗じて兜卒天に昇りて彌勒菩薩は諮問す彌勒菩薩樂が爲に大乘の空觀を説給ふ
 夫より長子の婆跋槃豆は閻浮提に還りて彌勒の説たまひし如く思惟して即便悟ることを得給ふ
 其觀念の時に於て大地六種は震動す既よ大乘空觀を得たり此に因て名を阿僧伽と改玉ふ阿僧伽
 は譯して無著といふ深く小乗を厭捨たるの義なりとそ其後しばしば兜卒天に昇りて彌勒に大乘
 經の義を諮問す彌勒その爲に廣く解説したまふ阿僧伽は得る所あるに隨ひて閻浮提に還りて自
 己の闍處をもつて餘人の爲に説玉へども聞者多く信を生ずる者あし阿僧伽すはち自ら後願を
 給ふやうは我今衆生をして大乘を信解せしめんと欲すれども未だ成せず此上は所詮彌勒尊じさ
 へに閻浮提に下り給ひ解説し給はんには如きとて又兜卒天に昇りてこのことを告たまふ彌
 勒ははち其願ひの趣きを承明たまひ夜の時にいたりて閻浮提に下り給ひ大光明を放ち廣く有



縁の衆をあつめ諸法堂に於ひて十七地論(瑜伽論一百卷)を誦出し給ふに其誦給ふ論に隨ひ其義を解す百二十日の夜を経て十七地論を解すると方に竟る同一堂に於て法を聽聞すといへども唯阿僧伽一個のみ彌勒菩薩に近づくことを得たり余人はたゞ進に聞ことを得るなり夜は共に彌勒の説法をさく晝は阿僧伽更に余人の爲に彌勒の説ところを解釋す此に因て衆人皆大乘を信す彌勒菩薩阿僧伽に教へ日光三摩提を修せしむ説てとく修學して即此定を得たまふ此定を得てより後昔いまだ解せざる所悉く能通達す見聞どころ永く憶て忘る佛いよしへ説ところの華嚴等の諸の大乗經悉く未だ義の解せざるを彌勒兜卒陀天に於て阿僧伽の爲に其義を悉く解釋したまふ阿僧伽一人に通達し玉ふ後大乘經優婆塞提舎を造り佛の説玉ふ所の一切大乘經を解釋したまへりしかれば上にしめすが如く第三子の婆藪槃豆は別名を比隣持跋婆といひ第一の婆藪槃豆は阿僧伽といひ第二子の婆藪槃豆といふは是天親菩薩にして亦薩婆多部に於て出家したまふ博學多聞にして遍く墳籍に通ず神才俊朗にして佛を爲べきものなし尤戒行清高にして以て相匹がたし茲は佛滅度の後五百年のうち阿羅漢あり迦旃延子と名づる母の姓を迦旃延といふ其母の姓は從つて名とす先に薩婆多部に於て出家す本是天竺の人あるが後に罽賓國(天竺の西北にあり)往て五百の阿羅漢あり五百の菩薩と共に薩婆多部の阿毗達磨といへる小乗の論を撰集

大思を八伽蘭陀といふ譯して八健度といふ五万偈あり伽蘭陀は譯して結とす亦節と曰 謂義類各相結屬す故に結といふ又義を攝して散せざらしむ故に結といふ義類おのづから分限あり故に節といふ亦此文を稱して稱慧論といふ神通力および願力をもつて廣く遠近に宣告するやう若先に佛の阿毗達磨を説を聞かば得る處の多少にしたがひて送來るべしと觸しらせり是よりつて或は人或は天諸龍夜叉乃至阿迦尼師吒の諸天先に佛の阿毗達磨を説を聞かば或は廣く或は略乃至一句一偈を悉送與る迦旃延子諸の阿羅漢および諸菩薩と共に其の義を簡擇すもし修多羅毗耶耶と相違背せざれば即便撰錄と若相違背すれば即便棄捨す是取所の文句義類相關るに隨ふ若慧義を明かにする則は慧結中に安置し若定義を明にする時は定結中に安置す尙餘類悉く爾り此八結を合して五万偈あり既に八結を造り竟ぬ時に又毘沙門を造りて是を釋せんと思ひ馬鳴菩薩を招請せんと談らふ此菩薩は舍衛國婆枳多土の人なり八分毘伽論及び四皮陀と六論とに通じ十八部三藏を解と文宗學府先備の師す所ありとす

起信論義記云馬鳴の名の諸の傳記に依り略して三釋あり一に此菩薩初て生るゝ時諸馬を感動し悲鳴して息ざるを以ての故に此名を立つるなり二にこの菩薩善能琴を撫して以て法音を宣玉ふ諸馬聞て感ことく悲鳴す故にこの名を立つる三に此菩薩善能說法したるに諸馬悲鳴

し涙をたれて食せざると七日ならしむ是よりつて名とす菩薩といふを具にこれをいへば菩提薩埵とこれをいふべし菩提を此に大覺といふ即所求也薩埵を此に有情といふ即ち度する所なり境に従つて名とするのみと云々
馬鳴尊者は法を宣那夜奢尊者に受て普く衆生を度す嘗て魔ありてきたりて馬鳴と力をくらぶ空中に忽ち一大金龍を現はす威神を奮發して山岳を震動す尊者坐して儼然たり魔の事隨て消失たり七日を経て一ツの小蟲ありて形を尊者の座下にかくと尊者の云是則魔の變ずる所にし
て吾法を盜聽のみこれに告て云く汝三寶に皈依せば即神通を得んと魔遂に本形に復り禮を作て懺悔す尊者の曰く汝か名は誰やいかなる神力ありや答云く我は迦毗魔羅（是則人にして馬鳴に法を受て尊者とある馬鳴は第廿二祖迦毗魔羅は第十三祖）となつて能巨海に變化す尊者の曰汝性海を能するや否や曰く何を性海といふ尊者の云く山河大地三昧六神皆これに由て發現なり迦羅毗の言を聞て心を悟り遂に剃度を求む尊者乃ち偈を示して後入寂す馬鳴菩薩と稱す唐土の周の顯王三十七年に遷化す

〔第四〕 迦旃延子彌寶國請三馬鳴尊者一 斯て迦旃延子は人を舍衛國に遣はして馬鳴菩薩を招請す馬鳴尊者に遊じて彌寶國に來曉し玉ふ迦旃延子次第に八結を解釋す諸の阿羅漢および諸菩薩

即ち共に義の意を研解す其義意もし定まれば馬馬したかつて即文を著す既に十二年を經て思
 婆沙を作り方に畢ぬ凡百万偈なり思婆沙は譯して廣解と云ふ譯已畢て迦旃延子即ち石に刻て
 制を立て云く今より後此法を學人は屬實國の外へ出ることを得ざれと是は此國にて只管辛苦を盡
 し八勺の文句及び毗婆沙の文句其餘成就せし正法を餘部および大乘のこれを汚し壞らんと恐
 れて禁制を立て國王も願ふ國王も又其意に同じ玉ふ抑此屬實國といふは四方の周繞山岳ありて
 城のごとく唯一門ありて出入す諸の聖人願力をもつて諸の夜叉神を無して此門を守らしむ若此
 法を學ばんと欲ものハ則屬實に來るをば咎めず諸聖人また願力を以て五百夜叉神を檀越として
 もし此法を學べんとおもふ者には衣食たよび調度諸式にいたるまで更に乏しきと無からしめん
 と法令を立たりける茲に又阿踰闍國の一個の僧あり婆娑須跋陀羅と名く聰明大智にして聞か即
 ち能持つ所の天性類ひ稀なり此法師彼人結毗婆沙の義を余國に於てこれを弘通せんと欲ふより
 して其身を假に痴なる狂人と成て屬實國に至り平生よ大德説法中よまじはりて聽聞すれば狂
 痴の形勢にやつしたれば身の取まはり乘失言語も并異て通例あらざれば衆人これを輕して皆其
 數にも入ざりける斯て世を經と十二年毗婆沙を聽くと數回りの文義已に熟し悉く誦持して心中
 に納めしかば本國に還らんと欲とんと去て國境の門に至て出んとす時に之を守護したる諸の

夜叉神高聲に唱令て大阿毗達磨師今國を出んと欲すと即時にとりへて大集の中に還す衆人共に
 檢問するに語絀纏として相領解せず衆人一統に狂人ありとす即これを放遣る法師後に又門を出
 んとす諸神復唱令して執てかへす遂に國王に聞て又大集中にこれを檢問する事先のごとく更
 に相領解せず斯のごとくすること既に三反去ては復かへる終に第四反に至つて諸神おくりて還
 すといへども衆人重て檢問せず諸夜叉を以て放遣て國を出さしむ法師は首尾よく本國に還る
 近に觸令して云く我既に屬實國に至りて毗婆沙を學び得て文義を具にす能學ぶ者ありハ急ぎ來
 て之を取へしと是によつて四方より學徒雲の如くに集る年既よ老衰に及たれば此法を説覺るべ
 き餘命なきを恐れて諸學者をして急疾に之をとりもひざる程に隨て之を説出せば隨て書し遂
 に全く成就することを得たり屬實國の諸師後此法已に餘國に傳しと聞て後悔せしとぞ
 【第五】 頻闍訶婆娑就龍王傳外道法 頻闍其後多くの星霜を經て佛滅後九百年中に至り
 て頻闍訶婆娑といふ外道あり頻闍訶は山の名あり婆娑ハ譯して住といふ此外道此山に住するに
 因て名とす其頻闍訶山の麓の池の中に龍王ありて名を毗利婆伽那と云り龍王よく僧法論を解す
 頻闍訶婆娑かねて龍王毗利婆伽那の僧法論を聽解するを知る故に就て受學せんを欲す龍王恒に身
 を纏じて仙人の狀貌をなしか葉屋の中に住す頻闍訶婆娑往て龍王の所に至て其學がんと欲ふ意を

のふる龍王即ち之を許し僧法論の解を説く頻闍訶婆沙此論を得て外道の法を奪はり夫より其の
 心高く大憍慢たこり此法最天にして是に過たる法有べからずと謂う釋迦の法盛に世に行れ衆
 凡多な此法大ありと譽めり我これを破べしとて即阿除闍國より人て論義の敵をうちていはく我を
 くに論義せんと欲すも我負に墮なば當に我頭を斬るべし若彼方負に墮なば彼が頭を切べしと
 いふ國王頻闍羅摩阿秩多譯して正勅日とす王此事を知て即ち頻闍訶婆沙を呼んでこれを問答て云
 く王のこれ國の主あり沙門婆羅門にたひて偏愛の控有べからず若習ふ處の行法おらんには宜く
 其是非を試み玉ふべし我今釋迦の弟子と決判いたし度候もの一頭をもつて誓を立べしと奏す
 王是をゆるしたまふ玉人をつかはして國內の諸法師を問たまふやふ誰がよくこの外道に對して
 論義をいたすもの有やもしよく對するものあれば與に論義すべしと命す時に摩菟羅他法師婆敷
 槃豆法師等の諸大法師は悉く餘國より任て在り摩菟羅國にして心固とす唯婆敷槃豆の師匠たる師
 陀密多羅法師のみ國に在せり此法師本天解なりといへども年己に老衰し神情味弱し辨說麻微
 なりされば見る影もなき行狀なれども法師のいはく我法の大将たる者悉く餘國に任て在らざる
 べしと外道強梁にして復讐すべからず我今正に應じて外道に當るべしと法師即ちこの由を國
 主に奏す王之を許して日を改め大衆を集論義堂におきて外道の頻闍訶婆沙と佛陀密多羅法師

と論義せしむ外道問て云く沙門は義を立んと欲すや又義を破せんと欲すや法師答ていはく我は
 大海のごとし容ざると云所を汝は塊の如し中に入れは即没す汝がこころの望むところに隨
 ふべし外道の云く爾ら沙門義を立てし我當に汝を破すべしと法師即ち無當義を立て云く一切
 有爲法刹那刹那に滅す師を以ての故後見ざるか故に種々の道理を以て之を成就すと是法師の説
 所なり外道一聞て悉く歸じて口にあり外道次第に道理を以て之を破る法師すでに危し大衆して
 是を救はしむ救得ると能わず法師老邁の故に遂に負に墮す此時外道の云く汝これ婆羅門種われ
 も亦婆羅門種あれば汝を殺すべからず今汝が背を鞭打て我勝を得たるを願をべしとて老法師の
 背に鞭を打て其成敗を行へり王外道を稱美し玉ひ三落沙の金を以て外道に賜ふ外道これを戴き
 て國中に布散し一切の人に施し稍て頻闍訶山に遠りける時に此外道大願を發して山中の窟の中
 に大咒術の力をもつて夜叉神女の稠林といへるを招きよせ此神女に従ふて願ふやう我死して後
 石と成て永く毀破せざらしめよと神女即ちこれを許諾ふさて衆に告ていはく若我著す僧法論に於
 て不審の條あり其趣を石面に書べし我必文字を以て厚説をべしと誓ひつゝ自石をもつて窟を
 閉ぎ中に於て命を捨るふ身即石と成れり果して其後難問のとおねは石面に書て尋るに即座に石
 面に文字を布らわし還答すとあり

第六 天親破三僧伏論雪師之耻辱 扱も天親ハ阿踰闍國に遠り來りて斯の如きことを聞給ひ此外道に値ざる事を憤り人を遣わして瑣闍訶山に於て此外道を誦しめ其我慢を折伏して以て師を辱し耻を雪めんと欲と然るに外道は身己に石と成し由闍玉ひ天親尙も憤をまじ即ち七十具實論を造りて外道の造る所の僧去論を破し玉ふ其論文を吞ふ觸るる石面に汗を流し終ふ微塵の如く碎けて一句も答ふる事能わす是によつて諸の外道等大に憂ひ我身を害するよりも甚しといへどもそざる程に天親と師の爲に誓を報ひ耻を雪たまふこと偏に高徳のいたす所也と兼人み亦慶快し國王屢天親の徳を賞し三浴沙の金を賜ふ天親此金を五分にわかちて阿踰闍國に三寺を建立し一に比丘尼寺二に薩婆多部寺三に大乘部寺等なり爾後天親正法を成立し先に毗婆娑の義を學びて既に通じ後に衆人の爲に毗婆娑の義を講す一日講すれば一偈を作りて一日説所の義を攝す赤銅の鏤を刻て以て此偈を書き醉象の頭の上より標し畏駭を撃ていわく誰人能此偈の義を破せん若破する者あらば當に出來るべしと斯の如く次第に六百余偈を造り毗婆娑の義を攝し悉く盡せり一々皆銅の鏤に刻て象の頭上に置こといづれも同じ稱あるにこれを破する者なし即是俱舍論の偈なり偈足りて後に五十斤の金并に此偈を以て屬寶國の諸の毗婆娑師に寄與ふ彼人々大に歡喜し我正法已に廣く弘通せりと謂り但し偈は書略よして意味深はれハ盡く解す

もと能はず故又屬寶國の諸師天親より贈る所の五十斤の金又五十斤の金を添都合百斤とし天親の偈が偈は盡く解し難けれハ長行を造りて此偈の義を詳かき解し終わんことを乞天親これを承諾し即ち長行を作て偈の義を偈し薩婆多の義を立てもし僻所あれば經部の義を以てこれを破す名づけて阿毗達磨俱舍論といふ論全く成て後屬寶國の諸師に寄與す屬寶の國王正勤日王ふかく皈依ましく太子婆羅秩底也婆羅譯して新とし秩底也譯して日とす此日太子をして法師とあさんと王原來おもひ玉ふにより天親に就て戒を受しめ王妃も又出家して天親の弟子と成玉ふ太子後に王位に登り玉ひ母公と同じく天親を留めて阿踰闍國に住して其供養を受んことを請玉ふ天親即ち之を許然るに新日王の妹の夫の婆羅門を婆羅多と名づく是外道の法師にして毗伽羅論を立て天親の造り玉ふ俱舍論を破して云く天親の立る所の論を我毗伽羅論とは大に相違へり天親若毗伽羅論を能解せし是を破せよ若解ること能はずは汝か論を壞るべし天親の云く我若毗伽羅論を解せずんば豈よく甚深の妙義を解せんやと仍て論を造りて毗伽羅論を破す三十二品始めより末まで悉く皆破る是に於て毗伽羅論つぶれて唯俱舍論のみ在國王賞して三浴沙の金を賜ふ天親此金を二分ともし丈夫國と屬寶國と阿踰闍國とに各一寺を建立し偈又此論讀られし外道の婆羅多し終るに悉くして如何ともして天親を伏

せんと欲るにより使を天竺に遣はし僧伽跋闍婆羅法師を阿蘭國に遣はし論を造りて俱舍論を撰
せんことを請此法師承引て阿蘭國國より來り阿蘭國を造るすに光三摩耶論一方便のつて唯毗婆沙の義
を述す三摩耶論して業類とす一に隨實論十二方便あり唯婆沙の義を撰りて俱舍論を破す論成て
後天親を呼んで更て共に面上にこれを論決せんとも天親は其義を説きといへば俱舍の義を撰ること
能はざるを知て復彼と面上に論決せず有智人は自ら其是非を知べしといへり
(第七) 悔先侃天親造大乘論一 抑天親は先も過く十八部の義を通じて妙に小乗を解す
小乗を執て是とて大乘を信せず摩訶衍はこれ佛説と非すと謂へり茲に又天親の兄たる阿僧伽法
師は既に此等の聰明人に過議解深廣にして内外に該通するを以て其論を造りて大乘を破せん
とを恐る阿僧伽は丈夫國に住せり使を阿蘭國に遣はし天親に告て曰我今疾癒くして死期に臨
めり汝急に來るべしと天親も一書を使と俱に道を馳て本國に歸り兄阿僧伽に對面有て病の
容子を尋ねたまふに阿僧伽のいひく我今心に重病あり其病の本は外より來るにあらず汝よりし
て發る所あり天親又問て云くわれより病の發するを宣ふころ不審し其故具に聞せ玉へと兄のい
ひく是甜養にあらず今汝小乗を執し大乘を信せ中常に譬喩を住す其惡業に依て必永く惡道淪ん
で無量の苦を受べ我れを悔え慈ふ其苦積りて既に卒わらざらんすと天親是を聞て大に驚き

即ち兄は願ひて大乘の深意を説きかせ玉へと阿僧伽其時大乘の要義を説くに説示し玉へば天親
原來聰明おじて殊に深識ある程此時阿僧伽は於て大乘へ理に應じて小乗も過るを悟り知り是より兄
阿僧伽成就て過ぐ大乘の義を學び後には兄の解五所房の如く悉く通達を得て解悉既に明かまじ
て前後を思惟するに悉く理と相應して飛背と有ることあり始て小乗を失とし大乘を得とするを覺
り若大乘あくんば大乘の道果あり斯まで尊き大乘の法を毀謗して信樂を生ぜず此罪業必惡道に
入ことを恐れて深く自ら其身を咎め先非を悔て兄の所にいたり數回其愚昧を陳先の誤を懺悔せ
んと欲すいまた如何して免さるゝことを知らずせめて三世の諸佛への言譯に我昔大乘を謗
しも此舌ゆへの事あれば今此舌を割てもつて其罪を謝せんと宣ふ兄阿僧伽之を留め汝今千枚の
舌を割とも更に誹謗の罪滅ぶべからず其罪を滅せたと欲せば今まで誹りし其舌をもつて直に大
乘經を讀めば普く世に弘通せば自ら其罪は滅ぶべしとむめしたまへば天親賢も心づき玉ひ夫
よりして大乘を讀したまひ阿僧伽法師寂し玉ひて後天親方に大乘論を造り諸の大乘經を解釋し
華嚴涅槃法華般若維摩勝鬘等の諸の大乘經論悉くこれ天親の造る所又唯識釋疑の大
乘三寶性背歸門等の諸大乘論を作し玉ふ凡此天親の造り玉ふ所は又義精妙よして見聞するも
あ情求せざることをあむ故に天竺及び餘の諸王に至りて大乘小乗を學ぶ人悉天親所造の論を以

て學本とす異部とよび外道論師等天親の名を聞もの長伏せざる事ありしと天阿除闍國よれひて遷化したまふ年八十歳を凡地に居すといへども理實と思議がたしと也

付法藏因緣經第六曰。尊者闍夜多臨當滅度告一比丘名婆修槃陀。汝今善聽。昔天人師於無量劫勸修苦行。爲上妙法。今已滿足。利安衆生。我受彌累。至心護持。今欲委汝。當深憶念。婆修槃陀。自言受教。從是以後。宣通經藏。以多聞力智慧辨才。如是功德。而自莊嚴。善解一切修多羅。義分別宣說。廣化衆生。所應作已。便捨命行。

高僧讚嘆鈔云天親菩薩はとめは説一切有部に於て出家受學す有部とは佛入滅の後佛弟子二部に分つ大衆部と上座部とあり上座部は迦葉を上座とする故に十の部師あり大衆部は八の部師あり根本の上座大衆の二部を加へて二十部とす今の有部は上座部の中の第一なり天親此部に依て出家して小乘を受學して大乘を誹謗したまふ後に无著(阿僧伽)の許に詣りて大乘を習學し大衆論百家部を作り玉ふ其中に淨土論一卷を造り給ふ是を無量壽經優婆提合願生偈と名せりて淨土の二經通伸の論あり此論に一心皈命を彰わし自ら願生西

方し人を勸めて専ら極樂往生を願ひしめたまへりと云々

又云天親菩薩は釋迦如來集法の中に出世し一論を説て願生西方し極超の誓願を彰わし他力の一心を示し世尊我一心皈命盡十方无偈光如來願生安樂國と偈頌を造りて人をも勸め自らも報土往生を願ひたまふと云々

九表記云天親菩薩始小乘論五百部後に大乘論を五百部造りて世に弘め給ふ合て千部の論を造り給ふ故に千部の論主といふ也され天親菩薩の本意を顯さんと思ひ給ひて往生淨土論を造り給へり切りの淨土論は禮拜門願門觀察門廻向門の五念門を釋し給へ

り此五念門は往生淨土の修行あり然れ此五念門を釋し給ふといへども假令五念門の名を知らざれども苦しからず一念皈命の信心の中に五念門も三心も皆悉く具りてあることを知らしめん爲に淨土論の初に世尊我一心歸命盡十方无偈光如來願生安樂國と書給へり是の如く一念歸命の信心を勸めたまふと云々又曰天親菩薩自己の智慧にては上諸佛の

御意に叶ひ下衆生の心に叶ひ侍るやうに成就すべからず願わくは如來の御心に叶ひ衆生の機に應ゆるやうに佛力を加へて此五念門成就さしめ給へと天親菩薩の心願を釋迦如來に告げ如來の神功を顯わんが爲に此論と稱出して心願を告給ふ也と云々

三國史記高僧傳圖繪震旦之卷

三國七高僧傳圖繪震旦之卷

○曇鸞大師傳

【第一】南北兩朝歷代 續高僧傳卷七(義解篇)曰 西河石壁谷玄忠寺釋曇鸞の
成爲 鸞 未詳其氏 雁門人家 近 華嚴山 神 迹 靈 怪 遷 于 民 聽 時 未 志 學 便
住 尋 焉 備 觀 遺 跡 心 神 歡 悅 便 即 出 家 內 外 經 籍 具 陶 文 理 而 於 四 論 佛
性 彌 所 窮 研 乃 至

曇鸞大師は北魏の代の人にして始は四論宗たりしが後に菩提流支三藏の教よりて四論の
講説を聞き聖道万行を造じて本願他力を依りて向導念の宗風を弘め給ふ北魏とは南北朝の魏
の代あり南北朝の潘朱齊梁陳隋の六代を南朝とす又六朝と云此とき同時は北朝に六代
の身後魏東魏西魏後魏後周等あり此時天下二分れて揚子江より南を南朝とし北を北

朝として各都を建て天子と號し互に天下を争ふを願ひやまずされ曇鸞は北朝後魏の人
にして第六の主孝文帝の承明元年丙辰に生れて東魏の孝靜帝(後魏十二代)卒つて東魏西魏と
分る(の)興和四年戊辰に滅す夫より八年過て北齊おこれり又高齊とも云曇鸞の在世南朝と
しては宋齊梁の三代を經るあり尙談説ありこゝに略す又四論宗と云三論宗のこともあり中論百
論十二門論の三論を依る所とするゆへ三論宗といひ又智度論を加へて四論宗といふ也則
中論八卷の龍樹菩薩の作る處の論也百論二卷は提婆菩薩の作る處の論也此提婆は付法藏二
十四祖の時第十五祖にして迦那提婆大士と稱す姓は毗舍離南天竺國の人あり龍樹菩薩に
請して付法ありしと他十二門一卷は龍樹菩薩の編給ふ論あり大智度論百卷これ亦龍樹菩薩
の作る處の論也曇鸞此四論によつて佛性常住の義をわきまらめ常に四論を講し給ひしとあり
【第二】曇鸞達梁朝陽武帝 前に出す續高僧傳に云く如く釋の曇鸞は其性氏詳
せらる曇且山西大同府鴈門といへる處の人にして其家五臺山に近き邊りにあり未志學(十五歲)
者りざる内に五臺山に登りて文珠の淨土たる靈境を尋ね其遺跡を拜して菩提心を起し即出家も
曇鸞も玉ぶ珠典群典の經籍とあれは道書備書天文地理を始めとして廣く佛教を遍達し玉ひ別
と四論の佛性に心を研み給ふ此時大業經を翻玉ふ其詞義深密にして容易明悟がたき事を根
三國七高僧傳

玉ひ此經を拜に注釋を加へし書をつくりて衆を導んと思ひ玉ひて其文言を著したまふに事字を
 過るころ不慮氣疾を發し止を得ずして權に筆を停め玉ひ周く醫療を加へ備も保養のために汾州
 (山西)秦陳の故墟に至り城の東門に入て上青霄を望み忽ち天門の洞を開くを見玉ひ六欲天(天
 天王天 忉利天 須臾摩天 兜率陀天 樂變化天 他化自在天)の次第階位上下重複歴然として齊く
 見玉ひこれに依病頓に平愈せしかば即ち前に書さしたまふ注釋を作り繼んど欲して熟思めくり
 したまふやう夫釋尊四十九年三百六十餘會の説法其以て廣多あり其上菩薩の論人師の釋誡學ぶ
 べき經論釋多し又此身のはかなき事を思ふに呼は吸と待として死する世の風なり普く經論を學
 び盡し解釋成就ささんと短命にてば及びがたし本草の諸經具に正治の法を明す長年の神仙世間
 に往々あり所詮仙術を習て長命不死の法を得るを佛敎を崇めて志願の注解を満足せば是又喜な
 りすやと思ひ立たまひ江南といふ地に陶隱居と號る仙人ありて方術其妙を得て海内普く崇敬す
 故に靈鸞これに従ひて仙術を學ばんとて北魏の地を出て南朝の都に至り時の帝に拜謁し奉りた
 き由を達せらる此時南朝の梁の武帝の大通年中なり所司等北國の房僧曇鸞と聞ていかある仔細
 おらん哉と疑ひて種々查照をなすといへども更に異なる事あらざれば頓て奏聞を遂たりける是を
 招請願國にて若や他邦よりの間者にやあらんかと疑ふ故ゆへなり然るふ帝さこしめし是は必ず

國を視ものにもあるべからず重雲殿に入べしと宣ふにぞ頓て引路ををしにける此重雲殿と云は
 其構許多にして門の數又廿余あり千迷道とて甚紛らはしき方より誘ひたり帝は先殿中の隅に於
 て繩牀に卻坐し袈裟を覆ひ納帽を被き給ふ曇鸞宮殿の前に至りて後を顧みたまふに承對者さう
 に見へす傍を見た玉ふに高坐を擗へて上に机を飾りたるありて外に坐おし曇鸞進んでこれより昇
 りて佛性の義を立ること三度帝命して宜く大檀越佛性の義深畧にして疑ありとて帝みつから帽
 子をとつて便しぱく問たまへ曇鸞しぱく答たまひて問答に稍時うつりぬかゝりし程に帝
 のたまはく今日既に暮に及べり明日猶相見ゆべしと曇鸞即ち坐を下りかたちうやくしく禮を
 なし徐々と出給ふ時に廿余の門一ヶ所も誤なく出たまふ帝これを啟覽ありて大に歎訝して宜く
 うも此千迷道は年久しく殿中に待ふるものすら常に往還に迷あるに彼法師始て來りて更も迷事
 あり正しく凡人には有べからずと類りに感心したまひつゝ明旦にいたりては大極殿に迎へ入れ
 帝禮接を厚くしたまひ由て來るところを問給ふ曇鸞答ての玉はく野僧佛法を學ばんと欲するも
 年齢の短きを悲しむ故に遠々此國に來りて陶隱居に従ひ仙術を求めんと致すなり帝のたまはく此
 仙世を友とせざる隱遁者にして近頃數回よべども來らず心ふ仕せて方々に住す導師先書簡を以
 て標榜を懸ね而て至り給へと曇鸞みかこの命に隨ひ書を以て尋ね給ふ陶隱居答日去月耳聞し音

二十七卷淨土傳來相承の宗祖なるがゆへに天親菩薩の後北三藏に皈すと二藏義に見えたり
 後すもに流支三藏義大師に授け所の淨教は南山(唐高僧傳作者道宣)の説によれば觀無量壽
 經と云又雲棲(阿彌陀經義疏作者)の説によれば阿彌陀經といへり近世の日溪(江州日野正崇
 寺法孫)は大無量壽經といふ連如上人の正信偈大意には南山の説よりて觀無量壽經とし給
 ふ然るに三論の系譜には流支天親の淨土論を授くとあり淨土論は流支の將來にして自これを
 轉而して此論を曇鸞師に授く故は曇鸞此論に注解を著し給ふからん歟後人尙考へし
 (第四) 魏帝崇曇鸞二葬秦陵文谷 魏の帝王曇鸞大師を崇めて神樹と號け給ひ勅を下し並
 州の大巖寺に住せしめ爾後汾州北山石壁の支忠寺に移住せしむ又介山の陰に往て徒を聚めて淨
 業を蒸む今櫻公殿といふ是あり魏の興和四年に卒し玉ふ春秋六十有七臨終の日に至りて虚空よ
 り花降くたり幡天蓋等寺の宇を覆ひ香氣四面に蓋じ音樂の聲一げく寺に登る數多の衆人みあこ
 れを見聞す事の由を帝に奏聞す勅して汾西秦陵の文谷に葬りて靈廟を營建し並に石碑を建て師
 の高德を録し給ふ今も尙存在すと云々(已上續高僧傳の大意)
 淨土論下云沙門曇鸞法師は并州汾水の人なり魏の末高僧の初僧在せり神智高遠三國の人皆りの
 傳を知る衆の經卷に詳なると人外に獨歩す梁國の天子蕭正恒に北に向ふて曇鸞菩薩と禮したす

ふ天親菩薩の淨土論を注解し我て兩卷とす又無量壽經奉讃七言の偈百九十五行并に問答一卷を
 撰集して世に流布せしめ遺俗を進めて決定往生諸佛を見奉ることを得せしめ常に龍樹菩薩に隨
 終の開悟を請給ふ願ふ所願の如く一夜聖僧の像を現して忽に來りて唐室に入と云々我は是龍樹
 あり便ち説て曰く已に落たる業の枝に附べからず未だ束ねざる業は倉の中に求むべからず白駒
 際を過ぐ書くも留むべからず已に去るは夜がたし未來追へからず現在今何かあらん白駒廻る
 べき事難し法師妙に言旨を達す是終に告る事を知りこれに依て即ち夜中に諸方白衣の弟子
 及び寺内出家の弟子は告ぐ今既に身終すべしと三百余人一時に雲のごとく集る曇鸞沐浴して新
 もぎ淨衣を着し手に香爐をとりて西に向き坐し門徒に教誡して西方の業を察む日の初出る時大
 衆聲を齊しくして彌陀佛を念ふ便ち終つたなり此寺の西五里の外に比丘尼寺あり並に是門徒あり
 り早朝堂に集りて粥を食する時空中に微妙の音樂聞へ西より來て東に去るを見る其所に集る
 衆人皆これを奇異なりとす甲に智者ありて我衆に告て云く法師和上一生八萬教べて淨土の業を
 信せしむ今此者樂東に向ふて去るのほ必ず是法師を迎ひに來るあるべしと食訖て頓に法師の所
 ま訪らばんとて既に身を出んとする時又書樂空中にありて東より西に向ふて去るを聞尼僧等相
 與に後し蓮の心蓮を踏み足踏み天樂ありとて見ると云々(已上續高僧傳)

〔第五〕 魏龍機見曇鸞、曇鸞師化度風淨土往生傳上云(上略)一夕機正持誦見一梵僧、掀帟而入其室、曰吾、臨樹也其所居者淨土焉。以汝有淨土之心故來見汝、鸞曰何以教我、機曰已去不可及、未來未可追、現在今何在。白駒難與廻、言訖而失。機以所見、勝異必知死生之期、戒矣。即集弟子數百人、盛陳教誦言。其四生役々。其止無日。地獄諸苦不可不懼。九品淨業不可不修。因令弟子齊聲高唱阿彌陀佛。冥乃向西冥目。頓頰而示滅。是時道俗同聞。管絃絲竹之聲。由西而來。由西而隱。魏主曰此誠佛子之真修其所。版也有在矣。勅葬汾西之文谷。仍條其生平所習。以立碑焉。瑞應刪傳。新修往生傳。上龍舒淨土文。五樂邦文。三佛祖統紀(二十八) 蓮宗寶鑑四歸元直指集上諸上善人。歸往生集一等に出たり。皆大聖同也。

安樂集の下に曰曇鸞法師康在の日常淨土を修す亦毎に世俗の君子あり來て法師に阿て問て曰十方佛國皆淨土とす法師獨意を西に注し豈偏見を生ずるに非や法師對て云吾の既に凡夫智慧淺短して未地位人されの念力均すべけん哉草を置て牛を引恒に心を槽檻に繋べんか如し縱放全く所版なきことを得んやと復曇鸞法師の語すといへんを法師獨決す是を以て一切道

俗を問ことなく但法師と一而相遇者もし未正信を生ぜされば勸めて信を生せしめ若己に正信を生ずる者には皆すゝめて淨國に皈せしむ是故に法師命終の時に臨んで寺の傍左右の道俗を旌華院に映するを見ことしく異香音樂迎接して往生を遂るを聞と云々

曇鸞大師一代の化度の風は先第一は天親菩薩の往生淨土論は文句甚だ簡略にして愚昧の者に取惑ふ所多きが故其論に注釋を加へて往生論注といへる上下二卷の書を作り給ひ自力他力の深義廣大無偏の一心の所由をねんころに示し給ふ此論注の注の字は潤といふ文字よて水をうゝき掛けハ物きつぱりと顯るゝ如く淨土の中に教化したまふ天親論主の思召の賜を探り出して示し給ふといふ意あり又解といふこと前にしぱあり此解の字はとくとといふ文字にてもつれたる糸をほききて見せる意なり文字の作りかたをいへば角扁は牛に従ひ刀は從文字よして唐土において牛の料理をなす時下手なるものは思ふがまゝよ切ざるのみあらす時を移して手際あしく尤是は其料理の仕方にならひありて骨のつがひ切處を覺しものは早くして骨と肉と能分りて其手際いささよし唐土は庖丁といふもの此料理に妙を得たる者あり故に牛を解刀を庖丁といふあり莊子曰庖丁文惠君の爲に牛を解て曰臣の刀十九年解とてころは數千年にして刀の刃又新に研たるが如しと云々されば數多の牛を料理なせとも刀の刃の損するて

となしといへり其半を解まりして轉じ來りて何事なまらず物のさつかりと手際よく筋道の立
 ことをば此解の字を用ゆ又淮南子にも屠牛一朝の解を吐く九牛屠刀もつて毛を判ると料理の
 上手をいへり夫よりして要を解或は思を解をいへること遣ふもみなるつれたる糸の如く赤
 るを解ことゆへ判也講也説也釋也と字注せり今も淨土論の自力他力の道理往相還相の二回向
 の謂一心皈命の安心を明に決判し講釋し給ふ曇鸞大師の注釋の解にあらざれば天親菩薩の論
 判は愚なるものには義理分明ならざる也

再説曇鸞大師は釋尊入滅の後一千四百二十五年後魏の孝文帝の承明元年丙辰に誕生し給ひ
 東魏の孝靜帝興和四年壬戌の春秋六十七歳にして入滅したまふ即日本人皇三十代欽明天皇
 の三年に下る

曇鸞大師往生論の註をつくりて論の不如實修行相應を釋るて三信三不信相對の釋を設給へり
 此釋は原論の一心皈命の一心を釋するより起りて三信は他方の一心の細釋にして他方の信心
 あり三信の自力の信心の相あり論に稱名憶念すれども無明由在で所願を滿せざる者あるこ
 とは如實修行相應せざるに由るがゆへありと云へり不如實修行とは自力雜善の修行をいふ如
 實修行とは他方信心の行をいふ也故に注に不如實修行を釋して又三種の不相應あり一には信

心薄からず若存若亡するが故に二よは信心一ならず決定なきが故に三には信心相續せず餘
 念間が故にといへり第一の不信心の弱之信心堅固ならず或は煩惱重く罪障の強きに
 身を卑下し又信の甲斐なく行の怠につけて本願を危み若善心も起り妄念もうすら念佛の
 いさばしき時は往生すべしと思ふ斯のごとく或ときは往生すべしと思ひ或ときは往生すべか
 らずと思ふ故にあるかどすれば無かり無かと思へ有故に若存若亡といふ第二の不信の自力雜
 善の執情やみがたく他力往生の正念落つかや故に體に往生決定と思ひ定むる心なきなり第三
 の不信の或は雜善をまじへ或は助業を勵み或善本起行の念やます斯のごとく余念雜るゆへに
 信心相續せざるも此三不信の自力の信ありしかればかやうの自力根性を振すて一向一心に
 稱名念佛して佛恩を喜ぶを三信とも他方の信とも一心皈命ともいふ故に註に三不信を釋し已
 て此と相違するを如實修行相應と名く是故に論主建よ我一心と言ふと言へり是に上れば論主
 の一心と言ふは他方の信心也と云

○遺釋禪師傳

〔第一〕道綽到石壁谷一拜三禮師碑 遺釋禪師の傳ハ續高僧傳第二十四(習禪篇)および瑞應
 傳新舊往生傳中佛祖統紀二十八 諸上善人跡往集一等に由せられた大阿闍梨には續高僧

傳の大意を以て著すあり抑禪師は釋尊滅後一千五百十一年に唐の并州の晉陽汝水縣に生れたまふ則後周(北朝)の武皇帝の保定二年壬午と云々

按ずるも此年後周滅して後梁の明帝天保元年あり南朝の陳の文帝天嘉三年に當る蓋後周の代に生れて化を唐朝に盛にす故に唐の道綽禪師と云なり

道綽姓は衛氏弱齡とき俗間に在りて閩里においても恭讓を以てすと云て人を敬ひて侮らす少長ともに其禮節を専らとす人みる是を稱美せり十四歳にて出家し廣く諸教にわたる殊に大涅槃部を宗として弘傳し給ひ講すること二十四遍(涅槃部は日本に將來せず其大概をいへば天台宗に比すへも彼宗より五時八教を立るに法華涅槃は同醍醐味にあり一時とするを以てあり後に瑣禪師

につかへて空理を修行し給ふ瑣禪師大に嘆美してこれを愛す四方の徳に沾ひうの名遠近に高し衆人しばしば尊敬せり一時汝水石壁谷玄忠寺に登り玉ふ此佛刹は曇稱大師の建立にして則文

谷に禪師の碑あり道綽こゝに詣はしめて碑の銘をよみて大に稱謝していはく曇稱と吾と其の智をくらふれ八月と星との如く其徳行をいへば珠と瓦とのごとし其曇稱師すら尙四論の講説を關

て本願他力をたのみ仙經を燒すてふかく淨土に歸し玉ふ況や我淺智をやとすなほち碑前にひそまづき回心して淨業を皈しあふまねがけく誠後の弟子と思じりされ哀愍覆護し玉へと在すが

如く心願しつ未よりしては是まで修學し玉ひし涅槃宗を迷に捨て禪師の往生論注を指南とし此玄忠寺に在住し自行化他し玉ふ嘗て行道し玉ふと念僧ありて道綽佛を念じ玉ふ珠散七寶の山の

ごとと見る又西方に靈相を見ごと數回あり此によつて盛徳日々に増り榮譽遠くおよんで道俗女子赴く香山に充り恒に觀經を講すること二百遍人みる手には珠散を摘口に佛號を唱ふ毎時退

散のひびき林谷に彌れり或は邪見にして信せず是を毀謗するものも一回道綽の柔和あるを見て氣をのまれ皈伏す曾て貞觀二十二年四月八日をもつて將に命の盡んとするを知て普くことの上し

を衆に告ぐこれを聞つたへて來もの山寺よみつ此人々皆曇稱大師七寶の船に乘來り道綽に告て云汝淨業すまに成して往生すべき堂成就す然れども餘命未盡すとのたまふを見る並み化佛空

中にましくて天華を散すを見る群衆の道俗其天華を袖たもとにうくるに薫れる香氣いふへからや又往生證據のためふ乾ける地に蓮華を挿て試給ふに萎まざること七日におよんで猶鮮

あり其餘の善相記するに違わらず年七十に及んで齒落ちたふ生すると本のことし爾のみならず氣力健にいて容色盛なり淨土の法門を説講したまふに理味奔流にして辨舌懸河の如し又人

は彌陀の佛名を念する事を勤む所或は麻の實大豆小豆等を用ひて數を取りしむ一同唱ふる毎に便一粒を置き所の如くして數百萬粒を積入るは是も事によせて一處を攝め縁を靜めんと爲す

三國七高僧傳

五十二

道俗その風を慕ひこれを修む者多し又道禪自ら常に木梨子を珠數として諸の四衆に遺つて其稱名念佛を教へしは凡て禪瑞を呈し其心行圖を教ふる淨土論兩卷を著し遠く龍樹天親の法門を談じ近之の曇鸞慈遺の心をのぞ大に淨土を尊崇し明王昌首を示す文旨要を該諸の化範を詳かに其それ化導を兼るの年をかさねて益々かんたみ道禪淨土を宗としてより坐するに常に西に向ひ晨宵假にも西を後よせず六時篤行化行はむめより行ひ缺さず行住坐臥に念佛止となく日々七方を以て限とす沙門道撫といへる名勝の僧京師より來りて玄忠寺よりたり道禪に請して淨土の行業を同ふし共に淨教を弘通せり道禪今年八十四にして神氣明 爽あり (已上續高僧傳の大慈也)

道禪禪師は西河といふ所に生れ給ひ晉陽文水縣の石壁谷玄忠寺より住し給ふ故に西河禪師と號し又後玄忠と號す玄忠寺ハ曇鸞大師の建立こと云々

淨土論下曰沙門道禪法師ハ并州晉陽の人なり好ち是前高僧大樹法師三世已下の懸孫の弟子にして涅槃經一部を講す常に釋法師の智徳の高遠あるを讚嘆す自ら云相去こと千里懸殊と尙講説を捨て淨土を修む已に往生するを見る況や我小子の知こと何解するところ何を多として此を勝て徳をするに足ると大業五年上り匠來即講説を捨て淨土の行を修して一向に専ら阿彌陀

佛と念す禮拜供養相續して間無身觀已來有縁を斷絶せむ爲に時々無量壽觀經一卷を敷演して并土の普明大願粉本三願の道俗を示誨す七層以上あらひに彌陀佛を念することを解る上精進ある者は小豆をまいて動として彌陀佛を念す八十解或ひハ九十解を得中精進ある者は五十解ある者下精進の者は二十解を念す諸の有縁に惹つて西方に向て梯屨便利せず西方に背て坐臥せざらしむ安樂集剛卷を撰て世に行はる貞觀十九年歲次乙巳四月二十二日悉く道俗と別れを告ぐ三縣の内門徒別に就て前後斷ず縁を断ずべきと難し廿七日に至て玄忠寺に於ひて終すとされ白雲西方より來るあり觀じて三道の白光とある自房の中に於て徹照通過して終ふ詭る乃ち極微積微を燒時復五色の光三道空中に現せむ日輪に映じ透るめり詭て乃ち止む復紫雲二度墳の上に於て現するあり遺俗の弟子同此瑞を見ると云々又淨土往生傳に依に前に高僧傳に見ぬたる道撫法師は久しく玄忠寺に有てその後寺を去五時道禪禪師と互に離別の情をのべ淨土の再會を期して他國に赴き陳進せりしが道禪の往生したまふことを三日過て聞て其日道禪の行をまつて道禪先立んと想ひに無功ち後をりや每一息の功を加へて見佛の期を過す下道禪の彌陀の尊像の前にて國を隔てて道禪の往生の聖に就て終に終ると聖應酬の靈光普照生佛佛國統統上善人歎 靈光普照大に喜ぶし

立塔等々の功德を營によつて受戒の出家比丘大僧を驅使ひ策役す三は屋宇を營造するに虫
 の命を損奪ひ傷る道綽むかし此罪を犯す久しくして懺悔せず故に罪益重し第一罪ハ二百五十
 戒の中の衆學第八十五の安佛下房戒を犯せる罪あり今時の行者平居座臥の處は佛像を安置し
 て褻瀆の罪を得る在家無戒の者にては恭敬修を欠ゆ悉に念佛の信者の作業にあらざる祖師の教
 に背く況や道綽大僧の身とし犯戒の罪なれば十方の佛前に於て第一の罪を懺悔すへしと之第
 二の罪は具足戒の中の掘地戒の所制を犯すの罪なり道綽むかし寺を造り塔を立るときに受
 戒の比丘大僧を驅使ふて律制に順せず俗士の奴婢を役するが如し諸の比丘衆道綽に駈つかわ
 れて心ならず犯戒すること多し貧一人に歸するなれば皆道綽の罪となる故に四方の僧の前に
 せ第二の罪を懺悔すべしと也第三の罪も又波逸提の中の掘地戒を破るの罪あり是又比丘大僧
 の宜しからざる處あり故に一切衆生の前に於て第三の罪を懺悔すべしと也しかれども此三罪
 ハ具戒の中の犯戒の罪成ハ道綽の智行兼備たる身上にてハ趙壁の環の如し今時の出家の擧足
 下足一語一念の起不起三業悉く犯罪あらざるなきとは雲泥の遠あり但無戒の僧の上にては
 只其罪のみよして制罪なし道綽の御身にては律制罪を加ふる故に反つて今時の僧より重し併



院中
 諸宗ノ願
 徳難易ニ
 道法門
 タノス

あから此三罪を懺悔せよと佛勸あるをもつて見れば其外には罪業芥子ばかりもなき事ありわ
れたり又曰道綽の三罪は往生の障となるや若爾りといは念佛の功德逆惡尙減す況や其余の
罪をや若此三罪實に往生を障へは經論誠說皆妄語となり罪惡凡夫は往生の望を絶すいかん心
得べきやと云ふにこの義に附て古來よりさましく説ありその中實に往生の障とならねど
も如來抑止門の方便なりといひ又は道綽へ上品往生の机なり故に三罪障とある若下品の往生
なれば三罪障とならずといふ是等は他力真心の意にあらす又或説に三罪の業事成辨の障よし
て往生の障にあらす(淨土述聞鈔)此義甚深あり道綽この三罪ありて往生せざるも非ず只是三
昧發得の障あり若凡夫あれば平世に業成せざれども臨終に見佛し業成して往生するゆゑに更
に歡く所よあらす又道綽は善智識の御身あれば作業の上にも不相應の行儀あれば道俗の手本
とあるゆゑに随分つゝしみて如法に勤め給ふべし若爾らざれば衆生濟度の方便に害あり故
に往生の障りにばあらねども如來の大慈方便よて懺悔せよと言ふあるべし
道綽禪師は曇鸞大師面授の弟子にもあらす曇鸞の梁朝の人道綽の唐の世の人にして年代一百
餘載を隔たり然れども玄奘寺にして曇鸞大師の碑文を見て淨土に歸る曇鸞を師として尊崇し
たゞ是依用相承として直接相承にあらす異説には七寶の海中よて曇鸞より淨土の法門他方

の安心之相承し三國傳來の經書十念を口授し給ふといひ高僧傳經記等の諸傳に載ざる所也
撰人傳ゆんバ和人なんぞしらん哉只これ異流の末學奉隨附會の説よして取にたらや絶る倒す
に堪たりと云々

○善導大師傳

〔第一〕善導入三經藏一採有緣經一 善導大師は隨の煬帝の大業九年癸酉生れ唐の高宗の永
隆二年に往生したまふされは隋の代に生れ玉ふといへども唐朝に於て化益盛なる故に唐の善導
和尚と號す姓ハ朱氏よして泗州の人なり(瑞應傳)或は臨淄の人也(新修傳)と云へり幼くして密
州の明勝法師よしたがふて出家し常に法華經摩訶二經を誦したまふ明勝法師は三論宗にて法朝
大師の門人の嘉祥大師と同室の學者なり一時西方淨土の變相(曼陀羅あり)を見て嘆して曰何に
して質を蓮臺ふ託し神を淨土に接しむべきと欲求淨土の心を發し給へり爾後具足誠を妙開律師
に受るに及んで共に觀經を見て悲喜交嘆し給ふは是實に佛道よ入の津要なり余の行業は迂僻
にして成じがたし唯この法門のみ速に生死を越るの法あり今まで可憐の佛法に逢ふること悲
しみ今と云今宿善到來して他力の法に逢ぬることの嬉しやと大よふことひ給ふ善導或時心に思
惟し給ふ凡佛の教ハ隨分得念にして根欲は隨つて隨くる故に若根法相應せぬと云ふ勞し

て抑おし然れば吾は有緣の法を求めんと思ひ至り則ち經藏の中へいり我れに有緣の法あらば授け
たまはし眼どとと一心に手はまがせて探り得んは觀經を得たり偈ハ有緣の經にて有ると共に喜
ひ至り讀誦し習學し玉ふ爾後道綽禪師の善陽徒を觀經を演説したまふを聞て貞觀十五年八月廿
九才ハ千里を遠しとせしめて道綽の所まいたつて志を展たすふに道綽すなわち觀經を授けた
まふ是觀經ハ有緣の經なる上に今また道綽より相承したまふハ因縁の深厚なる事をよろこび夫
より觀經によつて三昧獲得し定中に於て淨土の依正の莊嚴を拜見したまふに出定入定さわりあ
しと云々又東都の釋英法師は嚴經を講するも四十遍道綽禪師の道場に入て三昧遊んで歎じて
曰自恨多年空交疏をたげねて身心を勞する時向を期せん念佛不可思議ありと善導日經に戒言
あり佛堂安坐したまはれやと又善導平生常樂念食する毎に自責を曰釋迦尚乃分衛す善導何人ぞ
端居にして修養を素ん乃至沙彌ならびに禮を受事轉陀羅を寫とこと千万卷淨土の變相を畫き給
ふと云々二百餘見の程の塔廟修理を加へざるは善導佛法東行より已來未だ善導の如き盛徳ある事
あり(善導傳記卷之三)

新修往生傳中にも善導の真觀中道禪師方等觀を習ひ以て淨土尤品道場は觀經を講るを見て天
に喜ひて曰や善導は佛道に入の變法門の持運者也善導の徳を讃めて成も難し唯觀門速に生死を越る

の建徳寺とてこれを傳ふる事甚だ於て篤く勵精して國命を救ふが如く、續て京師に至りて四部の弟子を
 聚がし、翻めて其腹を隔て、彼屠沽の輩に至るまで、青々開悟す。又堂に入ては、合掌し跪きて一心に
 念佛せし、月の轉るは非ざれば、休す。寒冷にも汗を流し、此行狀を以て至誠を表す。出ては、則人の爲
 に淨土の法を説くも、乃の道俗を化して、道心を起させ、淨土の行を修せしむし、はらくも利益
 せざるとなし。三十余年、嚴處を設すし、はらくも睡眠せず、洗浴と除き、また曾て衣を脱す。般舟行道
 禮佛方等を以て、身の勤とす。戒品を謹持して、迄末も犯さず。目を擧て、女人を見ず。一切の名利心に
 念と起さず。假にも綺詞戲笑せず。往處争て、供養を申、飲食衣服の四事、豐あれども、皆自納めず。もつ
 て、他に施し、好食あれば、大厨よ送りて、徒に供養し、其身ハ唯麤食をくらひ、僅も身体を艱ひて、足り
 とす。乳酪醍醐のみ、飲嘆せず。あらゆる親施は、將て料紙として、阿彌陀經を寫すこと、十万余卷。書く
 ところの曼陀羅三百餘、又破壞せし伽藍、および故き磚塔の類、ひみも悉く修理を加へて、營造し、燈
 とをばし、明をつぐと、嚴常にたゆるとなし。三衣瓶鉢を人に持せず。洗はせず。尤始終改るともし、又
 諸の有縁を化度して、常に自ら獨行し、大衆と共に遊行。玉は、や人と連立ゆけ、ハ世間の話もどあり
 て、行業を修する妨有ゆへなりとぞ、其誓く、禮誦を申て、法を説を聞あるひは、道場預りて、親しく
 教訓を承け、是は曾て見聞せざれども、其教誨を授き、善く淨土門入りあり。或ハ展轉して、淨土の

法門を授り、共に修するあり。京師諸州の僧尼男女、或ハ身を高き岸より投じて、命を捨、又は深き淵
 へ命をすて、或は高き樹の枝より墮、或ハ身を焚て、供養する者、略四方に聞ゆる者、百余人。又妻子を
 捨て、阿彌陀經を誦すると、十方より、三十万遍に至る者、又阿彌陀經を念じて、日よ一、一万五千より、十
 万遍にいたる者、たよひ念佛三昧を得て、淨土に往生するもの數を知るべからず。或は善導に問て
 曰、念佛して、實に往生を得るやと、答曰、汝が念る所のこと、汝が願ふ所を遂べしと、對へて、善導
 す、まはち自ら阿彌陀佛を念じ給ふ斯の如く、一聲したまへ、則一道の光明あつて、其口より、出十
 聲、百聲、光明、又此のこゝし、善導人に謂て、曰、此身厭べし、諸苦逼迫して、情偽變易すると、暫も休息を
 しと、乃住する所の寺の前、ある柳の樹に登り、西に向ひて、曰、願くは佛敕神願をもつて、我を接し、觀
 音勢至亦來て、我を助け、我この心正念を失わす、驚怖を起さず、彌陀の法中に於て、以て退墜を生ぜ
 ざらしめよと、願畢て、其樹上より、身を投じて、自ら絶す。時に京師の士大夫、誠を傾け、歸信して、皆其
 骨を収め、以て葬る。高宗皇帝、其念佛の口より、光明出て、又捨報のとき、精至かくの如きを知り、寺額
 を賜り、光明寺と號す。云々、淨土往生傳中、淨土寶珠集、四淨土文、五樂邦文類、三蓮宗寶鑑、四佛祖統紀
 二十七淨土指板、下諸上善人、蘇往生集、一等みな善導大師の傳を載て、全く上に擧る。新修淨土往
 生傳、同と云々。

僧善導大師は前よも言る如く幼少よして密州の明勝法師より出家し給ひ法華經維摩經を
 修學し給ひ自ら思やう佛教の教門若干にして道一途にあらざる若其儀よ契わされば勞して功な
 じと夫より經藏に入らせ給ひ目を閉手にまかせてこれを探り我有縁の經をとりせ給へど念じ
 て淨土の觀無量壽經を探り得給ひ大に喜觀經の十六觀法に於て恒に思惟して唯西方に心を
 注給ひ終南の偈真寺よ述をとめ後に道綽禪師に見えて專念佛一行を自行化他ましく六十
 九歳よて寂を示し給ふ

〔第二〕 善導夢見淨土諸相一並諸說

さる程に善導大師は御師匠道綽禪師より弘願他方の眞
 面目を授り給ひ御自身の往生の決得し給へども觀無量壽經といふハ十六の觀法を説たるゆゑ
 にさしも名高き天台大師を始として淨影大師嘉祥大師あや云高僧方み亦自力の眼より觀經を
 見損ひ自力修觀の經と見給ふ故さぞかし末世の愚痴ある衆生自力に迷ひ折角に彌陀超世の本
 願に値ふがらたどへば飯櫃を枕にして餓死するに齊しく空しく生死に流轉せんとを憐給ひて
 十方諸佛に證據を乞願わせ給ひ觀經の四帳の疏を作り古今を指定すると大言を吐て末代濁世
 の衆生往生の道に迷わざるやうに給ふ御二代の製作は觀無量壽經疏四卷法事讚二卷往生
 禮讚一卷觀念法門一卷般舟讚一卷臨終正念訣一卷勸化徑路修行頌一首等あり現に世に行わる

就中觀經四帖の疏は第四卷の尾に自ら感じ給ひし靈相を記して日敬て一切有縁の知識等に白
 す余の既よこれ生死の凡夫智慧淺短なり然るも佛教幽微にして敢て輒く異解を生ぜず遂に即
 心を標し願を結んで靈驗を請求めて方に心を造すべし靈虛空遍法界一切の三寶釋迦牟尼佛
 彌陀佛觀音勢至彼土の諸の菩薩大海衆及一切莊嚴相等に南無し歸命し上る其今此觀經の要義
 を出して古今を指定せんと欲す若三世の諸佛釋迦佛阿彌陀佛等の大悲を願意ふ稱へば願わく
 と夢中に於て上に願ふ所の如く一切の境界を見ることを得んと佛像の前に於て願を結び畢り
 て日別よ阿彌陀經を誦すると三遍念佛三万遍して至心に發願す即當夜に於て西方の空中を見
 るに上の如きの諸相境界悉み顯現す雜色の寶山百重千重種々の光明下地を照す地金色のこ
 とし中に諸佛菩薩あり或は坐し或は立或は語り或は黙し或は身手を動かし或は住して動かさ
 る者あり既に此相を見て合掌して立てみる良久しくして覺覺已て欣喜よ勝すこゝに觀經の幾
 門を認む是より已後毎夜夢中よ常よ一僧ありて來て玄義の科文を指授す而して更又見ず後時
 下書をしおはつて復更に至心に七日を期として日別に阿彌陀經を誦すると十遍念佛三万遍初
 夜後夜よ彼佛の國土の莊嚴等の相を觀想して誠心一に經法の如くす當夜即ち三具の陪輪道
 の邊に轉轉するを見る然ち一人白鬚龍に乗來て前んで勸めらるゝあり爾處に勢由て決定往生

して退轉することなかれ此界は穢惡にして苦しみ多し貪樂を生ぜざれと誓て曾大に賢者の好心の視諷を蒙る其命の畢を期として敢て懈慢の心を生ぜずと云々

第二の夜阿彌陀佛身眞金色にして七寶樹の下の金蓮華の上より在して座し玉ひ十指圍繞して亦各座す佛樹の上に天衣かゝり繞るを見る面を正ふし西に向ふて合掌し座して觀奉る第三夜兩の幢杆極て大に高くして幢は五色を懸く道路の縱横人を觀ること礙なきを見る既に此相を見己りて即便休止して七日にいたらず上來あらゆる靈相は本心物の爲にして己身の爲にせず既に此相を蒙りて敢て隱藏せず謹んで以て義の後に申呈して聞を未代に被らしむ願くはこれを一切の衆生に聞しめて信を生せしめ有識觀者をして西に婦せあめん此功德を以て衆生に回施して悉く菩提心を發し慈心を以て相向ひ佛眼を以て相見菩提の眷屬として眞の善知識とあらん同淨國に歸して共に佛道を成ぜん此義己に證を請て定畢の二句一字加減すべからず寫さんと欲する者は一經法の如くせよ應に知るべしと書置たまへり尤是より前の高僧方の佛の正意に違ひ給へるといふに非ず是は上にいへる如く淨影大師天台大師等の高僧觀經を見損かひ佛の正意あらわれず五逆十惡具諸不善の惡人女人を本とし給へる超世の願意をしらず上品は大乘の善人あぞと云て假にも極惡の凡夫の爲の經としらず爲未來世一切衆生爲煩惱賊之所害者

の釋迦の正意も隱没して顯れざるを善導大師古今を指定ましし淨影天台等の誤謬を糾し佛の正意二尊の國を探りて注釋したまふあり爾善導大師一代の花導を案するに其自行をいはば頓然を拂ふが如く佛前に向ふて念拂し給まふは寒天に汗を流し力を盡して暫くも休まず三十余年間一夜も寢所に入たまはむ帶紐脱て安かに臥給ふとなし行水の外衣を脱給はず三十年の間目をひらきて女人を見ず一切の名利を離れ假にも戯れ言あくあたことを言問われば念佛をとあへ眠る間われば稱名相續し給ふ實にこの行狀の堅固あること双ふ人あしと云へり問云うの行狀ハ全く聖道の行にして横川大師の外儀の相ハ異りと言ひ又男女貴賤悉彌陀の名號を稱するに行住坐臥も悉らばれず時處諸縁も隔なしといふに相違するに非ずや答て云是は畢竟僧分の行儀あり尤うの頃は聖道盛あるときゆへに行狀嚴あらざれば人の信仰なきが故に先自行を堅固にしたまひ化他の邊にいたりては龍樹をいじめ各異るとなし故に我等愚痴身といひ自身に現にこれを罪惡生死の凡夫とのたまふ往生の信心に於てハ更に我等と替ることなし又僧俗とも信の上の行義にいたりては放逸無漸なれといふにハ非ず取わけ女ハ高慢心ふかき者にして遊ぐ時不遜なり余も心易くあすときまは敬ひを忘れ御教化までを輕しめ侮る淺まらざると思ひ知らざる爲に斯の如くもたまふなむたゞハ妻帯の宗門たりとも坊主頭も類

被りて遊賣の語を引見たりし色面をそめくたど無常無常をちしといふべし當りたら
 尙しかり況や善道門の威儀嚴重なる時節に世に出給ひし善導をれば履につけ願につけ深き母
 めしあると也斯徳行すべし給ふゆゑに前に云漸修往生傳にいふごとく大師の遊行し給ふ所毎
 に道俗男女群衆を供養する故に飲食衣服みち／＼たれども受給はず施主を勸めて大厨へ
 贈り大衆に供養し御身は鹿巾のみ用ひ給ふ又金銀の類は皆阿彌陀經を寫し給ふ紙墨筆等の料
 に用ひ十万余巻を書給ひ絹書具を調へ極樂の曼陀羅を三百余書き給ひ又寺道場の修葺の料に
 諸方へ寄附し給ふ又平生托鉢に歩き給ふを弟子の人を誅申て此烈しき勸の上に托鉢し給ひて
 は御身を續き給ふまじ是は止り給ひて然るべしと申上げれば頭を振ていな左にあらず淨飯大
 王の太子三界獨尊の釋迦加來すら常に分衛し給ふ善導をんぞ居ながら供養をうげんや逆托鉢
 し給ふ又往還を人をつれ給ひす常に獨歩したまひ連あるときハ世の話にまされ念佛に怠るゆ
 へありとぞ只稱名を絡連にすれハ大勢連よりも心便りありとのたまふかほどに勸め給ふゆゑ
 御教化にあふもの早く淨土へ参りたしと高き所より身を投げ深き川に身をしづめ捨身往生
 するもの百余人に及ぶ又妻子をうち捨阿彌陀經をよむもの才西邊より卅万遍いたる又念佛五
 万三万より三十万遍を稱するもの數をしらむと記せり又自ら念佛し給ふには一壽一に一体

佛身光明を放て善導の口より出たまう尤善導の化導深切なりといへども末世の衆生疑ふか
 きゆゑに是を晴さん爲に經藏を盲探りにあし給ひ又十方の諸佛釋迦彌陀二尊に證を請ひ給ひ
 四帖の疏を書給ふよそ毎夜一人の僧來り給ひ玄義の科文を指授し給ふ是則極樂の教主阿
 彌陀如來の指圖に依處にして善導が了簡よあらず寫して拜見せんと思ふ徒は佛經の如くに
 敬ひ一句一字も増減すべからず說のまゝ信ぜよと宣まふ觀經は釋迦の直說それを阿彌陀如來
 の御指圖によつて書たる程にまある三昧發得の善導の御教化にしていづれも疎はあけれども
 別して大切なる御教化あり上に云ごとく天台大師妙宗抄を作りて觀經を注釋し給ひ淨影嘉祥
 みる注釋を加へ給へども唯十六觀法を説給ふを佛の本意とのみ心得て隱彰の實義を知給はず
 下々品の臨終の十念にて往生すと説給ふ散亂の念佛にあらす正しく觀念の念佛の功德の勝
 たる故ありといふ若しからは今日の衆生平生より定水を疑せハ謙浪浪に動き心月を觀すれば
 定念の雲覆ふて靜る暇もし况や臨終斷未魔の苦み火の車に腰をかけたる者何る觀念に堪ん然
 かに善導大師佛の正意を窺ひ給ひて汝若不能悉者稱南無阿彌陀佛とわれは觀念すると能すハ
 火車にて南無阿彌陀佛と口に稱へよ往生するまじ善知識の勸めを聞て如是至心と稱へるハか
 りの往生ぞと心に受たる一念に往生三定して具足十念の稱名ハや往生治定の上の佛恩報謝

の稱名さればこそ下中品よは聞己即生と説たまへり一期一念に鏡湯變じて涼風とあり靈炭化して光蓋とあり銀の樹は七寶樹林火の車は金の蓮華牛頭馬頭の獻卒は觀音勢至二十五の菩薩と轉じて花々しき往生を逐るゝ十稱の念佛ぞと釋し給ふ現在火車の迎を受し極重の惡人あれども臨終の十念にや往生すと説給ふは別時意の方便にして今直に往生するにあらす遠生の結縁ありと攝論家より難する故に善導大師會通し給ひて今此觀經の十稱の稱佛ハ十願ありて十行具足せり云何具足する南無と云は歸命なり亦是發願回向の義阿彌陀佛と云は即ちの行あり此義をもつての故に必往生することを得と釋し給ふ凡夫の稱ふる方にあらす本より六字の名號に願行具足し玉ふを聞て信ずる一念に發願回向し玉へる大願業力の働ありと明らかめ玉ふ前々の高僧の上にとりても古今楷定の疏を著はして佛の正意を顯すものハ善導獨といふも妨あるべからす此觀經は曇鸞大師へ菩提流支三藏より付屬の經にして道綽禪師安樂集の據る又觀經あれども眠と望佛本願意在血生一向專稱彌陀佛名と恐げもなく突出して弘願他力の本意をあらはし玉ふは善導一人あり尤此觀經は大經とは違ひ自力の眼よりは分ち難き經あり凡三部經の説相をいけば大經は十五夜の月に一点の曇あきか如く弘願眞實の月明らかに見ゆる相共に村雲のかゝりて月に曇のあるが如きハ阿彌陀經のすがた眞門の月は見えてあれども

米自力の曇ありて弘願の月を定散の黒雲に覆れたるが則觀經の説相ゆるに此經より隱影顯密といふことありて顯説の方は丸く自力の觀念彰の字となりたる時々の定散の村雲の中に在す弘願の月がちらくと光を見せて是本法藏比丘願方所成と四十八願の月影を見せ念佛衆生攝取不捨と十八願の月眞丸に顯れ又若念佛者當知此人是人中芬陀利華とちらと影を拜ませたり全く夜明の月の入際には汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名と村雲はさらりと晴て南無阿彌陀佛の満月となりて西の空に隠れ給ふ其月の實跡を見附たる人の古今にあかりしに善導これ明らかに見出し給ふ之尤龍樹天親の二大士曇鸞道綽の二師とても是知給ひぬふはあらねども明に示し給ふは其中にわけて勝れ給ふ之論語の中は德行にハ類淵閔子騫等と四科を立て書たれども類淵閔子騫のみ徳實にて曾子子路等が不徳なりと云へるには非ず皆々徳は備たれども就中勝れたる方を取て上たる者あり往昔釋尊十大弟子の中は天眼第一の阿那律閔陀第一の迦葉神通第一の目連智慧第一の舍利弗といへりされハ舍利弗ハ智慧ばかりを具へて神通なきといふにはあらず智慧をばには神通を得ざるなり目連もれあしく神つうを得たるほどにた智慧はあきなりゆるよ其中にすくれも方を擧て第一と稱するなり大論の四十五卷目に釋迦如來無熱池といふ池の邊にて御身および弟子達の本業因縁を説給ふに五百の羅漢みな其會に

列國不歸るに舍利弗一人參着なきゆへ尋尋目連に命じ呼來るべしと宣ふ佛勅を蒙り鳥の飛
 が如く祇園精舎よいたりて佛勅の趣きをつけ給ふに折ふし舍利弗の袈裟を縫ふて居給ひしが
 暫く待給わるへし此袈裟を翻へて行へしと云り目連こころ得さらばとて待給ふに良時うつれ
 ども埒あかされば待遠思われ手をもつて彼袈裟をすつと撫られければ忽袈裟の仕立調たりい
 ざ出來たれば參り給へと急給ふよりの時舍利弗目連の神通を試んとて一條の帯を大地に落し
 其帯を取てみわれ夫をして同伴すべしといふ目連何氣なく其帯に手をかけ玉ふに大須彌山の
 如く地に引つきて動かさず忽目連禪定に入りて大神通を起し上んとしたまへども大地震動して
 動かさず此時如來の所よ居たまふ橋陳女何ゆゑ斯の大地の震ひ候やと如來に問奉られしかば釋
 尊宣やう是は祇園精舎にて舍利弗の帯を上んとて目連が大神通を振ふ故に斯震動すれども何
 ふして目連が力にて上る事は成がたしと言しと有然は舍利弗にも斯神通は有といへども其
 分くに當て稱する時目連を神通第一とし舍利弗を智慧第一といふが如く何に疎のあしど
 いへども觀經のうへにて彌陀釋迦諸佛三佛の正意を顯すとは善導大師の御手柄といふべし或
 問曰善導大師三十余年睡り玉わぬと大師は厭るべし但睡眠は欲界の衆生よあさと能わす故に
 觀經に唯除睡眠時恒憶此事とあり大師の睡眠せざるは機を失する過あらんか答て曰大師の

睡眠せざるは睡り勤めて眠らぬに非ず三昧獲得して常に三昧正受に入定散自在ある故よ自
 ら睡眠し給わず上二界(色界無色界)に睡眠なきが如ししかれども欲界の衆生には睡眠欲あり
 何ぞ睡らざるとあらんや爰を以て大師の往生禮讚に唯除睡眠時常憶念といへり又或人法然上人
 に念佛のとき睡はおかされて行を怠侍るといかにして此障をやめ侍らんと申ければ目の覺
 たらんほど念佛し給へと答られける其尊とかりける(徒然卿)又善導大師は目を擧て女人を視
 給わずと言り是別して身業の過を防ぎ給ふとを明かす故に黒谷七ヶ條の中にも此行狀の趣
 本律の制にも過たりと言へり問云大師の女人を見ざるは身過を防ぎたまふばかりか室檀經に
 一見女人一失三眼功德といひ縱雖見大蛇不可見女人といへり若爾らば大師の自行は爾
 るべし恐くは化他を失せん他力本願の正意は極惡の女人を度する大悲の至極を顯わせり都て
 女人は百惡長(善師本願經に出)にして障道の因縁なり故に經よは五障三從のさわりを説(法
 華に五障を明す大論九十九に三從を明す又超日明三昧經に並に五障三從を明す妙藥の五百問
 論下二十四丁もこれを引り又外典の中に三從を明す)人師は十惡を數ふ(南山の淨心戒觀法上
 廿二歸元直指下四十九六藏一覽四卅四號並に女人十惡を明す)或は女人は地獄の使能爾二佛種
 子と云り此を以て彌陀の別願極惡を化すといへども女人は定めて往生すべからずと疑ふ

人し故に別して女人往生のため三十五の願を立給ふ是則深重の大悲の至極にして女人を捨
 給はず爾れば善導大師の自行に悉く聖道めきたる御ふるまひにして他力眞門の正意にあら
 ざるべし答て曰超世本願の不思議重障の女人を濟ひ給ふと理在絶言なり但善導の女人を見給
 はざるは彌陀の大悲に違背し女人を捨給ふより非ず又身業の過を防ぎ自行を慎給ふにも非ず
 元より彌陀同体の大悲のあらはれ給へる御出世なれば善導の女人を見玉はざるは女人を憐み
 玉ふ大悲の説法あり其故の重障の女人往生するは本願の大悲止ことを得ざる故あり假令信あ
 りて念佛すればとて女人をよき者と云にはあらず然るに今時の女人たましく成佛する時は善
 本修習の思つよく自力雑善の執情はかんなりまして知識に親しく近より得法投積するときは
 したり貞にて他の不信者を謾り我賢しと増上慢を起すもの多し法然上人大に戒玉へり此で
 かしき心よりして安心もかけ自力定散の積となつて往生せず彼兼好も女の性のみなびがめり
 人我の相ふかく貪欲甚しく物の理をしらず只迷の方に心もはやく移り詞もたくみに苦しから
 る事をも問ときは言す用意あるかと思れば又淺ましきことまで問すがたりに言出す深く欺り飾
 れる事は男の智慧にも勝りたるかと思へば其こと跡より顯はるゝを知らず直ならずして拙き
 者は女なりと云々(徒然草)又女人を出家して彌陀念佛し若は受戒持齋せる者は彌陀慢心を發

し人我を高ぶる無戒の出家を見ての譏諷するもの多し己か失の難みず空腹高心して信心は少
 もなしされば百歳の老比丘尼たりとも今日初發心の沙彌の足をとつて禮せよと佛は宣へり今
 時の比丘尼の發心修行は法滅の因縁あることを知らず身を高ぶりて實は淺ましき事なり毘尼母
 經の意女人は心諂ひ曲りて法器にあらずとて出家を許し玉はす釋尊の姨母憍曇彌(摩耶夫人
 の姉きみ也)阿難に近づきて出家を願ひ玉へとも釋尊許し玉は其時憍曇彌五の恨を擧て釋
 尊を恨みたまふ是によつて如來止事を得ず出家を許したまふ此時同時に女人多く出家せりさ
 れば如來の正法二千年住すべきを女人に出家を許すゆへに正法五百年にして滅すといへりし
 かれは女人の出家は法滅障道の惡縁とはあれども三寶紹隆の善縁に非ずかし尼僧頂きを撫て
 慚愧すべし故に善導大師の他力還相の大悲をあらわし女人を見給はざる故に諸の女人身を顧
 て慚愧し實に一代教の中にも嫌われて在る處々をも擯出されたる女人なれば破たる石の再び
 合するとも火の中に蓮を生ずるとも女人の永く成佛せずしかるに彌陀如來超世別願の大悲ふ
 かく佛智の不思議をあらわして女人成佛の誓を成し玉ふ故に一念發起のところに不可思議の
 願力として往生を治定し臨終の夕に變成男子の姿となり紫磨黄金の鬘こまやかに三十二相
 の形いつくしく彌陀大會の中に入り彌陀同体ありとを顯めし無上涅槃の佛果を証せんよ

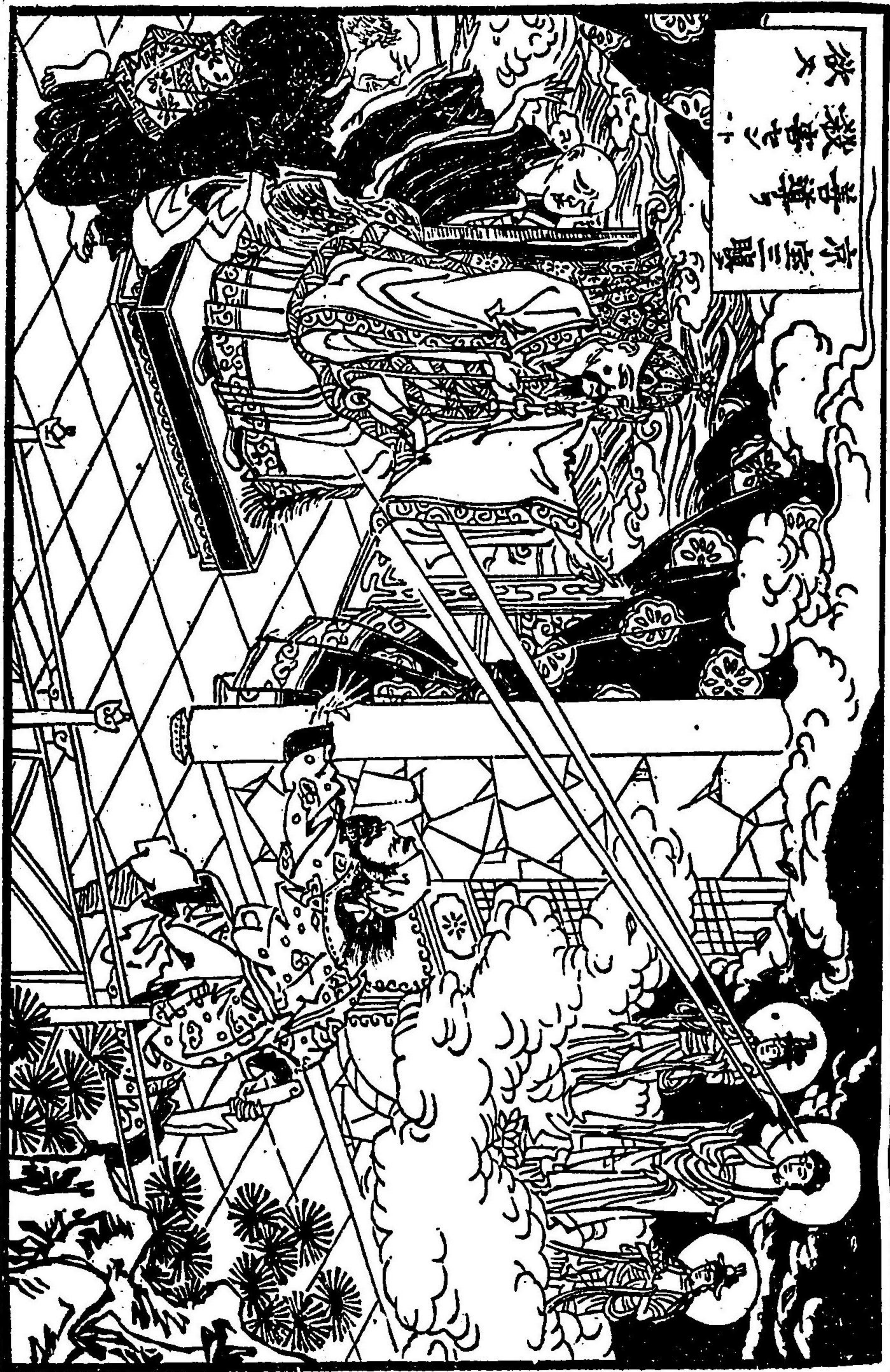
ひとへに他方の佛應あれば南無阿彌陀佛と稱名を喜ぶしめん爲に善導の目を蒙て女人を
見玉わざる也然バ女人たらん者は吾身の拙く障り重きことを改悔して佛恩の稱名をよるこふべ
しとあり

酒は正念を乱すものなれば小乗の教には草の葉にすくひ上ても飲べからずとも見えなれども
原來性罪に非ず只遮罪なりと俱舎にも見ゆたりされば時の宜は隨ひて縱ひ飲と有とも正念
を失わぬをもつて本意とすべし又寶積經に一たび女人をみれば眼の功德を失すといひ維大蛇
を見といへども女人を見るべからずといへり或は女人の百惡の長と藥師本願經に出たり尤是
も小乗の教なれどもいつう肉食妻帯の宗旨あれども坊主あたたまを振立酒池肉林の貨食亭に
いたり或は道女の手を携 柳巷を 遊歩行なと畢竟祖師の顔に泥を塗がごとし嗚呼唯出家は
出家らしく勝勝の舉動こそありまほしけれへ

〔第三〕 善導天滅異說 屠兒京實藏捨身往生 斯て善導大師一代の行化すてに終り唐の高宗
皇帝の永隆二年辛巳三月廿七日(帝王年代錄)出(或十四日)新修傳に出(春秋六十九歳にて往生
したまふ日本四十四代天武天皇白鳳十年に)たる(洛東禪林寺)には毎年三月十四日善導大師を修す
宗には二月廿七日を定む

右入滅に付て二説あり新修往生傳の意は一時住し玉ふ長安の寺院(後光明寺と云)において淨
土の幾相を寫し玉ふに急ふ催促して成就せしむある人其ゆゑを問へば則曰く吾まことに往生せ
んとす住すると兩三夕のみと忽然として微疾ありて室を掩ひ怡然として入滅し玉ふと言り又
蓮宗寶鑑および新修傳の意は忽ち人に謂て云く此身厭べし諸苦逼迫す情偽變易暫くも休息す
るとなし吾將に西に皈らんとすと則光明寺の南ある柳の樹に登り西に向發願し終りて其樹上
に於て端身立化し身を投して絶とといへり端身立化とは柳樹の上に立て合掌發願し終れば靈
神化して淨土に生す神已に去る故に尸地は落を身を投じて自絶すといへり京都の土木夫婦依
仰信して骨を収めて葬る高宗皇帝其念佛とれバ口より光明の出を知り又捨報の時精進至誠な
ることを歎聞し寺の額を賜はりて光明寺と號せり斯の如く兩説ありといへども大權聖者の入滅
は機縁は隨ふて見を異にす龍樹の入滅に二説天親無智の二説縁は類ふて化を致く一准すべか
らすといへり但捨身といへると今時無智の僧の溢れて死するの類ひにあらず傳文を見てし
るべし尤善導の在世に京都諸州の僧尼士女我は身を高嶺より投じ或は深泉に身を沈め或は自
ら高き枝より墮或は身を焚て供養せし者百餘人に及ふといへり又長安の屠兒(牛鹿を屠りて
業座とする者京實藏といふものあり善導大師の人を勸めて念佛すると長安城に滿るによつて

人々肉を断て買ものさらふ無りし程に京寶藏購て善道を書せんと欲し刀を持って寺にいたる即
 これを見て西方を指示し玉へば即浄土の相を現す是を見て忽改悔し一念發起して自ら高樹に
 上り念佛すること十歳その樹より墜て終る衆人念佛の天童を引て寶藏が頂門より出るを見る
 と西方零傳に見ゆたり此のごとく捨身するもの有といへども末代の下機に於ては慎むべき事
 あり自害往生入水往生等は念佛者のよろしからざる所ありとて源空上人深く戒給へりされは
 生ては念佛の功をつみ死さば浄土に参りあんと安らかに宣へるそありがたし
 諸傳に善道ハ彌陀の化身ありと云に付て古より二説あり一には化身とはいへども無而疑有の
 化生よあらず胎生をうけて生じ給ふ諸傳にハ父母の生所をいひされども瑞應傳に姓ハ朱氏泗
 州の人ありと云新修傳にハ臨淄の人ありと云り二には無而物有の化生よして胎生にあらず故
 に父母生處もなしといへりしかれども胎生と云を勝れりとして化生の説をとらず父母生所を
 傳に云さるは諸傳にの例多し又俱舍論に依るは釋迦如來胎生受たまふは舍利をといめて利
 益せんためなり化生には胎生に比し善導は捨身遺命し骨を収て葬れり此故に化生よあらず
 母の胎内に宿りて生れ玉ふ故に朱氏の子とあつて生れ玉ふと瑞應傳にいへり惣じて善導大
 師世に出玉ふと云は阿彌陀如來を衆生に代りて願行を圓滿し淨土衆生の往生を味として正覺



欲
 殺
 善
 導
 大
 師
 三
 師

の阿彌陀佛とあり給へは正覺の外に往生なし故に一心に彌陀に皈命し一向に念佛して本願に任する時は心安き往生されども一切の衆生本願非本願の差別もなく正行雜行を分たず自力他力の界を弁まへず此をとつて本願の方何の煩もなく成じ玉へる往生なるをよしなき自力の執心にはだされ雜行雜修自力善本を圖りて空しく生死に止まることを悲み永効五効の辛勞も其甲斐あしと思召阿彌陀佛同体の大悲やむことを得ず生死の園に示現し煩惱の林に回入し隨類應化の形をしめし惡人女人の先達と成て報土に往生しやすきことを教化せんために出世し玉へる御身なれば直爲彌陀弘誓重致使凡夫念即生と釋して在家も出家も善人も惡人も男子も女人も諸の雜行雜修を振捨て一向一心彌陀をたのみ生れぬに念佛せよと勧め給ふことなれば無而忽有の化生して出世し給まひては一切衆生が宏退の思ひを生ずことかく中一教化を受まじき也故に生死分段の肉身を受流轉迷妄の凡夫となりて自力雜善を捨て一向に念佛して佛恩を喜び給ふゆる胎生をうけ給ふなり又長安城の瀧に金色の四句の偈おられ大師化生せりといふこと淨土安心集の中に引り是大なる偽よして笑を千歳に残せり此こと委ろく光明大師別傳の注に見えたり一旦言盡べからず志あらんものは彼傳を披閱へし又半金色の尊形は南無阿彌陀佛の六字を表せり名跡不離の故に六字即彼佛也されば屢より上の墨衣は

南无の二字即我等が皈命の色心あり下の金色は阿陀陀佛の四字すまへち助け給ふ佛鉢なり法也報土得生の行跡なりしかれば凡心佛心機法一昧の南無阿彌陀佛を表顯して半金色にて化生し給とある(浄土門口決)

三國七高僧傳圖會天竺之卷終

三國七高僧傳圖會本朝之卷

源信僧都傳

〔第一〕源信幼稚感靈夢一並從三族僧一登北嶺

本傳曰釋源信姓は下郡氏和州葛

下郡當麻郷の人也父の正親母は清原氏夫婦に子なし同郡の高尾寺なる觀世音を祈ると三年母の夢に僧來て美玉を授ると見て懷妊す此よりして母舉止必ず禮を正しくし露腥を食せず天慶五年生る天性顯悟風姿凡兒に秀す父母甚これを寵愛す七歳のとき父を喪ひしに父遺言して曰汝必ず出家修道してわが菩提を助けよと夫より已來常は是を念じて措す或日齋戒して高尾寺に詣て觀音の前に誓て曰く我必ず父の遺命を奉じて出家せん願くは大慈照鑒し玉へと夫より日に詣で其尊像を拜すること三年又日々に瓦の塔を作ること一千基に滿て以て父の追福に應じ願九

才にして夢に高尾寺に詣て經藏の中に入て見るは許多の鏡ありて大なるあり小きあり明あるあり暗るありて同じからすしかるに一僧ありて其鏡を取て源信に與ふ源信うけて是を見玉ふに小にして而も暗るものあり源信の曰く我の夫にして且明あるものを得んと欲す僧のいづく但持てかへり横川に至て是を磨けよと宣ふと見給ひて夢覺ぬ其怪みて母にかたるは母のいづく鏡は智慧なり其明あるもの磨くに及ばず今汝が幼ふして智慧なし其小にして暗るが如し若歐山に登りて心の暗を磨かば智明らかに發して其思ふ所の者を得べしと源信聞て喜び給ふ時に此郷に二流の川あり南は濁り西は清たり日々に多くの小兒と俱に其流の傍に嬉戯れ給ふかゝりし程に一個の僧ありて鉢を持來りて流に洗ふ源信の曰其水の穢れ濁れり清きかたにて洗ひ給へと僧戯に答ていばく諸法本淨不淨なし何ぞ清濁を論ぜん源信の曰既に淨不淨なくば何ぞ洗ふとを用ひんと僧捨て俛て磔を數ふ僧愕然たりしが源信の磔をかぞふるを見て問て曰一より九に至るまで皆つの音あり唯十ばかりつの音なきの如何源信曰五の數に二のつの音ありと(後に源信の言によりてろの川を川と云と也)僧これに肝をつぶして益奇とす故に其父母および居所を問ふに答曰幼少にして父を喪ひ唯老母のみあり家は此より東北の村にあり貧ふして客を待すといへども師の世外の人なれば辱來臨あらば伴奉るべしとて遂に此僧を連て案内しつ我家に販り母

に此由を告僧母に對て曰く此兒甚た奇き器量あり後必ず大徳とあらんこれを吾山の(叡山)のと
 あり此僧ハ叡山の大廻萬の行者ありとぞ(良源)の弟子とあるんやと母過し頃の夢を憶合せて大
 に喜び我かねて出家させまくねがふ所あり貴僧よろしく計らひ玉れかしと答僧數喜びつゝ約
 して叡山にかへり良源上人は如此々々のよしを告ぐ良源も俱によろこび人を大和國に遣わして
 これを迎ふ此時母あたらしき衣を裁てこれを着せて告て云やう汝謹て良源上人に事へて修學し
 空しく光陰を送ると勿れ他日學問成就して名を四海に聞あば我れ乃汝を召すべし若然あらざれ
 ば是を永の別と思ふべし務て父母の未來の苦を救ひ拔んは是汝の力なり恩を乘無爲に入是眞の
 孝行とす汝うれ懋よやとて又一の錦の囊を與へて日中に阿彌陀經一卷あり是は汝か父の常身
 を放し給はざる者あり今汝に授く是を誦て父の菩提を聽よと源信さくく是を受て終に母にわ
 かれて使の人に印われ叡山に赴ぬ斯て程なく江州ふ着し比叡山に登り良源上人に請す良源見て
 大に喜び華々として教授し給ふ此時始て自ら先の夢を解して切礎して怠り給ふことなし十三才
 にして剃髮し戒を受て法諱を源信と號す

良源姓は木津氏江州淺井郡此人也延喜十二年九月三日に生る(最應瑞あり)十二歳にして叡
 山の理仙に師とし事法性房尊意に見へて受戒し尋て顯密の秘奥をうけ早く博學の名を得たり

承平五年維摩會に赴き南都の義昭と對論す始は良源の年少を侮る後義旨深宏あるを聞て衆徒
 みな驚けり清冷殿に於て法華講を啓く應和三年八月廿日二十の名徳を召して分て南北互に請
 問せしむ(南都の法藏と叡山の慶慶と對論して南都勝)良源と法藏と對論す藏負て閉口す一時
 枕網戒品を誦し數句にいたつて光口より出康休三年八月天台座主に補せらる山務を領する事
 二十年天元四年大僧正とあり策を聽さる永觀三年正月三日彌陀を唱へて滅す年七十四其容貞
 道徳雄強にして自ら鏡を把て影を寫して曰く我像を置處かあらず邪魅を辟んと此によつて摸
 印して天下民屋の扉に結る益を慈慧と賜ふ以て叡山中興とす則ち叡山第十八の座主にして世
 に慈慧大師と稱し俗に元三大師と號す右に所南都の義昭法藏叡山の良源は時の人は是を三沙
 門と稱す然るに三人とも正月三日に寂す奇なりと云々

(第二) 源信布帛餽母却禁諫言一 偕も源信は學業大に進み其名世ふ轟けり時よ
 村上帝の天曆十年六月勅に依て八講師となる源信いまだ年十五歳あり機辨泉の湧か如くにして
 宮中を鳴り動かす勅命によつて布帛を賜りて實し給ふ源信は時の面目世の聞へ何事か是に如ん
 や源信母を喜ばしめんと思ひ彼布帛に文を添て母公の所へ遣わし給ふ母公文をひらき見給ひ御
 衣をいたし給ふ事を喜ば給ふといへども源信の名聞利養の意を求く止めて無上菩提心を相續

さしめんと感ひすなはち返書に云く御身を出家に成せしハ父の菩提を訪めしめ母か生死の愛河を渡すべき船筏とも頼みしにさわなくて名利を本として何の用にも立ざる御衣を送給わるとや天香の榮おは母が志にあらす希ふ所は名利を捨る事増上人の如くして能父母を救はん事を呼われ老たり生て此事を見ん事亦難からざらんやと源信これを聞きますすく清素の行を篤ふし天祿年中横川に屏居し給ひて戒節を堅ふし専ら修學し玉ふ

敵山に東塔西塔横川とて三塔あり其中にて横川を首楞嚴院といふ此に在ける故に楞嚴の先徳ともいひ又其南に別院ありて惠心院といふこの寺の院主となり給ふにより惠心僧都とも號を

〔第三〕 謁三空也源信問淨土往生 源信一日勸進往生の偈を作りて母公に送り給ふ正勸安樂國一傍謝生育恩の句あり又同士の衆僧どもも願を發して涅槃經を寫すとあの一巻あり西塔の實因(當時の名僧也)是を聞く隨喜して自らどもも一巻を寫す是に於て東西の兩塔助寫する者夥多にして遂に十五部を得たり慶讚の日各寫す所の經を以て横川に集る實因も弟子數十人を連れて來りて其會に預る然るに實因は原來說法に聞ある僧あれば大衆等おもふやう今日の講師に究て實因たるべしと然るに實因講師の役を辭して源信に推る源信固く辭して實因に勸む實因また辭退して云師もし座に昇り給わはずはすあち今日の法事息べし我も又飯

りさらんと互に辭退して時を移す止事を得ずして源信高座に昇り給ふよ布の直綴布の袈裟にてその備貞溫潤あると云べからず大衆等稱して云く今の迦葉なりと源信まづ此經に値るの喜をのべてみづから感涙に咽び給ふ坐中みおももに感涙を催さるるを實因寺に販り人に語りて云源信の徳義よく人の心を感ひ動かさしむ吾曹の及ぶ所にあらすと其推量にたかはず解行ともに其徳あまねく四方にあらわる大藏經をみると凡五遍大乘小乘法門を其奥儀を究給ふ五種法師四種三昧などいふ天台の奥儀一として薫練せざらんとあし良源上人の門下高弟凡七十八人中神足四人あり尋禪覺超覺運源信等あり其中に於て源信の又魁たる者あり一年伊勢太神宮へ詣て給ひ七日の間誓を立て出離の要路をしめし給へと祈り給ふふ七日満する夜の夢に美しき貴女神殿の扉をひらき出てつげ言ふやふ出離生死頓證菩提の爲には末世の要法彌陀を念ずるに如くあしと此より後別して念佛を精修して安養に生ぜんことを期す曾六波羅密寺の光勝(空也上人あり)よまみひて問て云我極樂淨土を願ふ志深く侍往生の迷べくや否やと尋たす空也答て云く我無智の者ありいかでさやうのとをことわり侍らんや但し智者の申侍りし事を聞て是を案ずるにさどかは生ぜざらん其故は人六行觀を修して上界の定を得んと思ふとさ下地の能あり苦あり障なり上地の能あり妙なり離なりといふことを信じて下地の賤しさを厭ひ上地の妙あることを願へば其觀

念の力にて次第に進みて悲想慈を想まで至るべしといへり然れば極樂を願ふ又同じ事なり智慧行徳多くとも穢土を厭ひ淨土を欣ぶの心切あらば必ず往生を遂せらんと宣ひければ源信是を聞て實に理究り侍るとて涙をなかし掌を合せて飯り玉ひとぞ

空也上人名は光勝未姓氏を詳にせず尾州國分寺に於て薙髮し沙彌たりし時より自ら空也と稱す少して供進を好み天下を殆ど修行し過る所の道路多く利濟をなす錫を荷ひ轎と鑿石を拾ひて濕にしき破れたる橋を再興して架廢たる寺を修葺し水なき地には井を穿ち其水必ず甘冷あり天慶九年京に入市中に於て彌陀の名號を唱へて勸化す人よんで市上人といふ天曆九年天台にのほり坐主延昌に従ひて得度し同五年自ら十一面觀音の像を刻み六波羅密寺を建てこれを安置す播州楳保郡釜合寺に住して一切經を看讀と又雲林院に在し時松尾明神來現して空也の衣を假玉ふ嘗て云く奥羽の二州ハ佛の化いたつて少なりとすあはち佛像經論を負て彼にいたり法を説く化に順ふ者多し圓融院の朝天祿三年九月逝す壽七十

〔第四〕源信遇母臨終一並撰二往生要集一 永勸元年九月源信年四十二歳はじめて故卿に飯りて母公に見え玉ふ是より先に數回書を送りて飯らんことを乞玉ふといへども母公許し玉ばずして云鳥の母すら猶その子と思ふ況や人に於てや然れども母にひかれて其道業を廢せん

とを欲ふが故なりと是よりつて母公も念じ玉ふと甚た切あり因て思召には久しく音信を假令仰に背くとも一たびは訪ひ奉らざるは有べからず若我先死せば後悔おんそ及べん所詮母の許し玉のすも何ぞ行かざらんやとて發足したまふ途中にて母公の書を持來る使あり其書は疾はなはだ重し師はやく來て臨終の善知識とあり給へど有源信あわたしく飯りて夜に入て宅に著母公に隔へ給ふ母公且喜び且泣て曰いつれの日か師を呼て對面せんと思ひしが正に今此時あり幸に相見るとを得たり宿縁の有あらんと源信の宣く念佛し給ふや否や母答曰く何ぞ敢てこれを忘れん然るも身必勞れて自警るに力なく又勸め勉むるものなしと源信即ち念佛の功德淨土の莊嚴を具に説き譬をあらして唱首とあり念佛し給ふ母公大に喜び給ひ聲を隔して供に念佛し給ふこと凡三百余遍身心苦しみる安祥として往生し給へり源信の曰嗟呼我をして行を砥しむるは母あり母をして終をよくせしむるハ我之是母これ子共に善友あり蓋宿世の契ありと諸人みな嗟嘆せり永觀二年十一月往生要集本末六卷を草稿す明年四月全く成就す善導の釋義を祖述し助るは經疏の文を以てす淨土の衆行を敘るといへども肝要は念佛一門に飯す又空也の言を憶して厭離穢土欣求淨土を先とし玉ふ時に夢中に觀音大士あらわれ給ひ微笑て金蓮華を授く毘沙門天寶蓋を捧げて之に従ふと見給ふ又一僧の夢に毘沙門天二個の天童を引連て來て告て曰く源信の製

る所の往生要集の一見二聞の機りごとく、無上菩提を證せん一偈を加へて世に流布せしむべし。此僧源信に如此の由を告るこれに依て源信一偈（七言四句）を加へて世に傳給ふ朝廷を始め下方民にいたるまで風に靡く草の如く其化導を慕ふ時の人稱して眞の佛復び世に出玉ふと言ふへり。圓融院の皇后藤の詮子源信を請じて宣わく要集の作實ふ盡せりと謂つべし然れども庸愚の徒の猶未だ其趣を會得せず願くは書にあらはして是を示さば解し安くして利益廣からんと因て源信定に入ること七日にして眼前は十界の相を見て書工をしてこれを圖せしむ源信および其源覺運覺超等々の一々の書圖の上に階をせりもつて之を皇后に奉る帝及び皇后しばしば喜び玉ひて敷覽せしむ。紫宸殿に安置し玉ふ然るに夜深更に及べり惡趣の苦みの聲喧々として聞聲あり後宮の宮女達大に恐怖さ玉ふ是よ因て源信よ還して敷敷願われせられしとぞその圖今現に江州坂本來迎寺に藏して什寶とし世よ十界の圖を稱すこれ其縮輿たり。

十界の一に地獄界二に餓鬼界三に畜生界四に阿修羅界五に人間界六に天上界七に聲聞界八に緣覺界九に菩薩界（十は佛界以上十界則ちこれを圖す）

〔第五〕朱仁聰見源信畫嘆博覽一。寛和二年正月源信作るごころの往生要集を以て宋國の合州の周文德によせて贈る文徳をんと天台田の國清寺に寄附す則ち當寺の經藏に納む此經藏の

中は架三段あり上の架には佛經を置中に菩薩の論を置き下より高僧達の章疏を安す初に此往生要集を下の架に置しがいつの間にかは上の架にあり置く思ひて是を下せし還り上る期のごとくすると數回あり因て僧徒評議をなし終つてこれを上の架に安す宋朝の人共よ讚て云く此集極めて佛經と相應するゆへあしかゝるかと嘆嘆せり宋の帝此要集を見玉ひて大に源信の徳を稱して歎慕し乃東に向ひ日東楞嚴院源信如來と稱し又日本小釋迦如來と稱し玉ふなり時に寛弘三年寂照（源信の弟子也）宋國に至るに帝勅して源信の眞影を見んことを望玉ふ寂照承て日本に販り源信に如此の由を告源信廻圖向閣梨をもちこれを寫さしめ宋國に贈り玉ふ宋の帝つくづく歎慕せしめて宣く眸子の容子頗る卑し是は眞ふあらずかし其眞寫あるものを得まく欲すとて是を還し玉ふ源信その眞影を殿にて自ら書き贈り玉ふ帝これを取覽あつて嘆じて宣はく是全く眞像ありとて塔廟を建立して其眞像と要集とを安置し敬ひ給ふ正曆年中宋の朱仁聰船を汎て日本に來り越前國敦賀の港に着し此よ泊る此仁聰は博學にして内典外典に通ずと聞及び源信同門の寛印とつれだち敦賀に至り仁聰に見へ玉ふ仁聰壁に展たる畫像を指して曰この波珊婆演底主夜神は海路守護の爲よ持渡る處なり二師知るや否やと問源信直筆を採て華嚴經の善財讚嘆の偈を畫の上に畫玉ふ其文よ謂く見汝清淨身相好種世間諸書了て後を翻めて眞印に次を畫べよと言ふ

實印乃書してらわく如交珠師利亦如寶山王と仁聽しべく驚き嘆て云く二師の賜は大藏經の函ありと乃ち二の椅子を設て嬰應し又國産の珍種を贈る長保二年八月弟子寂照復宋國に至る源信天台の法門に廿七ヶ條の疑問を作り寂照に持せて四明の智禮法師ふ決斷を求給ふ又辟支佛の髪をもつて贈る智禮此問書を見て大に嘆して曰意ざりき(東城)日本に斯る深解の人を出さんとは乃ち答への釋を作りて還へす是よりして船の往來する毎に音問あり(此問答の事四明教行錄の四に出)然れども其答の釋源信の意に稱わずといふ同三年三月十五日地藏院に在して端座し稱名し給ふよ忽ち聖衆來迎を感ず紫雲室中にみち異光目を奪ふ源信これを圖し給ふ斯て地藏院の榜ふ一字を建立し紫雲山と號し聖衆來迎寺と名く繪像をその中よ安お今尙存せり又一年不この岡に於て彌陀佛兩峯の間に現し給ふを見て之を圖し給ふ今世に山越の彌陀の像といふ洛東某の寺に源信圖する所の山越の彌陀の像を藏む其畫像の上に阿偈を題す其辭に云く弟子天台僧源信。正曆甲冬十二月。誦圖阿彌陀化導衆生之相。渴仰慈惠發願而言。佛光照耀。聖衆來迎。上品蓮臺。願得往生。上求下化。萬德究竟。○交珠願。○普賢行。久慕西方素無貳。彌陀誘引有時行。光芒新自眉間起。音樂忽教耳界驚。永別故山秋月送。遙望淨土夜雲迎。直乘願力香先去。便導衆生盡往生。

嘗て亦迎接會を創給ひ(或は迎請といひ又練供養とも云)みづから法樂に備へ給ふこれを見聞も隨喜してものく勝縁を結ぶ一日華嚴院にまじりて此練供養を修行し給ふに眞の佛來て手を授るを感じ給ふ源信乃ち密に其像を堂の扉に隠し且之を版木に彫刻し紙にすりて施し給ふ此練供養の佛會今に至て西林院富麻寺天橋立等の諸所にて修行せり原は此源信より始る所あり特の帝源信の高徳を慕し給ひ屢恩遇を加へ給て内供奉とし十禪師ふ補し法橋少僧都に叙任す(一)曰天曆八年八講師たりし時僧都に權任せししかれども素より名利をいとひて迹を幽閉にかくし著述をもつて身の職としたまふ蓋佛恩を報すと云り所謂往生要集彌陀經略記一乘要決要法門對俱舍抄因明相違注釋并疏等凡七十余部一百五十卷ありてたのく世に行はる天台の教法此時盛んとする程に笈を食ひ業を受んと四方より來者層の如く集る實印紹良嚴久等みを當時の同門たり海内稱して惠心院の僧都といふ覺運と法我を角立す後世惠心檀那の二流と云は是あり覺運は泉州大島郡の人あり姓は野勢氏幼して散山に上る天臺奇相にして舌を出せば鼻を起たり慈惠僧正これを見て必國寶とあらんといふ則ち慈惠僧正に事ふ時の皇后の御産を祈らし給るに御安産ありしを以て僧都に任せらみ是を檀那僧都稱す(一)油を立派精進來慈惠僧正の入室の弟子と慕りその注實英敏ふまじせし(一)靈雲の窟の窟よみ是及發以奧備鏡を掛て明

の法燈あり玉ふつとて平信ひるまふたがす天台中興の法燈として芳名異類なき流布しければ惠心院の一流を稱して万世の法燈とありたまふ(或云良源僧正教門とあつて覺運に歸し觀門とあつて滿信に屬すとこれ故あるとなりとせざる程に覺運を檀那の一流と號し源信を惠心院の一流と稱す三僧小異あるがゆへなり)

第六 多田滿仲發心 並 迎接會修行 源信嘗て門人に語ていづく俱舍因明の穢土に於てこれを究め唯識の淨土を期す宗義は佛果を俟と彼で乘要決の衆生皆成成の旨をあらはし定性無性の執を破すと譬に馬猛龍樹の二大士頂を摩て讚嘆し傳教大師命堂も告て吾山の教法今汝に附屬すといふを見給ふ又八塔相續を作て普く諸人に廣し玉ふ深義解し易く遠近これを慕ふて唱ふ時に攝津守源滿仲任を致して攝州多田の別荘に住居す素よりその性勇敢にして常に遊獵を好み殺生を樂みとす其息の僧源賢を往を請ひと雖ども用ひ玉は中因て源賢源信よたのみて謀る源賢覺運源信と共に多田の別荘を勤ふ滿仲密く書て諸師の道名を聞たよびこれを慕願久し幸ひに冷日の寒陰老父がよつて何事か是にしかん別室に請ひて教を授けり滿仲嘗て彌陀の像を圖畫法華經を寫し玉ふしを世に出して見せしめ又覺運の像を世に出して併に覺運と名ふ各其意に隨ひて之

は續す斯て院源滿師とあつて法要を論說す滿仲聽聞して忽ち心をひるかへし只管先非を悔み終に日を撰んで祝髮受戒せんとそ玉ふ源信の日即明日の吉祥ありと蓋るこれは其志の變せんとを慮りて斯言もとなり乃ち滿仲の言に隨ひて翌日雜染し法名を滿慶と號す其僚屬數十人これに従ひて出家す次日源信密に覺運院源と談ひて迎接會を執行す滿仲不圖異樂合奏し聖衆來現するを見て驚き感泣して地に下つて禮拜し玉ふ是によつて信ます堅く遂に滅罪のため寺を多田に建給ふ(今の多田院これあり其始は法華三昧院と號せしとぞ)

源滿仲は清和天皇の曾孫にまで六孫王經基の子也延喜十一年四月十日に生る武名を以て世に顯る嘗て鎮守府將軍正四位上陸奥守に任ず村上帝天徳四年寇盜あつて夜滿仲の宅に入滿仲これを射殺し遂に其黨を索得たり冷泉帝の安和二年左大臣源高明大宰府の權帥に左降せらる時源繁延等叛心あり滿仲ひろかに奏して乃ちこれを捕ふ其黨其多く殆天慶の亂如し滿仲其弟滿季と共に藤原千晴及び其男久頼並に僧道茂等を執ふ皆其罪に伏す其後貞元二年八月十五日歳六十六にして剃髮し法名滿慶と號して多田の院に居す長徳三年八月廿七日卒す年八十六と云

第七 平維茂都文士等遊法

將軍平維茂源信に請して止觀をまゐり淨教を受け預め臨終

勢助念を約す時に病發して既に危かりし程に使をもつて源信を招請すしかるに源信事あつて赴く事能はず之によつて迎接圖(菩薩來迎の圖也)を使者に與へて云く此畫像に對し身心を修攝せば是に加ふる事あしと使者かへりて維茂にしかくのましを告る維茂大よよろこひ合掌して像を禮し即逝去すといふ

本維茂は兼忠が子也伯父前將軍貞盛の養子とあり字を餘吾といふ世に餘吾將軍と稱す武名を東州に赫かそ一旦身を池水に潛め戀達の難を避けるの寇奥州澤勝の諸任を殺すことを得たり又信州戸隠山に入妖賊を退治す其勇銳の氣以て見るへしと云々

都文士の一條帝に仕へて位三品に至る儒行をもつて名あり常に佛法を勝と甚し老て重病に惱む其子宰相高明源信を迎て父を教諭せしめんとを源信乃ち往て文士に對して謂て云く我公に托たき事あり故に態々來たる所を圖公重病なり因てこれを言べからず文士の曰いかある條にや疾きも苦しからず具に告たまへと源信云此頃佛寺を建立せり公の詩を得てもつて壁に貼置度なるへりと文士云く其望たまふは何の詩あるやと源信云く九品淨土の相を願せんとを欲ふと文士の云く我さらに其相を知らず粗うの旨を語りたまへと源信則辭かに逆惡往生のとたよび因果應報毫髪を違はざるを説く茲よいたつてさむもの文士も忽ち邪をひるがへし王に歸し終に念佛して

逝去すといふ

(第八) 源信入水想觀一並 加茂明神靈異 少内記慶保胤之文よ於ては當時變ふ

ものあし寛和年間出家して法名を寂心と號す源信に就て西方淨土往生の要訣を受く一日參坊して所を購んとする源信其時水想觀に入給ふ是に於て齋の一室一圓に變じて水となる寂心しはあやしむ傍有弟を枕をとつて彼水中に投さみて歸りける翌日又寂心參りて齋よまみ乃源信曰く我昨日水想觀に入るとき彼水中に枕を投其まゝ我胸に中て痛み太し今又水想觀に入べし其枕を取除べしと結伽跏坐して定に入たば容漸減て室中一圓の水となり稍て彼まくり浮ひ出たり寂心直に取除く源信次ひて本身を願しいまの痛さよりて快しと言へり如是坐禪觀法にも自在を得給へども自力の成じ難きを悟り予が如き頑愚の者の豈敢てせんやと宣ひて西方の往生を願ひ給まひ一切の群生を勸め給ふ真如觀を修するに文殊菩薩身を現して實相を南溟の濱に説たば又源信の道徳高くして普く神明感應あり就中吉野山に詣給ふとき權現巫に託して法義を開示し給ふ源信宗廟を問たまふに一々具に對ふ又加茂の神祠に詣たまふに深更に及び明神戸帳の中より和歌の下の句を吟じたまふ其句に

「世にたはむとて 源信より我をその上の句を續てはく

「月花の情ははたけあらずこそ」と曉とてあつらひ面白しと藤の中より嘆賞をしますと外に聞
るも心なかならば有て共にこれを知しと也

又西海道を循歴して名山に登り靈窟を探りたまふに神人影の如く從ひ道路を守護し玉ひ或は深
窟に獨坐して法輪を思惟し玉ふに證文を尋んと思召ば忽火來て机の上をてらす其れを冥應
めれとを匿して語りたまわす

（第九）源信遷化奇瑞 寬仁元年源信疾に罹り玉ひて念佛しばらくも怠り玉ふことなし隣寺
の僧に金色の僧空より下玉ふ源信合掌して微笑みてこれと語玉ふと又或が夢に源信蓮華の上
に臥し玉ふ其傍に數万の蓮華を生ず人有問曰此蓮華の何の用ありやと尋るに忽空中に聲あつて

云くこれなる極樂淨土よりして妙音菩薩の來現し玉ふ所の蓮華なり當に西に向ふて去るべしと
往生の二三日已前より病留ことなく治りて身軀平日の如し一旦院内の諸衆を召て告て云く今

生の相見今日限あり宗教に於て疑わしき事ありは是を問て決せよとさる程に大衆且問且泣源信
一に解尺を玉ふ既にして氣息疲れ給めて大衆を驚かせ獨上足の弟子たる慶祐を留めて謂て曰

我一乘の善根事理の功徳を以て極樂世界へ回向す而もて今二天童降りて告て曰我は彌勒菩薩の
體本を師住法華を持ちて善一乘を解す此功徳を以て當に天宮に生ずへしよつて數万の天子拜し

迎んとぞ故に我等先これを報すとわれ答て曰く兜率天に生ぜんと思はざるに非ずといへども我
平生の志願の彌陀の佛國に生するにあり冥ては彌勒慈母の力を加へて我を西に往めし玉へと天

上にかへり我願意を中上玉へと是よよつて天童空に昇去忽觀音大士來現し玉ふ是我素より意を
失わざる所あり汝よく是を記せよと有けれは慶祐涙をなかし隨喜す源信すなはち定印を結んで

端座し面善圓淨如滿月の偈文を唱へて念佛して往生し給ふ此身（後一條院寬仁元年）六月十日眞
時也壽七十六（僧と成玉ひての年間六十四年とぞ）衆徒悲み號ぶ聲寺院を動かすばかりあり時に

天の音樂空中にひびき異香四方ふ薫じ或は音樂の聲西より來りあるひは東より西に去るを聞て
岫木みち悉く西に靡く源信嘗て三井寺の慶祐法師に親しく談ひ互に先達て往生するもの必せり

の生るゝ所を告べしと約したまへり此曉慶祐後夜の行法をつとめんとて堂の椽側に出て阿伽の
水を營みたまふに忽ち源信白雲に乗じて告て云く我は是故佛靈山の聽衆化緣すでに盡て今本土

に還ると見る（一）に我は本極樂久住の大土化緣已に盡て本國に還返すと或り傳ふ是源信の辭世
の願也と因て使を横川に遣し源信を訪ひ給ふに師すてに今曉命終せりと其後一時楞嚴院に於て

往生要集を講ずるに夢に神僧の形を現し告て云く我は是源信今極樂界にて新華聚菩薩と名づく
後要集を講ずる隨喜に勝る故に來て告といへり抑源信若華は浄土の業を修して暫くも懈らず

自記して曰く一生の念佛總計二十俱低過と弟子その記を遺れる箱の中に得たりと又常に佛像を彫刻し或は書くこと數へかたし又千体佛を造りて諸國に頒ち安置すること凡三十八ヶ所あり其
余傳へ持もの殆海内に遍しと云々

〔第十〕 往生要集三界六道之説 偕又往生要集ハ始て厭離穢土欣求淨土の旨をしめして菩提
心を勵め玉ふ故に前にいへること十界の相を始にあげ次に極樂の往生に就て十樂を擧げ玉ふ
されは源信の在世に於ては圓融帝の御后藤の詮子御所望によつて地獄餓鬼畜生等の形勢を繪に
あらわし敷覽よろなへ給ふに帝をはじめ奉り局方にいたるまで拜見ましし御威のあまり紫雲
殿よかけおき給ふに毎夜深更におよんで地獄の責苦餓鬼のくるしみ各體を發し宮中の諸人肝を
削し魂を失ひたまふ故又惠心院へ返させ給ふことに厭へきは三界六道の分野あり故に經には三
界安きとあし猶し火宅の如しと説たまへり三界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上是を三界六道と
いふ又穢土ともいふ其中人間天上の善趣とし地獄餓鬼畜生修羅を四惡趣といふ尤厭離るべき
所あり此故に樂にまづ八大地獄を始めとして十六の別處に至るまで委しく是を示されたり六道
生死の人間界は隔生即忘の故に前生のことを知ず未來又尙知ることなきか故に動もすれば有無の二
見に墮し或は己がもたらざるを以て佛説の三世の因果を信せずして徒に惡業を造りて空しく三塗

に沈む佛これをあはれみ給ひて惡に救へ大經にハ現に王法の半獄あり此世に今眼前に罪を犯す
時は王法これを免さず火罪斷罪等あるにあらすや顯明之罪人得而誅之陰伏之奸鬼得而誅之と現
に顯たる罪人の誅する所也竊に公の實にかゝらざる心口意の業は己が魂よく知りて未來の誅
を受皆人の知る所に非ず公に半獄をかまへ征罰の律を定めて待給ふには非ず尙善人を入る半獄
もあく又罪なきものを行ふ征罰もあし皆是自業自得にして自ら作られる半獄みづからあせる罰
もらずや此理をもつて來世の獄苦の逃れ難きを知れと佛は意を苦しめ教諭ましませり是を以て
源信の其佛語に依給ひ多くは正法念經の意によりて六道の苦相を具に示して厭離穢土を勵め玉
へりるかるにわれら若厭離の心を起すといへをも自力修道は源信尙及びがたし是を以て往生極
樂の教行は濁世末代の目足にして道俗貴賤誰か販せざらん偏に彌陀の尊をたのみ専ら念佛して
極樂往生を願ふべしとあり誓どひ弘誓といふこと 廣普緣名之爲弘自要誓其心名
之爲誓と釋して第十八の願の十方衆生は弘の字の意善人惡人男子女人かたははいかやうあま
ども心の何程淺きとも我淨土に生れさせずは阿彌陀とは呼れさせと仰られしが廣普の緣とい
ふもの誓の字は 自要誓其心四十八願 一一に此通を成就せせん法藏比丘にて栴果
入し此願満足せん阿彌陀や佛に成るべからずと誓給ふを誓といふりの不取正覺の言葉は

四十八にも有らむ。若く不生者の言を置給ひおは第十八願ばかりにして余の四十七願は此十八の願を信せしむる爲の欣慕の願にして若く不生者不取正覺我善願を信じて我名を稱ふるものを極樂に生れさせすは阿彌陀と呼ばれまじとある肝心の結納あり故に第十八願を押立て勸め給ふ也尤源信僧都は天台の宗風を身に觸給ふといへども化他の爲には念佛を本意とし玉ふ故に其宗風を改めずして念佛往生を勸め給ふ則源信僧都は極樂久住の菩薩にあて還相回向の出世にましませり自行といひ化他といひ行住坐臥に他事ある佛念して往生極樂の思ひ常に絶や此をもつて往生要集に云く飢て食を思ふが如く渴して水を追が如く或は頭を低て手を舉或は聲を擧て名を稱ふ外義の異ありといへども心念常に存して念々は相續し寤寐に忘ると莫れと言へり寤寐どかねてもさめてもありされハ源信の出離生死の一大事を心懸ること行住坐臥に油断なきゆへに一將楞嚴院の下部山より新をとりてかへり來に對ひて問給ふに此僧此た極樂往生すへきかと言下部こたへて云すやふ問へき者に物を問へ尋常のありひにて候ふわれも阿彌陀の親類にてもあるら御坊の往生極樂をば知り候わめとや源信言わくさればわれは出離を一大事とせよふよりあるらずして問もあらず汝が申所もつとも道理にこうと言へり次の日下部山へ行けしと有けれハ源信云く勤とせ汝山へ行はるまを有けれハけふハ雨がふらうふ候ふと云ふ汝と昨日我往生を

問は龍王の親類ありねハ知らむといへり今ハ雨も降ざるよ雨ふるべしとは龍王の親類にて有かと驚へり下部されハ候ふ愛宕高尾の峰に雲のかくももつて雨のふるべしと知り雲のかくももつて雨の降まじきを推量せり御坊も所によりて後生を御知り候と申けり(淨土願欣抄)實に下部の言も取に足れりと源信坊の如く出離生死の菩提心ふかくまひませハ眼と下部にも往生を尋ねたまは所々にて辻古るを聞き給ふと常にして西へ傾く月に往生の心いやまじにあり管絃糸竹の音に來迎の音樂を思ひ心を澄して常に念佛し給ひける

續拾遺 浦やまじしがある空の月されハ心のまじは西へ行くらん 源 信

新拾遺 夏ころもひとづに西を思ふ哉裏あく彌陀を頼むみあれハ 全 一説に源信僧都隱遁の後名利の二字を書て居間の壁をけり常に禮拜したまふ人りの故を聞けり僧都云我名利の修學を好みて晝夜怠らず學ひける故に遂に出離の難きを知り名利は怨とあると辨へしよより斯道心堅固の身とされハ爾れハ名利の思極めて重けれハ常に禮すること言へりとそ又西行法師の撰集抄に日惠心僧都横川にて御身没けるに胸の間に青蓮華三本侍りけり云ふも此事世に聞けしかハ若くハ彼蓮華を召れけるに此僧の衆徒會議して進らすまじき由固く辨せられハ一本奉れと命ぜらるる時蓮華を得て一本を通りせてけり残り二本文華

櫻に籠りては君の召れたる邊華は御堂の大殿(眞道公)は帝の外祖にてひまそかりける程に御
 御方へ傳りけるを宇治殿(賴朝公)の御代よ平等院の寶藏に納められ傳りけるといへり實に有
 かつたき所あり是僧都平生往生の信心淺からず一生不退に稱名し玉ひしにより佛智回向の御慈
 悲の顯たることされ此界一人佛名を念すれば西方よ便ち一蓮生す但一生常に不退あらしむれ
 ば此花遠て此間に到て迎ふといへり法照禪師の彌陀の化身善導の後身なると天下に知らざる
 者あり其人此事を説たれば信するに堪たり又蓮は佛座にして法あり心と積あり心よ蓮の生ず
 るは積法一体の佛智の顯わられたるあり

〔第十一〕源信自書自讀文 源信僧都自書自讀の文にいひて

三惡道を出て人界へ生とうくるときは大なる歡あり身は抽ひけれども畜生には劣りまし家は貧
 しけれども餓鬼には勝るべし思ふこと用むすとも地獄の苦よりくらぶべからず世の住うきは
 厭便あり信心淺ければ本願深き故往生樂あり妄念と本來凡夫の地体なれば忘念の外に心
 はあつと始終の時までは一向忘念の凡夫にて有ありと思ふて念佛すれば淨土に參入し蓮華を
 乘する時にこそ忘念をひるがごとく信じてなるべし忘念の中より申出る念佛は濁りたる蓮
 の實に生來定疑なし

三國七高僧傳圖繪本朝之卷横川終

(源空上人別傳高野神社考)

續日本紀云元明天皇神武六年制三備前六郡二姑置三美作國二云云

拾芥抄云用野。苦南。苦北。吉野加三四郡。爲一十一郡。云云(今無用野郡)

英多。吉野。勝田南。勝田北。久米南。久米北。苦東。苦西。大庭。眞鳥。當國一宮中山神社(苦西郡)

たのふ。祭神大己貴命。貞觀十七年四月神階並三位(同一宮高野神社)同二宮村にあり祭神鶴龜菅

原合尊延喜式神名帳。出美作國十一座の一と云云

攝津漆間神社(本社)の傍にあり祭神神官立石氏の祖神なり是則漆間の元國の先祖の靈神を祭

る所あり委は立石氏の事記に詳かあり(源空上人の傳にいひて神護太夫元國は當高野神社

の大官司あり或は神戶太夫ともあり兩名ともはに大官司の近ありと云立石氏はもと豐後國立石

の住人あり後漆間を領とるをもつて家名とす(當社高野の神境は作陽最第一の勝地あり前に

飛泉ありて白浪あだか馬の駆るが如く或は淵にぞいせり堰高く浪打之ゆる音喧しく松林に

響けり後の槍杉の大樹鬱茂して森々たり神門の飛驒の匠の造とて門守の立像は頗る古作よ

して幾ぞせといふとをしらす右大將賴朝卿の時橘原源太景季普賢禪奉行として當社を修補す後

世尼子毛利松森等の家々より再興有(古)の社額八十石有しと聞ゆ(馬場餘長くもて左右に櫻の
 刺樹あり傍に雲梯社の古跡ありて千歳を經たる椋の大樹纏茂し左右に蔓りて下枝よ枝し恰も
 生花の如し根に石の玉垣を圍し碑石を建(森家の僧臣江村俊軒の文あり慶長五年と鐫す)此地
 近世迄は大樹陰森として畫といへども冥々たりし是雲梯の社の古跡の證ありとぞ樹下に小池
 あり(万葉集に菅の根を詠し古跡之)大鳥居の額は高野大明神の五字二行に書す弘法大師の筆
 なりとぞ(弘法大師在世の時社頽廢せしを中興有しと云)南方廣く久米の更山をみわたし右手
 に嵯峨山ありて下に大堰あり幾と都の嵯峨に彷彿たり河下に誕生寺(源空上人誕生の舊跡あ
 る稻岡の庄枋社村にあり寺額五十石の伽藍あり)に至る横渡り有河上の淵(男岩女岩とい
 へる雄雌の靈石あり男の方の雌頭(の如く)陽根(の如く)似たり女岩の方の少し低く陰門に似て男岩に
 隨ふが如し滴水のときハ折々懸る)とあり此淵(の)うみけて天王鼻といへる地ありいし入
 御島羽院より久米更山を觀覽せしめて御製ありし名所あり又此河の水源は伯因の國界ある高
 山より出るとぞ下は十八里の間流れて備前國全岡縣(に)海に入又馬場の鳥居前より十八丁東に
 は古松左右の街に連々として管繩手と號津山の城下の入口あり社頭の西二十丁許に院の庄と
 いへる地あり元弘の亂に藤原朝(天竺)國に遷幸の時行宮の古跡よして所謂備後三郎高德志

を官軍に驅む此行宮に階ひ入庭上の櫻樹の皮を斫りて二聯の句を書て云く。君莫(も)忘(わ)勾(か)隱(ひ)の
 時(とき)我(われ)無(な)き(き)處(ところ)を(を)面(ま)して其(その)志(こころ)を(を)顯(ひ)すと云々其(その)古(ふる)木(き)枯(か)朽(く)す後(のち)世(よ)尙(な)裁(き)つぎて世(よ)々に榮(さか)へ晚(おそ)春(はる)
 の頃(ころ)花(はな)爛(らん)漫(まん)たり且(かつ)傍(わら)に碑(い)石(い)を(を)建(た)ん(森家の僧臣江村俊軒の撰あり)○此等の條は此卷にかゝり
 たる説話あれども古をしのぶ癖により餘紙にまかせて記(し)漆(うるし)のみ看(み)客(きやく)疑(ぎ)惑(わく)すべからず
 ○木朝孝子傳云貞觀年中美作國久米郡の人秦(あ)豐(とよ)永(なが)天性(てんせい)孝(こう)順(じゆん)幼(わか)にして能(よ)親(おや)死(し)るの(の)後(のち)
 常に墳墓(ふんぼ)を守(まも)る位(くらい)三階(さんがい)に叙(しよ)し課役(かやく)を(を)調(た)り(門閭(かど)に表(あら)し兼庶(けんじゆ)に知(し)らしむと云々案(あん)するに源空上人
 の母(はは)秦(あ)氏(し)の(の)祖(そ)是(こゝ)ららんか
 また美作國久米郡稻岡庄枋社山誕生寺は圓光大師御誕生の古蹟ありとして廿五靈場の第一番
 とす源空四十三歳のとき洛東大谷に在して自ら三尺の影像を作り給ふ後に熊谷入道蓮生持下
 り當寺に安すといふ寺額は五十石あり

三國七高僧傳圖會本朝之卷本

源空上人傳

【第一】漆間時國新觀音殿三子(並)先祖家系 本傳曰源空姓は漆間氏美作國久米郡稻岡

三國七高僧傳

の庄の人あり父は時國母は素氏其子なきを以て共ニ佛神を祈る母の夢に剃刀を香と見て覺て姪とあり是を夫より贈る夫の曰汝の姪どころ必男子にして後帝の戒師とあるべしと母則ち心を佛乘よ版して口に齋草を斷て身を慎み長承二年四月七日午時に生る其時天より二の幡降くだりて其奇瑞を呈す頭凹して稜あり眼黃にして光あり性世の兒と異にして小兒の戲を喜はず起居舉動尋常ならず動もすれば西の壁に向ふ辟あり

一説云元祖法然上人は美作國久米南條稻岳の北の庄(一書云稻岡の庄柄社村)の人也父ハ藤官注衛門尉漆間の時國母は素氏の人なり抑時國の先祖を尋るに右大臣元光より六代の孫式部大輔元俊陽明門(一書に陽明院とあり誤あり)にして内藏人頭兼高を殺害せし罪科よよつて美作の國へ配流せらる爰に當國の廳官神護大夫漆間元國一人の女子を持彼婿として男子を設る重國と號す其子を親國といふ其嫡子に時國と號て外祖の家をつぐ彼時國の先祖ハ流人として所帯なしといへども財實乏しからず眷屬室に滿て繁昌す爾有といへども歳すでに三十に余りて一人の子あり一時時國妻女に相語て曰我一人の子あり一期つきてのち後世を訪ふものあり又其跡の絶ちん事の悲しきこと云ければ妻女自らも此ことを歎き候しからばいかあらん遊君遊女をも相語らひて君を遊を設けたまへ自乳母して育奉らんといふに時國いわく夫は然りとい

いハ共同く改か腹に敷てころ二人の中より育がたけれと妻の云くさら昔より今に至るまで佛神よ祈ることの叶へばころ轉語にも傳ふらめ藤尾寺の勝如上人横河の惠心僧都共に祈て設給へる鐘愛の子とさげハ我らの悲願に満べきに非ずとて夫婦心を一にして同國菩提寺といへる山寺の救世觀音に詣て一七日の祈願をこめ丹誠を抽んで祈りける程に七日満づる夜の夢に覺悟忽然とわらわれ大なる剃刀を妻女へおたへ是を飲べし必子を設ること告玉ふにより危きあがり口を開きて刃を呑と見て夢さめしが是よりして懷妊の身とありしかハ妻女は時國にねがひて新造の別室に引こもり日毎に沐浴し新しき衣を着し身に香水をぬり口に生臭もの五辛の類ひを食せず精進に身をつらし月盈て長承二年四月七日午刻母公をやむとなく安くと男子を誕生したまふ此とき後苑に大樹の椋の木ありしが天より白幡二流降下て此椋の梢にかより紫雲たおびさ鐘を覆ふ鈴の音天にひびき白幡赫さわたり七日を経て白幡天より紫雲漸に去ぬとぞ此椋の大樹星霜を経て風に傾き終つて倒るといへども異香常に薫し奇瑞絶るともし人これを慕めて佛殿を建て誕生寺と號し御影堂を造りて念佛怠ることなしと云々昔藤原天皇御誕生の時は八流の幡ふり下る其故に八幡大菩薩と號す是本朝に入正道の弘まるもあしむと云ふ凡正道とは正見田原惟正轉承正命正精進正念正定精なり爰に上人誕生の時

も二流の権くたがしは後年に佛教を興行遊具行遊と二分たまふ前表あらんかと云々(正源
 明義の大意又三書に云く彼時國の先祖は仁明天皇の後胤西三條右大臣の末孫式部太郎源の
 年陽明門として藏人兼直を殺す其科によつて美作國に流さる此に當國久米の押領使神戸大夫
 漆間の元國が想と契りて男子を生せしむ元國男子あかりければ彼孫を以て子として家を嗣し
 むる時源の姓を改て漆間の盛行と號す盛行の子重俊重としの子國弘其子時國なりと云(前
 の説又大同小異あり)

(第二) 勢至丸匿竹間一暗射の警 上人幼名を勢至丸と號す(或ハ三徳との名づくとも云
 々)二歳になり玉ふ秋七月十四日善導大師遷化の日に當つて南無三寶と云ふ玉ふるも襦袢の
 中より竹馬の鞭を擧るまで更に泣號玉ふと云く恰成長の者の如くにして頗る性質聰明や、も
 すれば西の壁に向ひて默然と坐てたわします習あり大台大師の幼き時の行狀に違わずとな
 んるる程に櫻帳紅圍の中に貴み松風羅月のもとに仰ぐ桃李万歳の春をむかへて萬花を折て膝
 の上に置り秋帳千年の窓のまへにハ明月を詠じて夜を明したまふかくていつしか勢至丸七歳
 にならせ玉ひ小弓の遊びをし給ふにも常の稚兒には遙勝りその外の遊戯悉く他超越るにつぎ
 父母の鍾愛一かたならすおわしほる此に當國阿庄の積所に明石源内武者定明とて白河院の北

面伯老權守源長明が嫡男あり其身は堀河院の瀨口の武者たり然るに漆間の時國は聊わが
 先祖を慢するの心ありて定明に従かぬ對面せざるはるほどに定明深く之を恨み終に保元六
 年三月十八日の夜定明五十人ばかりの士卒を従へ時國の館に討入たり折ふし爾るべき勇士は
 皆他に行き廻ぐものもさく以下の雜人は逃去て影だにも見えず時國ひとり起あひて小袖の端
 折太刀ぬさかざし對ふ敵と散々に戦ひけり敵は八人此方は一人獎贈が猛勇も叶ひ難くぞ覺へ
 たり然れども玉舞が術をかまへ藤山が威を震戦ひければ前に進みし三人を忽ち斬伏たりしか
 が此ありさまに避長ししは後に退きたり時國も數ヶ所の疵を蒙りて殆危ふく見おたりける
 此とき勢至丸は九歳なりしが母諸とるに篋の中に匿れて手馴れ小弓をもつて父の敵とねらひ
 つゝ其夜の大將たる武士を射るほどよ過たぬ眉間に穿る小事あれども病手といひ其疵より
 て計策の露れんとを恐れて即時に此を引退く是に依て從兵等も共に從ひ引しが勢至丸母に
 對ひ敵のはを引ぬと覺へ候父の安否を伺ひ尋らざる内に蒐入尋れは豈科んや父の敵五六人
 討といめて敵の上に伏たりける然れどもいまだ時國のれなき息の下より今も不回流を見まほし
 ど思ふ心と命とを今も存命ありつゝるを時國も驚かぬ時國も時國も時國も時國も時國も時國も
 夜不意に討入し敵は見知りて驚きつゝ時國も時國も時國も時國も時國も時國も時國も時國も

ゆへにむらりたるをど勢至丸となして由證に事蹟を録せ候まはるは白河院の北面宿禰守長明が
 子明石の源内武者定明にて候ふと時國國で諸はと黙頭かじりて汝が行狀が是につけても今
 しバし世に存命て有るハ成長の後を見んもの之露の露の消えんとの處おしやと涙をぬかじか
 きくとき玉へハ集り來れる從類眷屬ともに袂を絞りけるさる程に勢至丸は親の敵討ハやと勢
 ひ猛く出玉ふを時國これをとめ汝ハ親の敵とおもひて定明等を討とらハ血で血を洗ふ理り
 本の血は落ること今の血又染へし時國が定明等に討れんとて是過去の因縁なり彼を親の敵と
 て討ば汝が身に來らんこと一定ありされば生死窮りなく輪回たゆること有べからず定明を
 討んと思ふとゆめく有べからずと諭し玉へハ勢至丸ハ只管に涙にくれておわしける此に時
 國の舍弟に奈良本の金吾時貞といへる有て斯と聞より馳來り此形勢に齒がみをなし勢至丸に
 對ひて諫めて云やう此場に及ひ何よしと敵を討てありつるうと噺さあらし面色に勢至丸答て
 云く多門天の吠戸羅城ハ對威王が无育城たりとも父の敵こそりたりと承らハ討むかふべく候
 へとも父の制止の重けれハ力なく候とて又も涙にくれたまふ時貞は立上りさらハ汝は來るハ
 からず我は是より打立べしと二百余騎の兵士を相具し明石が館に押よせつゝ関をとつと擧た
 りける然るに何の音もなく南の庭より煙たらのぼり物たともせて見ぬしかば其邊のものに事

のよしを尋れば明石どのハ今夜頼死せさせ玉ひて只今茶毘せられ候とて皆々愁にしつみ給へ
 りと聞ゆ時貞即時に内に入て見まわせば棺の火も未だ廻らざりしかは弓にて薪をハねのけ棺
 を破りて死人を見れば眉間に射られし矢疵あり扱ハ此一矢にて明石は死せし者なりとて首を
 とりて馳かへり勢至丸に是をわたせば勢至丸これを見せて云く是ぞ先魁小弓にて射たり
 し定明が首ふて候ふとのたまへハ時國これを見給ひて

後れてもあるへきものか死出の山人もろれにの先だちにけり
 斯歎じつゝ又云く汝ハ觀音薩埵より申受たる一子あれハ必とも法師と成て佛教に皈し我々
 の菩提をたすけ自ら後世をも求めよかしと遺言しつゝ西に向ひ合掌して佛を念じ保延七年三
 月十九日四十三才にて朝の露と消玉ひけり妻室勢至丸が歎き聲んに品さし諸斯て有べきも有
 ざれば菩提寺の學頭觀覺得業を招請し引導師として暮山の野邊に送り東岱の煙とあしをわん
 ゆ七日々々の念佛誦經怠らず歎きの中に光陰うつり一百日にもありぬれハ五輪塔婆をいとあ
 みて佛事料あらす哀ふりし事をもあかき

一書云勢至丸小弓をもつて是と射玉ふよ定明が首の間に立にけり此統隠ふくて事顯は時
 國ハ一族怨を報せんこと必定なりとを明達電してあがく雷庄に入す夫より勢至丸を小矢見

と名け見聞の人々感せぬといふことあり斯て定明遠電の後隱居の心靜にして作りし罪を悔
 後世の苦を悲み念佛を怠らずして往生の望を遂ぐ其子孫み亦上人の流れを受淨土の一行を肩
 とせり小兒凡人にあらす豈怨敵を恨むる心あらんや定明疵を蒙るによつて跡をかくし往生
 をとげ子孫もまた淨土門に入ることと是知識のたくみあるべし凡夫敢てあやしみをなすこと
 をかかれ云々

〔第三〕 勢至丸登菩提寺學佛經 勢至丸は父時國の遺言に必わだを報ふことあか
 れ怨をもつて怨を報はれ仇何れの時にか息ん唯ねがわくハ極樂よ生ずることを祈りて以て自他
 の利益を圖るべしと有しよよりて深く菩提心を發し玉ける其年の彼菩提寺の院主觀覺得業勢至
 丸を弟子とせんと望れける素より父の遺言を承け母子ともに固辭ことなく得業に伴ひて菩提寺
 に登りて學文す得業はじめて佛經を授るに一度聞たば則覺るのみならず能其義理を解し一
 事教ゆれば十字を知り一義を教れば多義を通じ更も忘ることなく學文の性あだかも流るゝ水
 よりも速あり凡九歳よりして十三歳まで菩提寺に住して習學するに和漢の文書にくらからず
 諸の經論章疏よ於ては通を得たるが如しとぞ
 一説に云く菩提寺の院主觀覺得業といふハ原延曆寺の學徒ありしか大業の望の達せざるを恨

みて南都に移り法相を學んで所存を遂く勢至丸の母素氏が弟なりければ上人の少男なるうへ
 時國の遺言の事ありければ弟子とせられしことぞ

「菩提寺に靈木銀杏の樹あり圍四余丈高卅間余東西二十八間余南北廿七間余に繁茂して恰も
 山嶽の如し此菩提寺は美作の國勝田郡高圓村にあり岩間山と號す或は奈岐山ともいへり隣國
 に變なき高山あり本尊觀世音立像丈八尺役小角の開基にして鑑真和尚再興すと云々
 源空上人幼稚の時叔父觀覺得業よ從ひ勸學ありし舊跡あり世に誕生寺の奥院と云當寺に銀杏
 の木の太靈樹あり傳て云源空上人當山に勤學し給ふ時銀杏の木を伐て榎木とし給ひしを師の
 房の是をいましめ出家たる身はたとひ卯木たりとも生たるものを猥に切らんすへからすと教
 へ給ひしかば源空深く此事を恐れ給ひ榎木を元の庭上にさして整ていわく我行末眞の出家と
 ならば二たび此木より枝葉盛んどの玉ひける然るに二たび枝葉を生じ今に至りて本木ハ十四
 かへ余り又枝よりすりこ木の如き瘤さかりて其數百有余本あり誠よ大師の高徳眼前にいち
 じるし仰べし尊びへ志

觀覺得業のつくゝ動至丸の行狀を鑑みていかにも凡人よあらずと覺しかば徒に草澤の塵に雜
 ん事を惜み勢至丸に對ひて云く汝はあたら學文の器量あり田舎にしては其深理を究んこと覺束

あしらのゆへはかくしき明道とてあられれば所詮本山にのほりて學文あれかしと勢至丸きたへていかさま師の命に順ひて本山に登りて勤學いたし候へしと領掌ありしかと得業ハ勢至丸を伴ひて里にくたか母公に告て暇を乞ひて本山にのほらんと稱て母公の宿所にいたり如此の條を語られける母のいはく本山とは何地にはべるや得業云愚僧の本山の南都は侍れども聊據なき故あれば山門は他山あれども知己の僧徒住せらるれば彼方に登山せしめんと思へりと母のいわく夫はしかるべからず聞及ぶ比叡山は是より行程十日ばかり遠方のよしされば我子を見まくふとも容易は叶ふまじ又使者の者を遣すとも往還も日數を経て生死のほども期しがたく得業のしらせ玉ふ程の事を學ばせ給へい何の不足か有べき思ひよりさる事よとて歎き給へば得業もこれを掛置り是非の言もなかりしが勢至丸ハ諫て云く受がたき人身を受達がたき佛法の教にあひ眼前の無常を見て夢の中の榮華を厭ふべし就中父の遺言耳の底に止りて心の中に忘れぬやと比叡山に登りて速に一乘を學べし但し母世に在ん程ハ朝夕の禮をいたし孝行を盡さんと思ふとも有爲を厭無爲に入るは眞實の報恩ありといへり一旦の別をかなしみ永き日の歎を殘し給ふと云かたき呉をも懸め給ふに母もやうく道理にふくし玉へとも袖にあまる悲みのしのびがたくと見ぬ玉ふ稱あてて授けつゝの頃上り給ふそと問給へば明日こそ答へ玉ふ母といひめて是はけ

しからぬ日の吉凶も悉らみ供の者をも揃へて出立すべもとのたまはば勢至丸頭をうちふり自ら在家に候て公方へ出仕等にも候はば尤日の善惡をも悉らみ候事ながら此度の登山は随分通世の志に候らへば供の者も山まで送りつけん程三三人には遇べからずかやうの事はおもひ立ちる吉日よて候らへと言されければ母も今は爲方なくて終夜衣裝を裁縫朝よいたれば涙ながらに勢至丸の髪を手づから結び衣裝を着せかへやがて用意も調へば馬ふ乗しめ從者三人を添られけり得業よりも同宿の僧一人從僧一人贈文をもたせて從がはしむ時久安三年の春勢至丸十五歳なり

一説は久安三年の春二月十三日と云正源明義抄には天養二年三月廿一日美作を立靈佛龕社に參詣して偏に學文の宿願成就せしめ玉へと祈誠おこたらす去程に聊日數を経て同晦日京よ着明れば卯月一日あり兒出立のほらんとす供の者等まうしける流石山門は目恥しかるべく候ふ今日御髪をもけつり行水なども候らばめと言ければ兒いあくさしも母の今日と止めさせ玉ふも傳まらて京に逗留せんとよしなし行水せば何の詮かあらんとて出たちければ供の者等つふやきし登りけりと云々(爾有ときは上人十三歳の時にあたれり)

〔第四〕阿闍梨源光試三奇畫(さる程に勢至丸は日を重ねて京よつき即時に山に上り玉ふに下り松のほとりにて貴族の御出興も值奉る見物の人にとへば九條關白忠通公と申す急き

下て木陰に立より潜び玉ふ殿下車を駐て使者をもつて問給ふは兒異相あり何國より何方へ往玉ふを勢至丸答て云く我は美作國のものあるが幼ふして父を喪ひ山門を登りて出家し父母の菩提を吊ひ普く一切を利せんことを望み候ふと殿下重ねて山門の本房はいつれを答て云西塔の北谷持實房の阿闍梨源光の許へ登り候ふと公宣く勤めて努々怠り玉ひを折めらば又再會すべしと約してこゝろへ往かせ玉ひけれざる程に勢至丸の馬に打乗登り玉ひしと云

或説云忠通公館に飯らせ玉ひ御子兼實公に語玉ふやう今日不思議の小童に値り眼黄にして光あり頭に圓光の形ありて凡人にあらざる年十五歳西塔の源光を頼て登山すと云成長の後定めて高德の知識とあらん口惜き哉忠通年己よ老たり此人の化導よ達べからず死後に於て汝必此人の化導に依て出離すべしと想に語り玉ふ故兼實公別して上人に歸依渴仰ましますせしと云ん又正源明義抄には此とき上人にあわせ玉ふは月輪殿下兼實公にして勢至丸を御車の前よ召れ其故由を問せ給ひ相かまへて學文に心をいれ大碩學とありて兼實が出家の師匠と成給へとも後約束ありて殿下の通あり去程勢至丸の馬に打乗山より上り給ふに供の者どもに言されけるは汝等が言につきて京より滞留せば争か一の人の後目にかゝるべき既に殿下の浮出家の師匠と云ならば一天の君の御師範とあらんこと案の内あり天晴學文の門出哉とて駒をはやめて登給

ひしと云を何れか是るかや知らず

巖て叡山にわけ登り持實房に着て案内を乞源光取次の詞に順ひ立出て對面し何國より來られしと尋給ふに同宿の僧の曰是は美作國南都の觀覺得業今の當國菩提寺に住山候ふが御狀の候とて贈文を捧げたり源光披き見玉へば玉章久通せず互に心に萬里を隔たるが如し積愛の至りに依て拙狀を捧ぐ貴殿いかに柳正身の大聖文珠聖客一昧これを贈る願主

三月廿一日進上源光阿闍梨後房 沙門三曾已講觀學得業と書たりける文を見れば大聖文珠とあり兒を見れば日よ黒みたれと何とも異なる相なればいかさま兒の器量を感じて斯は書たるものあるべしと兒を止めて先試に止觀の要義を問給ふに敢て滞る處なし源光嘆じて曰此兒の神器我指南すべき物にあらざと功德院の皇圓阿闍梨に附たまふ

一書にいはいく源光試に先四教義を授るに籤をさして不審をあす疑ふ所みな天台の古き論ありけり誠に凡人にあらざとぞ申あへりけり此兒の智慧勝れて名譽ありしかの源光われは愚鈍の者なり智者ににつけて天台の古き義をきわめしめんと云て此兒を相具して功德院の肥後の阿闍梨皇圓の許に伴あわれける此皇圓は栗田の關白四代の後胤三河權守重兼の嫡男にして少納言資隆の兄たり隆寛律師の伯父光學法橋の弟子とありて當時の知識一山よ秀たる人也阿闍

梨勢至丸の知惠深き事を聞てたどるきて去ぬる夜の夢に満月菴に入と見る今此兒に値へき告
 ありけりとぞ悦び申されけりと云々又正源明義抄には上人十三歳の四月朔日に持寶房源光阿
 闍梨の許に至り給ふと有期て今夜其兒の器量を試んとて四方八面の物語をどしつ夜よ入て後
 のたまひけるは童子の田舎にて何々よみ給へると問給へば勢至丸答て曰く田舎のことに候へ
 ばはかしく差たる物も誦せず候と源光これによつて内典外典の物かやを悉く問給へば凡
 御尋の分は誦わたり候と答へたまふ楮は大略残らずよまれたり俱舎論はいかにと問給ふ未
 た誦せずと答へ給ふ源光さらば事の初に六百行の頌を教へ申さんとて本書をひらき一遍誦し
 てきかせ是を今夜の中にたばへ朝源光に聞せ給へと云々勢至丸うけ玉り候と領掌しけるやが
 て臥さしめけり勢至丸これを重ねてとけず此程の旅つかれにや前後も不知睡眠したりいつし
 か夜もあけぬれば源光は兒をたこしつゝ夕誦きかせ参らせし俱舎の頌はたばへられしやと有
 ければ兒はしばらく案じける故源光はさればころゆふべ只一遍よみ聞せしのみあればいかあ
 る文珠も習はずしても叶ふまじ況や稍て寝又たれば中々多くの頌の覺ること有べからずと思
 ひ給ふ處に兒稍ありて云く少々覺たりと存候ふ本書をひかへて御覽候らへ誦して聞かせ申さ
 んと云々源光さらばとて本書をひらき見給へば兒も共に本書を見るかとおもひ給へばさるる

として本書の方の見むきもやらす始め諸一切衆生冥滅拔衆生出生死涅槃敬禮如是如理
 師對寶藏論我書説といふより終の超勝五百應心待迦葉微羅釋三藏よ至るまで一字も脱さ
 ず六百行を空にさらりと誦せられたり源光これを聞玉ひ假令本々よみたりとも六百行を空に
 容易よむべきか大聖文珠の化身之夫晴我山の本願大師の再誕し玉へるやと怪しみ胸うちさわ
 ぎ不思議のあまり兒をつくく見玉へば頂き平にして黒き眼に黄ある光あり是更に人間の種
 にあらずと感嘆し有無の言も出ざりけるさる程よ昨日送り來し僧俗已に下らんと促すに源光
 返事を認め玉ふ其狀の文よいはく貴札の趣き明朝の露を拂ひ夫貴方に向ひて拜見せしめ候ひ
 畢ぬ抑大聖薩埵の御登寺もつとも一山の法燈燈臺の昌榮あり貧道淺智愚案老耄たりといへど
 も明眼多輩よして習學本望たるへきか頓首謹言大阿闍梨源光請文と云云余後源光兒に對
 ひてのたまひけるは源光は是一文不知の者なり然るべき禪房へも立入給へかし无智の身あれ
 ばをしへ奉るべき事あしかくてましまさば後悔あるへしと勢至丸のいわく仰りさる御事にて
 候へども唯不便の仰を蒙りたく候とて年月を送り玉ふうち既に十五歳に成給ふ(明義抄大意)
 (第五) 勢至丸祝髮受大乘戒 扱も勢至丸の西塔の北谷功德院の皇園阿闍梨に附
 給ひて勤學し同年の十一月縁の髮をうりて衣を著し戒壇院において大乘戒を受法名を善信圓明

と號す既に出家の本意をきげ青年頃の願望すでに満足せりと大に喜び給ひける余後時々師の阿闍梨に乞て僧衆の交りを辞して跡を深山林藪に隱遁せんとを願ひ給へども皇圓さらし許し給はず御遍は吾山の法燈一山の明玉と人々よろこびあり何ぞ今日此項の遁世とは思ふよらずたごひ隱遁の志ありとも先宗教を練達して後其本意をどくへさありと諫玉ふに圓明も實にわれ隱遁をねがふことはあかく名利の望をやめて靜に佛法を修學せん爲あり此仰實にしかなりとて三箇年留學し玉ふ圓明の智慧深きとあまねく其聞わたかく四教五時の廢立か々みをかけ三觀一心の妙理玉を磨く立る處の義勢まことに師の教に超たり皇圓いよく感し給ひて學文をつとめ大業をどけて天台の棟梁となり給へと平生いさめ言されしかども更に承引給はず尙これ名利の學文なることをいとひ只管に隱遁せんことを乞給ふ皇圓うの志のどくめ難きとさつししからば暇を奉らん遁世し給へ但日本中に閉居をたづぬるとも西塔黒谷の慈眼房敎空の御房には如じ夫へ参り給へよと心よく許し給ひしかは圓明は殆ど喜び稍て時をも移さず師にくれくも禮をのへ同宿の僧衆に暇を乞て黒谷にをもむきたまふ時久安六年九月十二日生年十八歳にして西塔黒谷の敎空の許にいたり給ふ

明義抄は久安六年八月廿六日左の手に茶筒を持右の手に茶筌を捧て既に遁世よ出たまふ

と云々又或書には皇圓遁世をゆるしたまはずといへども名利の學文あることをいとひ忽に師匠の所を出給ふと云々

上人廿四のとし嵯峨の清涼寺に七日參籠ありけるこれは法を求べき一事をいのり玉はん爲ありそも此寺の本尊は西天の雲を出東夏の霞をかけて三國に傳はり玉へる靈像あれはとりわきねもころに志をはこび玉ひけるもことばかりに覺ぬはへりける

〔第六〕圓明 就敎空 諱更 源空 一 抑敎空 上人と申は大宮攝政殿の御子にして良忍上人の御弟子之京極大臣高衡公の御孫に未たり給ひて中御門中納言家成卿又小野宮殿等の伯父公ありとぞ圓明十八歳にして此敎空の御房より参り給ふに折ふし止觀の談議の最中にて老若五

六十人集りあひしけるか圓明の來り給ふを見て申あひけるは是に來る若僧は當山無双の學匠の名を得たる圓明公に候ふ何さま法門を申談んとて参られ候とまほゆといふ圓明は御前の様に畏りて侍り敎空問て云く汝は何れより來ぞと圓明答て云く定めて名字をば聞しめされても候はん持登房阿闍梨源光の弟子圓明と申者にて候ふが遁世の志候ふよりして参りてさふらふと申上ぐ敎空重て問給ふ抑遁世といふは過去の心か遁世して來るか現在の心か遁世するか未來の心か遁世するか過去の心か來るといひ過去の心は去ておし現在の心か遁世すると言ひ現在の心の不

住なり未來の心が來るといわば未來の心は未至らざるあり佛心即魔界魔界即佛心一心爲一念遍
 有法界也と云へり何れの心が遷世して來るぞと云々圓明答て言く過去現在未來の心も遷世せず
 無始已來今世流當來之所在煩惱流轉流浪面々者衆生有苦顯罪心といへる此文の心にひかれて參
 り候とこたへ玉ふ時に寂空涙をながして言ひけるハ三塔に學座多しといへども寂空可憐に問た
 るに斯のごとく答ふべき徒は覺へず御房はこの流轉滅滅の法門ハはや落居せられたり其名は何
 と名のり玉ふぞと仰ければ善信圓明と申候と答へたまふ御房は實に法然具足の人なり今日より
 法然房と字し實名をハ師匠の源光の源の字と寂空の空の字をととりて源空と名のり給へと仰けれ
 ば今日より改名して法然房源空とも名のり給ひけるさる程に寂空密教を稟受して圓頓戒を傳へ
 玉ふ凡一切の經論内外の典籍博く練普く究めずといふとなし保元々年の春源空年廿四歳(或云
 保元二年春三月四日年廿五歳)つくづく思惟し給ふは教法もし時に背かハ何をもちて人を利益
 せんと嵯峨の釋迦堂に一七日參籠し斷念し玉ふと懸なり保元二年三月十二日南都の興福寺にい
 たり藏後僧都の許にして法相の法門をまなび六經十一部の論に眼をさらし四分三性の法門に玉
 を磨きて真髓を究めたまへり平治元年には中河の上人におい奉りて眞言秘法を傳授し四曼三密
 の法門をまなび玉ひける永曆元年初秋に招提寺の鑑眞和尚に傳戒を學び三聚十重十无盡をわ



きちめ應保元年四月に仁和寺の實雅法印にまかぬて三論を諮ひ長觀二年の初冬にいたりて慶雅法橋に謁して華嚴宗を學びたまふ鑑真寬雅慶雅の三師ともに其超絶を嘆じ或は供物を贈り或は章疏を寄附すとあり

一時源空華嚴經を披き見給ふに怪き青蛇來りて机の上に蟠るを見玉ふ弟子達大に驚く其夜源空の夢に怪き女來りて告て曰我の是天竺の無熱地よすひ善女龍王なり上人の佛法守護のため參る所なり必ず怖玉ふことあかれと示し終りてたちまち消ぬ幻の如く夢さめ思ねとそ又法華三昧を修し玉ふときは正身の普賢白象に乗して道場に現す又暗夜に書をよみ玉へハ光明を照して白晝の如し又眞言觀門の時の道場に入て阿字觀を修するに五相成身の觀行を現はす大日如來は是周遍法界の理自性清淨の本鉢なり非色非心の理かりに三身滿徳の形を示し無言無説の佛一實眞如の旨を説玉ふ斯のとき觀念したまふに五輪種子の觀にいりて九相の一身は無常の成する所と感じ益して通世の志しに進み玉ふと云(或云永万元年四月上旬近衛坂の西へ卿菴を結び獨學の志もありて隱居し玉ふと云是今の新黒谷の地あるか)

〔第七〕源空闍錫淨土弘直宗 上人既に聖道諸宗の教門に明ありしかば法相三論の種種圖々に其義解を感じ天台華嚴の明匠一々を敬慕才を稱むしかれども尙出離の道に煩ひて

身心安からず煩悩解脱の要路をしらんため衰食を廢てこれを棄じたまふゆへに略の論藏三國相傳の聖教和漢人師の所釋一々に高覽ありしが偶惠心僧都の往生要集を讀給ひて是は源信口證の法門ありと心をとめて見給ふ程にはじめて往生の樂は念佛を本とすると知り玉ひ爾後黒谷の報恩藏に入て周く一切經を見給ふと五通善導の五部九卷の疏論道綽の章疏等を悉く閲し給ふは第一遍に一代の經論を聖道門淨土門と二に分つべきことを悟たまひ第二遍に淨土門に於て專難の二に行あるべしと察し給ひ第三遍は大小乗の肝要は彌陀の本願名號の不思議あるべしと御覽あり都合三遍詮る處觀經の疏四卷にいわく一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故といへる此文の下より此度の出離生死頓證佛果の道は彌陀の名號に限れりと治定し玉ひ習學廿二年習學十二年の學業をさしをきて安元元年乙未生年四十三歳にして終淨土門に入末代惡世の衆生極惡最下の凡夫の得道は彌陀の名號におさまると堅固の信心に住し専ら念佛を修し給ふ源空既に自行立るより推して他よ及ぼさんと思しめせとも如何あらんと危殆思し召れけるに其夜の夢に紫雲一國に滿ちて无量の光を放ち其光化して百寶色の鳥となり中に高僧ありて腰より下は金色身を現じたまふ源空問て曰く誰人哉と吾は善導汝將よ念佛を取通せんます故に來つて證明するなりと覺て大に喜び給ひ是によつて源空の志決し玉ふ

一日源空往生要集を讀し給ふに觀佛三昧を勝たりとし念佛を劣れりとし給ふ源空坐に有てしはらく是を難し給ふ源空はなはた悲て不興ありしが後またこれをおもふに其由あることを悟りて源空をして代辭せしむるに聞て益々これを敬ひ給ふ源空臨終に本尊聖教の類ひ盡くこれを源空に譲り玉ふ安元々年の春年四十三にして黒谷を出て吉水お移住したまひ淨土の一門を闡揚し不興宗を弘め玉ふ一國の人風に靡く呻のごとく其化導にしたがひ高倉の帝禁中にまねかせ玉ひ菩薩戒を授り給ひ后宮妃女群臣多く戒を受るものあり

一書に治承二年十月上旬源空四十六歳にあらせ玉ふ時黒谷へ參り慈眼房源空に請し玉ひ久しく面會もあらざること互に謝あつゝ御物語の序に源空のたまわく貴僧實や此近年は念佛諸宗に超過せりと立玉ひて自ら念佛に皈し人に道心を勸るにも念佛をもつて生死を離れよ是も過たる法ぞしと申さるゝよし然や源空こたへて左候ふ此度の出離はひとへに念佛をもつて決定の業と思ひ定めて候へば自ら修行いたすにも他人を化益いたすにも稱名念佛を仕候ふとありければ其時源空の白先師其忍上人も觀佛三昧殊に勝れたりとて仰られしとて聖道修行の甚深の容を仰あるに源空は念佛の諸教に勝れたる様を立たまふ互に慶喜にて數文釋をよるひて問答あり源空の曰横法相なること得道決定あり特横に相背かば凡夫所入難かるべし源空の

上人等佛三昧等の深奥の法を望まんや彌陀の願がたよりずんば出離不定と存し候ふ敵空の
 云く凡夫として聖人にあらんと言は一向小乘あり生死を離べからや一切善惡都莫思量あるう
 へハ諸法を一佛乘と開會するに何者が漏んやとて大いに笑ひ玉ふ源空言わく是の事新しく覺
 え候ふ八宗九宗の法門はいづれも勝劣なく候ふ教のごとく修せば其證をあらわさんと掌を
 返さんが如し其證素より不審候は機法相應して凡惑ひとしく得道せん方をハ叶ふまじく候
 や文證をもつて言上候わんなりと敵空かへつて腹立玉ひ汝は誰にあひて習所の法門を流石に
 敵空が智分は物ふたとへば大海の如し汝學匠とおもふ共敵空が下をかし我に向ひて斯ること
 を言すとて寶玉ふ源空迷惑ある面色して是は法門よて候はて一向淨論にてころ候へあわれし
 かるべき判者だに候え、落居すべく候ものごとく言ひけれハ敵空腹に居かねて念佛勝れたらば
 汝ひとり言せ其處まかり立とて御傍なる杖をとりて投つけ玉ふ此とき御前ある同侶達申さ
 れけるハ斯ほど仰せ候ふに先立せ玉へと言ひけれハ源空力なく立玉ふとて善導和尚も上來雖
 説定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名と釋し給へり稱名勝れたりといふと明あ
 り聖教をばよく御らん候らわでと言ふ敵空ますすハ腹をたて寶玉山王を御照覽あれ自今
 已後師弟の養有べからずとて棲まて進て掛給ひ足跡をどつて進まに打たすハ左の耳のま
 じあり紅血しほなかれて逃給ひけり時ハ國宿の僧母木方こちよきとにぞ思ひあひける
 人如に勝れたるを猜み劣れるを身むならひにて此程余りに學匠めきて有つるに最まみよし其
 上上人御暫狀ありて御打擲あるうへは容易免し玉ふと有ましとてみなく密語給ひける
 同三年二月敵空病ふ臥し給ひける由源空傳聞給ひて登山し給ひ忍びて御房に參り給ふ學秀僧
 都をよび出し宣ひけるは御違例のよし承候ふ間御老鉢の御專にて候らへはいかがと存し登山
 仕り候と言ふ學秀僧都喜びていはく上人此ほど仰せありしは三百余人の弟子の中ハ法然房
 は誠の大學匠あり敵空が怒たるをよも本意とは思ふまじされは偏念はあらじとぞ仰られし衆
 和敷も登山し給ふもの哉しはらく忍びて待せ給へ首尾よく計ひ申さんとて傍の間に置て稍て
 學秀は敵空上人の病狀を伺ふに敵空目をひらき燈かき立よとの給ひて階各に對ひてのたま
 ふやう人多しといへども法然房は心あるものあり敵空は明日辰の一天に臨終とへきなり法然
 房はいかでかするへきと仰けれは學秀の言さく法然房は内典外典に通じたる學匠道心者にて
 候らへば先達ていからせ給ひしとを聊遺恨に存せざるべし師病著ふ臥給ふことを承り候へ
 ハ登山仕つり余所あから承わらぬ事は候わじとされと先頃の御制文を恐れて近房に候らん
 も知れず候ふと申にそ敵空言くあわれ來れかし何事も言ふとめんとおりけれハ學秀坐を立

て精しく有せ出来ぬ折ふし法然房まいかて候ふと言われければ寂空これつと仰ありて源空御前に畏る寂空拜笑給ひられしくも來り給ひたり去願書狀せし上打擲に及びしかり定て無念におもひ給ひてよも登山はあらじと存じつるよ只今來臨あると悦び入侍る一期の對面是ぞ眼りあへしとて御心底のことも與々御物語ありて書記せんとて硯紙を召よせて自筆に認め給ふ當坐の人々今何をか書せ玉ふらんとねもあへり是は聖教の讓狀にして其文に云く讓渡聖教之事比叡山西塔黒谷の經藏に置所の五千余卷の經論北白河中山の經藏に安所の三千余卷の聖教殘るところ多く讓與る也仍狀如件

治承三年己亥二月日 寂空判

法然房と書たり此時にいたつて日頃源空を猜み

誘りし同侶見達も至るまで此ありさまに皆一統口を閉智者と智者との論談子細ありけり密語あひて偏執を失ひけり中にも淨憲法印の師の杖の弟子よあたるは法門の印形よして面目ありと感じ給へり寂空御急病と披露ありければ諸方より檀越の徒弟來集凡四五百人もあひけん諸寂空上人其夜も明ければ本尊にひかひ威儀例のごとくして即悟三昧よ住して終におわり玉ふ滿座の諸人涕泣斜ならず阿難尊者の恒河の邊にして四十余年の化儀に付て三昧定に入玉ふが如し時の哀傷師弟の余波其に聲もがたき事どもなき斯て有べき事あらねば傍棺をじつら

ひ入棺し奉る兩三日を経て既に茶毗し奉らんとする時寂空傍棺の中より此棺の蓋をひらけと仰出さる各驚き騒ぎ周章て空信學秀秀棺を開きければ棺の中より自ら起上り御手を引れて出させ給ひ源空にひかひ坐具をのへ三禮をみし源空本地身皈命大勢至化度衆生故於娑婆出現と二度となへたまひてのち御座にたほり諸人にひかひ泪をおがし言ひけるは法然房を炎魔王宮に涉沙汰ありつるを聞て今こう存じたれ我未だ定に入らずして有し所は炎魔王來現して大日本國源空の本地寂空に拜せしめんとて誦して云く源空本地身大勢至菩薩衆生爲利益度々出現故と誦して去りにき斯る薩埵の化身を罵り打擲しつる罪障を懺悔せんが爲に又蘇生するありとて硯と紙とめしよせて讓狀を硯紙にかきて四明天台の沙門寂空判進上法然上人と書あをし源空に奉つり玉ふ諸寂空源空にひかひ十念相續して往生をどげ玉ひけり先には三昧相承して即悟三昧に住して終り給ひけり今度は念佛三昧に治定して禪定に入がごとく御息絶させ給ひけり親佛念佛の両益をあらわし二度往生を遂させ給ひけること尊しと云々(或云上人一向専念の身となり玉ひしかば終に叡山を出て西山の廣谷といふ處に居をうつしたまひけり又幾ほどもく東山吉水のはより開なる地ありけるに廣谷の菴をわたして移りたまふ尋ねいたるものあれば淨土の法をのへ念佛の行をすしめらる化導日々盛んに念佛に販するもの雲霞

のてとしと云々)又一説に善導大師源空の夢に現れ玉ふり治承四年庚子源空御年四十八四月七日夜の事ありと云尤夢想は高山の中程に源空いまして見玉ふに南北遠く西に向へり峯より三重の瀧落て清水濤々として龍の大河張り流る其傍に大道の通驛あり男女多く往反すしかるも西の方を見玉へば地より五丈ばかり上りて空に一群の紫雲ありて此雲飛來て源空の所に至此紫雲の中より孔雀鸚鵡れよび百寶の色鳥とび出て四方に翔り其眼より光明を放ちて十方を照す又其雲の中より一人の僧現る其姿腰より下の金色にして上の墨染の衣あり容顔微妙にして老年六十ばかりあるが合掌を胸にあて、高聲に念佛したまふ其念佛の聲ごとに口中より化佛しきりに出現したまふ源空問く是の誰人にてましますそやと僧答て我は大唐念佛興行の祖師善導和尚なり汝専修念佛を弘る事たつときが故に來れるなり今高山の頂きは念佛三昧万行万善の上々の頂きを表する處なり三重の龍は江河のながれ汝が勸化念佛三昧の注水法滅百歳の時まで利益あるべき瑞相あり百寶色鳥眼より光明を放ち汝が頂きをてあすは六方恒妙の諸佛汝を饗念したまふ殊れありとて寸念を授け給ひ眉間より光明を放ちたまひ異香薫じぬたるとみて夢さめたり源空おもひめぐらし給ふは是正しく我念佛利益の海内に普く流布すべき瑞相ありと夫よりいよいよ念佛の信心ふかくまはせしとん

〔第八〕東大寺大佛再建源氏大勸進殿 治承四年十二月廿八日本三位中將重衡卿父平相國清盛の命によつて南都を攻しとき東大寺に火罹りて大伽藍忽ちに灰燼となる是(重衡東大寺を焼亡す治承四年の冬南都の大衆平家を怒む事ありて蜂起騒動して静らず是によつて平相國清盛入道追討使を遣さんとて十二月廿六日藏人頭重清朝臣を太將として其勢三万余騎南都へつかわさる同廿八日重衡三万余騎を二手に分ち奈良坂般若路より押よせ時をつくる衆徒も用意のことなれば時を合せて散々に防戦けると云々播磨國住人福井の庄下司次郎大先俊方といふもの重衡朝臣の下知によつて楯を破て練松とし酒屋在家より火をかけしが折節風烈しく猛火吹覆東大寺興福寺の佛閣諸堂諸院一字も残らず焼亡せりと源平盛衰記に見えたり)に仍て後白河法皇再興を企給ふに舊例に准四方に勸進せしめんとす然れども事容易ならず尙も其人にあらざれば功成すべからずと大勸進の聖の評議有けるに源空其撰びし書り給ひければ即右大辨藤原行隆朝臣を勸使として大勸進職たるべきよし宣旨云南都の佛法滅亡の條朕愁歎に思ふところ上人いかでか同心せざらんや賊徒等七大寺を亡すといへども余はしばらく間東大寺はこれ先皇の御願あり十六丈の盧舍那佛一時に破滅す身量靈應として置てころあく思ひす早く上人請仕を加へられ宜しく佛閣を建立し佛像を安置せられれば朕が喜悅のともる也先皇御心奉ると云源空宣旨の

越前守と申す者、源空を召し、源空山門の要りを通り、越前に住居
 いたす。其の間に佛道を修じ、念佛を勤行せんが爲まり、且は年齢の
 候ふ、就中山林籠居の身に、斯る大勸進、最禪り甚しく、候ふ、自余の貴禪房へ、仰せ下され候ふと、固
 く辞退申されけり。法皇源空の修答を、問召押して、仰下されけるは、弟子等、社中に然るべき器量の徒わ
 らは、指圖申されよと。源空まうさく、若俊、乘房、重源と申もの、此職を承るべきかと。存候とありけ
 れ、即ち勅使ありて、重源を召さる。頃て、参内仕る。是によつて、大勸進職に補せらる。重源、左右を、領
 掌し奉る。間後、白河院の修奉加に、云奉加、令ひる。佛閣造營を、あすべき。事、右奉加に至りて、八東大寺、佛
 殿、金堂、講堂、戒壇院、來迎堂、鐘樓、經藏、佛閣、寺聖殿、湯屋、大透牆、凡目錄斯のごとく、造營の間
 防州をもつて、私領として、造功をなすべし。匠の大工侍從、大納言種安に、補す。宣く、諸人助力すべし。奉
 行、左少辨行隆に、下知を加、仍執達如件。養和元年、壬巳四月日、參禪、正少弼藤原朝臣、泰定、俊乘
 房に、奉る。修奉加の目錄、奉行、大工一紙のせたり。重源、これを給りて、源空の見參に入まいらするに
 奉加の趣きを見たまひて、仰けるは、天時阿僧の權者か。是程の大勸進を受られけるぞ。言ひしと
 也。

一書に、此時の勅使は、藏人信國と云々。又重源を、澄源と作る。

後、乘房名は、重源姓の紀氏、瀧口左馬允季重の三男、別部左衛門尉重定出家す。仁安二年、宋國にわた
 り、建仁寺の開山、榮西禪師に、彼土、四明州にて、遇て、相伴ひ、天台山上り、翌年の秋、榮西と、借よ、吾國
 へ、販り、後源空上人の弟子となりて、名を改めて、重源といふ。東大寺の大勸進職に、補せられ、即ち一
 輪の車を作る。其大さき、身を容る可にして、車の左に、詔書を、貼り、右に、幹疏を、貼りて、州縣を、巡行し
 万民を、勤め、十餘年を経て、成就す。元久二年、六月五日、寂す。或云、至公日、壽八十六と云々。

爾後、重源は、伊勢大神宮へ、詣て、三七日の間、參籠し、我此度の重職、わたくしの名利に、あらを、偏に、伽藍
 草創の爲あり、何とぞ、速に、成就圓滿せしめ、玉へと、丹誠を、抽で、祈請を、ごめられけるしかるに、三七日
 滿る。曉の夢の中に、唐裝束を、せし童子、方寸の玉を、授けたまふと、見て、覺て、みれば、彼玉、現し、袖のうへ
 より、あり、重源、おまりの、尊さに、感涙せき、あつた。是を得て、首に、かけ、諸國を、親進するに、綾羅金、繒、錢、貨、米、
 數金、銀、銅、鐵、絹、布、綿、馬のたぐひ、心に、任せて、出來ると、風に、神木の、靡くが、ごとし。

第九、於上西門院、說戒。並、小蛇、生天上。壽永元年、七月上旬、に、源空上人、上西門院
 の、招請に、より、七日の間、御說戒あり。沙彌戒、具足、戒、少律儀、戒等の、御說法あり。女院を、はじめ、官女、群臣
 塵、涙を、まほせ、かむかるに、ニッの小蛇、初より、唐が、きの上、に、蟠、屈、七日の間、動かずと、きん、耳を、割
 だが、勢を、お説法を、聽聞す、かを、疑ぬる、ひと、奇異の、思を、まほし、は、五廻、向、結、願、あ、ま、て、請、會、を、は

る時は彼小蛇唐垣の上よりすべり落死しけりうの小蛇の口より十口三六かりある童子唐装束し
て髪脚ゆひたるが天をさして昇ると女院月輪殿は御らんあり以下の人々の目には蝶出て天をさ
して上るとみるみる處は不同なれども正しく蛇棄を免れて天上しけりと感じけるいふし(思表
比丘武當山よして無量義經を講讀せしに聲をさく青雀歡喜苑に生ぜりと斯の如きことを思ふ此
小蛇も大乘の結縁によりて天上に生れ侍るあるべしと云々

源空上人は既に聖道門を捨て浄土門に皈し念佛三昧の大導師と成り玉ふされは悲心僧都要集
を作り念佛往生を勧め玉へどもいまだ日本に浄土宗といふ宗旨あり又禪林寺の永觀律師往生
證の式往生捨囚を編て念佛往生を勧めたまふといへども是も又浄土宗といふ宗旨弘まるとあ
り天竺大唐には浄土宗といふ宗旨あり天竺にあるとは菩提流支の聖財論に出たり又唐土に
あるといふ元曉の遊心安樂道慈恩の西方要決加才の浄土論に出たりする程に源空上人天竺唐土
に浄土宗といふ宗旨のあることを考へ給ひて日本において念佛往生の宗旨を初て弘め浄土宗と
號し六十余州を弘めて他力の信心を勧め給ふ念佛往生の太祖あり

〔第十〕遠州櫻池源由 諸源空上人の山門にて初めての師匠なりも持實坊の阿舍梨源光は
慈覺大師の諸弟慈覺僧正の徒弟にして惠信の僧都皇國阿闍梨等は弟子たり則光學法印の寫瓶

たて四師夫合宿生の流は教ては夫師の明匠と稱する一流の長者たり然るに斯る碩徳も諸宗の習
學うすくやあはれ妙な又いかある興樂に住し玉ひけるは或度修行にては成佛すべからず然
れを善人世生を更れば穢生期忘として今佛法修行する處を忘へし所詮生を更めずして彌勒菩薩の
出世に種奉り情を開かんは如しかへれば長命せせんは叶うまじ長命の術は蛇身にてこそ有ん
し何の國に於然へき池ありんとて弟子等を諸國に遣はし見せしめ給ふ時に東海道を巡歴せし但
馬の社籠燈籠と云ふ小僧かへり登りて言やう遠江國笠原庄櫻池の池とて候ふ南は滄海万里あり
北は幽林森々として海を去ること遠からず奥ある池にて候とまふ源光これを聞たまひ其領主
は誰ぞとのたまひければ徳夫寺殿の所領と申す情の源光が檀越なりとて情を玉ひされども
存ありとせ沙汰百兩を興へ永代放改をとりて去嘉應元年六月十三日命終の夜半に堂に水をを
是をたへて終に没せり其後雨ふら風吹かざるは彼池は候かは水増り大濤たちて池の中の塵
悉く拂ひわく諸人耳目を驚かすよし彼所より領主に注進せしかば時日を考へ給ふに後醍醐天皇
終の時日に有けるぞと當時にいたるまで靜ある夜に池中は鈴の音聞ゆるよし言傳ふ源空上人
の言々智慧あるゆへ生死出がたきを知る道心のゆへは佛の出世を願ふ浄土の法門を知らざる故
は斯の如く興樂に着し給へて我浄土門を今七八百年已暮に見出し候は本道の阿闍梨に往生の益を

授津らざるべし口惜き哉とて書後七玉ひしとて御弟等言ふ聖道門の請宗に似て生後を離るる道は候はずやと源空言はく一代の諸教區々々皆殊勝なる初華嚴の專理圓融法界唯一心の觀摩舎の四歸縁生觀方等の彈阿婆誕觀般若の盡淨虛融の親行法華涅槃の唯一乘醍醐指捨の妙藥顯密大小權實みな一のの益甚し斯の如く深理の法門は習學するといふとも是を行と迷るとかなしされば源空はいつれも大略修行せしかども末世におよび濁世になりぬれば機分あるところへ得道かたければ時機相應して念佛の法に治定してひとへは密陀の誓約を頼み奉るありと仰ひる其後しかるべき弟子等四五人召具して遠江國櫻の池に至り玉ふに「櫻が池は遠江國空原の庄にあり在昔源空上人の師匠源光阿闍梨彌勒の出世を待んとて入寂の後大蛇と成て此池に住給ふ今も其夜には輪を振音聞ゆるとそ空上人の給わく師の在世に淨土門をひらかり斯るまよひは取りせたりまのりさらしとて云云」池はすみで塵も草も茂らず澁濁たてり上人はじめ徒遊ひとし阿闍梨經と四五卷念佛數百遍とあへ給ひしかば淺ましき大蛇のとわたはて水玉に浮出給ふ源空塵落涙し玉の顯へり師の源光にてまじはるが本身に復して現せさせ給へ斯のことも異樂に住せし玉ひけんと母案の甚しきなりと引續ありけれは蛇形忽ち水中にしすんで後行法の跡を現もて又浮み出玉へり不思議ありし事とるなり(明義多天書)

案るに源光寂し玉ふ時嘉應元年と有は源空の言ふやうを考れば凡安元年中の比なるべし又一説には功徳院の阿闍梨皇圓蛇身成櫻の池に住玉ふといへり功徳院皇圓も敷山相生法橋光學の弟子にして源光の師匠たり顯密の學者にて源空第二度目の師とす何れか是ありやんらす

【第十一】 於大原藤林院源空論諸宗碩師 敷山天台の座主權大僧正顯具と申

願徳おのしす其初いまだ大僧都にておわせしとき承安三年生年四十三にして官職を辞し菩提をもとめて大原に籠居給ひて生死の出かたきをのみ嘆き玉ふ斯て春秋四年を経て又山に歸りて行法を修し松の月をもち常に隱遁におもひを遣らし給ふと八年ばかり常に永辨法印と出離解脱のこのみ發せられけるに斯の如きとて源空上人に御尋有べき由申されけるにより頃は文治二年の春相模房と云僧を使として源空上人の許へ遣され山へ御昇りのたよりに必を訪らわせ給へ申承り侍り度との候由仰られしかば源空坂本へわたり給ひて斯と申されけり顯真おのしすあひて坂本にくだり對面し給ひ問て云く此たび如何して生死をはかれ侍るべきと言ふ源空いかにも御はからひに遇へからず顯真まことにかあり但し先達にておわすれば若思ひ定め給ふ宗あらは示し給へ其とき源空上人云く自らの爲には聊おもひ定むる旨候らへば唯はやく往生極樂をとけ候ふべし顯真のいわく順次の往生遂がたき依て尋言す所なり如何して此たび容易往生を

迷へきや源空の云く成辨はかたしといへども往生は得安し道綽善導の意によりは佛の願力を仰ぎて是を縁とし凡夫淨土に往生すと其後たがひに問答言説なくして源空別を告て歸り給ふ斯て後顯眞のたまふやう法然房は智惠深遠ありといへども聊偏より執の失ありと云云

源空此ことを傳へさうたまひてされば我しらざると云へば必ず疑ひの心を發する也と云々これを又顯眞人傳に開きたまひまことに爾あり我顯密の教をはかつて稽古をつむといへどもしかしあから名利の爲にして淨土を心ざんず道綽善導の釋をもうかがわず法然房にあらすんば誰にか如此ことばを出すべきやと此言取取て百日の間大原に隱居して淨土の三部經天親龍樹の驗文善導の五部九卷の疏それのみ略らず五祖の釋論章疏を閲し玉ひ義理を案じ給ふと良久しく其後弟子等此對しての言は顯眞既に淨土の法門を具覺たり夫にのきて不審多し今たひの不審之う法然房に發せせん有べかぢ教に法然房を招請して不審を明さばやとの給ひければ各こたへ云く出離の欲事の御法門權道淨土の折簡を以争か御一人して聞し召すべき此邊の碩徳達學匠たちを召問しめられて不審の條々を立仰られ候らへと言にぞさらば各はからひ候らへと仰けれハ相模の阿闍梨に題文を書て持て廻らす法然房の方へは侍從已請を使者として仰せけるは先頃得せし淨土の法門之の程狀源に還語して親覺を待べる夫につき諸宗の教する處相違の間落居

のためは看す必日立いたらせ給ふべしと法然御返事云く承知せしめ候ふ參り承はり愚案をもふすへしと云々さて顯眞僧都の題文につきて文治二年秋八月上旬洛北大原勝林院の立願寺に當日集會(本堂或は六堂と云)する八宗の碩學には光明山僧都明通(高野山)侍從已請眞慶(笠置寺)解脫上人也法相宗にて天台淨土を兼學す(長樂寺の印西聖人所々の通世の人々には當所大原の本性房澄教)八宗の碩學之(嵯峨往生院の念佛房)天台宗(大原來迎院の明定房)薄慶(天台宗)宗之(菩提山の中尾の蓮光房)東大寺の僧(蓮契上人)師弟(十余人)を招く山門久住の輩には大僧正智海(天台碩徳)權大僧都證眞(天台宗)印嚴僧都竹林房(眞言佛心天台碩徳)權少僧都覺行淨然(法印權少僧都空阿房)慧光房此外妙覺寺の上人覺行僧都慶禪菩提山藏人入道佛心房心安然(野山眞言)長樂寺定進房(天台)八坂大和入道見佛(天台)松林院清淨房櫻本の究法房聖光房等也

(右は大原談義開書抄大意)又明義抄に此外に淨賢法印淨憲法印仙義律師學秀僧都淨寧法印生馬の上人松林院仲德房觀空房神樂岡の淨空房中山の信蓮房淨遍僧都實惠上人寬雅法印康雅法橋醍醐の蓮生空範石山の僧都覺圓高鬼の慈蓮房寶寺の求法房仁和寺の勝願房範顯僧正顯眞僧正攝尾明則上人を加ふ就中明惠上人ハ傳云く承安三年正月生る九歳よして高尾の文覺に從ひて出家して剃髮す廿九歳にして梅尾山に於て嚴密に教首宗を唱ふと云云按るに文治二年三國七高僧傳

の十四歳にして朱得度せざる已前より此れ此たびの論議に集會あるべからず非といふべ
 (大原問答の古跡は京洛北山大原の郷に今魚山勝林寺といふ本尊を證據の阿彌陀と號す文治
 二年法然上人と山門の學徒諸宗の碩徳と論議有し時本尊光明を放給ひしとそ則ち專修念佛
 の利益他に超過せし證據を知らしめたる事不慮ありといふ)

右證與淨嚴等曰下山門の碩學三十余人并に南都北嶺の有智二十余人催し依て參集す覺行僧都
 覺禪聖光房等を首領とし諸宗の碩學二百余人三井の大貳僧正公胤上首として門徒の學匠百余人
 ざり其余惣して廻又預からざれども心ある老若大學匠三百余人あるひは偏執の徒もあり或り
 まことの道と曠たさふるもあり彼是集會して列座あり其余聽聞の道俗貴賤二千余人來集す源空上
 人の斯のごとく南京北嶺寺院邊土の碩徳大學匠念佛偏執の人々集會する程の大義とは夢々しう
 しめさず唯後生菩提の爲に聖道淨土の相違自力他力の衆生の機分等安心の所談と思ひし弟子
 も唯世の俗の法談と心得かゝる匠をば覺悟し玉とされ何の用にも立まじき初心晚學の愚痴无
 智の入道等ばかり供せられたり其中にも東大寺の大勸進俊乘房重源隆寛律師即智空安居院法印聖
 覺を上首として彼是二十余人ばかり源空聖人仕刺の事と思召て龍禪寺に至り給ひて寺門をさし

覗き見玉ふは三百余人の高僧正行と列坐せられたり發起の顯具止坐して左の袂は太原の本性
 上人堪輿石の方に玉實範碩徳左右に別れて著坐あり弟子の入々は是を見玉ふわや此ほど任々座
 にして法然上人淨土の宗義を立させ給ふとをのみ妙法し或は憤り難する徒の折を得て各回心し
 家集せしと覺むたり此たびの聖道淨土の勝劣大小權實の對判結句と見ゆていがある又珠舍利
 佛の智慧ありとる所ふまじ三百余人學僧は上人法門に結り玉は、我情の手技をみてたてまつり
 永く釋土宗の旗幟を倒去折らんと義定の氣色あらわれたり實に古今稀代の宗論得道の折角なり
 源空一期の御大車これに過じと見ゆ御弟子達は我師匠今日を限りに失玉ふべきと思ひおへり
 諸經の肝要一代至極なり此文ありといふと破れんと思ひて心も身に然す然る所源空御弟子
 等に言、吾人は兒を扶持し髮をけつり手足を洗ひ物を教へたを背を折て弟子を扶く源空は公し
 人等も折らば二千余人の弟子を殺たるぞとよつふひ給ふ其時御弟子等此御師に少し力を得た
 りける程に源空は群り集ひし聽衆をかきかへ入給ふ正面の脇の間より望玉ふ源空の御師の中
 以信濃國住人角張の七郎太郎入道成阿といふ者上人の御袖の下より潜通きて上人の御前より立寄
 り源空の氣色を見れば上座せられたりけり源空は高麗の墨を粘重ぬり其上野の皮を敷て座を
 られたり上人の御坐を見ゆて大威嚴の墨を粘重ぬり下座なり源空は上人の座をぬりては成阿思ひ

の昇元三年に正覺大師と謚す宋の大平興國三年に圓悟大師と謚す宋の乾道二年等徧正覺圓悟
 大法師と謚す諸傳よ委し今爰も盧山師を引證の初とす誠も知ぬ淨土宗自立の義にあらすと漢
 朝の元祖を出す是他をしてしらしめんと欲するか樂邦文類に云淨土生るゝを勸む固に大覺慈
 尊より出然して此方の人をして念佛三昧あることを知しむるハ應ふ遠公法師を以て始祖とす
 べしと云云

諸の三昧とは法華に十六三昧を説涅槃に二十五三昧を説般若に百八三昧を説加之大經に百
 千三昧と説法華には百千万億恒沙等諸大三昧と説仁王には無量諸餘三昧ととく是等のことと
 諸の三昧の中に於て功高く進易きは念佛を以て先とす是を以て念佛三昧經に三昧王と説り即
 此謂あり問云何の故ぞ諸の三昧の中に唯念佛三昧のみ功德高きや答云諸の余の三昧は各一隅
 と守つて諸の徳を徧くせず唯この念佛三昧のみ諸徳圓備せり故に大論七云復次に念佛三昧
 は能種々の煩惱及び先世の罪を除く餘の諸の三昧は能煩を除くと有て瞋を除くと能はや能瞋
 を除くことあれども姪を除くこと能はず能痴を除くとあれども婬を除くと能はず能三毒を除
 くとあれども先世の罪を除くと能はず是念佛三昧は能種々の煩惱種々の罪を除く云云五會讚
 に云く然るも念佛三昧は是眞の然上深妙の禪門之乃至修し易く證り易し眞に唯淨土の教門
 なりと云云

元照師ハ佛風通載十九云錢唐靈芝寺律師元照字湛然餘杭唐氏の子少くして祥符東瀛惠鑑師に
 依て毗尼を學ぶ神悟謙公に見るに及で天台の教觀を講す博く群宗を究め律を以て本とす又廣
 慈に従ひて菩薩戒を授る戒光發現して明漸律義兼備せすといふとあし南山の一宗蔚然として
 大に振ふ常に布伽梨を披て錫を杖て鉢を持食を市に乞ふと云云佛祖統記廿八云元照は靈芝に
 住す律學を弘む尤意を淨業に屬す一日弟子を集めて觀經および普賢行願品をよみ加跣して化
 す西湖の漁父みな空中に音樂を聞と云々

屠沽の下類とは牛羊の肉を割てこれを賣を屠といふ酒を造りて是を賣を沽といふ皆賤き者な
 り故に下類といふ
 第二番に永辨問曰今此淨土宗ハ權實の二宗の中に權宗あり漸頓二教の中ハ漸教といふべき哉其
 故に此宗は眞如實相第一義空の理を明さず只苦厭欣淨指方立相の旨を宣ふ而るよ何ぞ此教を以
 て大乘至極の頓教とせざるや
 源空答て云淨土宗は實教なり是故に或は眞宗といひ或は頓教と名け或は一乘と名つくるあり但
 通途の權實はみも自力に約してこれを明す弘願の一法に於ては偏に他力に就て之を論すしかれ

付實教といふも自力の實には異り頓教といふも聖道の頓には異り故に權に似て權にあらざる實に似て實にあらざる漸に似て漸も非ず頓に似て頓に非ず既に權實漸頓の所攝にあらざる知ぬこれ諸宗超過の法門なり但し權實の所攝に非ずして強て眞實の名を立つ而も他力眞實の跡を示す漸頓の所攝に非ず而も假に頓教の稱を與へて横超横截の用を顯はす是故に和尙の云く我依菩薩藏頓教一乘海邊云云元照の云く故にしんぬ一切淨土の法門の皆これ大乘頓頓の法あり定て備小にあらず此等の所釋なれば依用せざらんや

永辨は繪詞傳云く惠光坊永辨法印は證眞法印の立義の師ありと云云
 第三、智海周曰く大乘眞實の理を明す是實教と名く是心是佛の旨を存す是を頓教と名く今此宗には生佛一如の道理を明さずしかる偏に厭離穢土の安心をすゝめ寂滅無生の實義をのべせ而も偏に欣求淨土の起行を談し専ら權門漸教の法門を附傍し全く圓實頓速の宗義にしたがわす縱ひ專を他力にまかせといふとも實頓の名尙以て心此を得がたむいかに況や權實の所攝にこゑて利さへ超過の義を論ずべけんや源空答て云く疑難の趣き偏にこれ自力修行の道理に約して漸頓權實の差別を存せ至く他力弘願の密意の教門なることを知らず悼べく悲むべし夫諸佛の法は眞如佛性を以て殊極ともし無相泥亘をもつて所期となす此理をばあれて外に全く別の法なし然らば三

世の諸佛の教導の必す重道淨土の二門を設るといふ二種の勝法とるに無相無念の一理に入らめんが爲也所入の理は同じといへども能入の門に自力他力の別あり自力を劣りとし他力を勝れりとする其聖道門とは是にのひて二あり一には漸三は頓頓も頓につひて又二あり所謂教内教外これあり漸教といふは所謂つぶさに万行を修して漸く佛果を證す修行の時あかく成佛の道遠し故に漸と名づくるあり又名づけて權教といふ俱舍成實律宗法相宗等此意を出さるなり頓教といふは五乘もはからざる眞如を以て還つて悉々の心に納め十聖もきわめかたき法性をもつて元來不離と談ず證果を刹那に究竟し悟道を一念に圓滿す故に頓教と名くるあり又名けて實教と云眞言佛心天台華嚴等正しく此意なり此等の漸頓の諸宗其法門一途ふして万機にわたらず或は漸或頓唯や機よ彼らしめ若し權若し實ひとへに一線に攝す故に即ち施即ち廢して妙道遠く沾わす故に釋は云く漸頓則ち各所宜にかちふ縁に隨ふもの皆解散を蒙るしかるに衆生障重くして悟りをとるもの明らめがたしと云々又云く或は人天二乗の法をもと成け菩薩涅槃の因を説(乃至)根性利なるもの皆益を蒙る鈍根無智あるの開悟しがたしと云云

次に淨土門とは是つひて二機あり一は他力本願の實跡に他力本願の化用あり初他力本願の實跡といふは所謂佛の密意なり亦此佛智所照なる法也及聖道淨土の二門は共に眞如實相を以

て其跡とする之故に前の聖道門の中より明達處の無塵法界凡塵齊圓の理恒沙の功德寂用湛然の性
 大なるはち是他力の實跡あり五智の中の佛智とは此理を指すあり次に他力本願の化用といふは密
 意の上の教門をいふあり又是四智の所成あり極樂處からむしてしかも十方億刹の西にかまへ爾
 陀已心にありて一座花臺の形を現す不思議智不可稱智等は此善巧方便を指あり實はたもんみれ
 は真如界の内には生佛の假名を絶し平等性の中には自他の差別なし真如は自にあらざる他にあら
 ずしてしかも自他の性を包かるがゆへに縁に自他を熏習して平等性の性海に會入せしむ應に知
 べも自力他力といふは是則強弱の義ありうれ熏力弱きとさんば冥熏密益すといへどもしかも行
 入みづから勵まざれば道果を得ず故に自力といふ熏力強きときは諸佛外護の智識とありて増上
 縁をほとこす故に他力といふあり強弱ありといへども俱にこれ真如の力ありゆるるに真如界の佛
 平等性の衆生の爲に一心法界の理を開示せんと欲するの所垢障覆深の凡夫自力を以て自己の淨
 鉢を顯照しがたし故に諸佛無極の慈悲衆生迷倒をかましめて法藏發心を示現し超世の弘願を發
 起し易行易修の口稱をもつて頓悟頓入の往生を得せしむ他力の實跡こゝに顯れ易く弘願の化用
 忽ちに成し易し曇鸞法師は實相爲物の二義に約して如實修行の相を釋す此意なり然は即因ハ少
 く果は多く行にの接くして而も悟の深きこと他力願大の教よしくいふまじし是を以てこれを言ふ

に願の名は同じといへども諸宗の願はこゝ實の名は同じといへども餘教の實には勝れり思ふて
 知ぬべきものか凡他力の法門に於ては諸宗の談せざる處諸師の判せざる所あり善導和尙ひとり
 此宗義をたて我宗の祖師はじめて此宗門を開くものなり凡聖道自力の法門は諸佛無極の慈悲を
 のへ盡さず無塵法界の上他力弘願の鉢用をあきらむると有べからず淨土の一宗ひとり斯の如き
 法門をあかずしかれば他力の大道は廣弘にして五乘ひとしく通入す圓々極々無相無念の果成の
 上に無方難思の大用を起す有相の修因あり直に無相の樂果よ入しめ往生の見を抑て無生の理を
 鉢達せしむと何の教の中に斯の如き法門を明すや

智海繪詞傳四十一に云く檀那院の嫡流智海法印は毗沙門堂の法印明禪の師なりと云々歎山
 に久しく住して天台の碩學あり

第四番に歎山の東塔竹林坊靜嚴法印問て云く眞實佛心天台華嚴旨直に眞如の淨鉢をあらわす事
 を期す是則上根利智の機のために儲けたる所の法門なり承根下智は垢障覆深にして敢て此利を
 顯照する事あたわらず是が爲に淨土の化義をまうけ口稱の一行を授け彼土に引入して後よ見佛聞
 法の縁によつて無上法忍を悟らしめてはしめて眞如の理に入事を得せしむ是をもつて之を謂に
 聖道淨土たなしく眞如の所期とすとあへども淨土門は權これ迂廻の道るか頓と名くといへども

華嚴法華の頓に及べがらすいか左源空答て云此類大括さきは會通せしむるあり根機よ於て利鈍と論ずるに相違不定なり聖道の一門について是をいふ時は漸を鈍と名づけ頓を利と名づく聖道淨土相對ふ時の惣して聖道門を利と名づけ淨土門を鈍と名づくは一往の義なり如何と云れば修しかたくして能修し悟り難くもて能悟るが故に聖道自力の人を利根と名づくる也淨土門は入安く行じ易し故に難きを捨て易きをとるの邊に一旦鈍根下機に同じ然りといへども再往てれを論ずるに聖道淨土の二門をのく利鈍あるべし中に就て淨土門の中利根有智の人他力實慧の智を得無塵法界の理の上を以て劫妙功德の化用を施る垢障覆深の凡夫を攝して淨味顯照の悟を得せしめ始て本願他力の大道に入て頓に廓然大悟の無上を證す全く聖道門の上智利根の人に劣るべからず凡聖道門の諸教へ利鈍をもに究かたし與へてしかるこれを云ハ隨緣一途の益をゆるすといへども奪ふて而も之を論ずるに方か中に一も是を得かたし故に道綽のいわく仰でもんみれハ大聖三車の招慰且く羊鹿の運也權に息て未だ達せず徑に大車を擧るも亦是一途あり唯たろらくは現に即位し居して險徑はるか長しと云々淨土の眞門ハ極惡最下を以て捨すいかに況や上根をや本願の密意弘深にして他力の教門頓速なり利根なんぞ入ざるべけんや智者さあに是を選擇すべからざらんや但し直入迂廻の邊に至つては自力について是を云ときは誠以此

上において證人を期す是直入あり佛國に往生してさとりを得れば迂廻に似たりといへども機趣斷の邊に終せハ有相の念によつて無生の國に入途ハ聖道の直入に超勝せり如何と云れば自力入法真如はあらわし難く法性のまはめがたき唯是有教無人有各無實なり往生淨土の頓入は眞如法性を以て法藏の行因よきめしめ佛智の所照に讓りしむ是を他力實慧弘願密意各づくる也この證悟を以て頓ハ善惡利鈍の凡夫を翻悟せしめがたき爲に發し給ふ所の超世の本願なり故に諸宗の頓法に超て此邊地を願す淨土の一教を以ててたして下根最劣の法義とすべからざるをや

詩藏は繪詞傳三云く延曆寺東塔竹林房靜藏法印吉水の禪房に至て此度いかよして生死を出離せんやと源空ころ尋申度侍れと答玉ふ法印云く決擇門は去るとよて出離の道に於ては智徳に至り道心深くましますせは定て案豆の錢さふらわんと申さるれば源空は彌陀の本願に乗して極樂往生を期する外には全く知るとなし法印又曰く愚意も美言を承つて愚案を堅せん爲尋申所あり但し妄念競ひ起り侍るには如何せん止火の云くこれ煩惱の所爲なれば凡夫の力に及べからず唯本願に憑んで名號を唱ふれば佛願力に乗じて往生を得ると法印信心決定して疑念たちまじに解す往生更に疑ひなく退出し給ひぬと云云問て云法印既に疑念たちまじに解す今何

う此問を發するや答て曰但し問の意を知れべし
 第五番に明遍僧都問て云く禪宗にハ教内教外を立て而も教外の一法をもつて諸教の法門を取拉
 く眞言には顯密の二教を判じて顯教をもつて遮情門とし秘密を以て表徳の法とす(乃至)天台に
 ハ五時八教を立て超八醍醐の法をもつて三五七九の諸法の上よ置く此等の諸宗皆以て深奥なり
 較く其境に望みがたし然るに今教内を以て教外を下し顯教をもつて密教にこへ爾前をもつて法
 華を嘲ること諸宗の人は是を許すべからず如何源空答て曰凡宗を立る法は各自宗の法を以て勝り
 とし他宗の法を以て劣りとす其義問端にあらわれたり奇も疑執を懐くとあかれ此故よ禪門には
 教内を以て劣りとし教外を以て至極とすといへども而も是は此一宗の執見あり他宗に全く是を
 許すべからず故に眞言には秘密を以て最上乘の法とす時禪宗の無心絶想の義なを是顯大遮情
 門よ属すべきあり自餘の諸宗これに准すべし今浄土宗の意ハ漸頓の諸教みる眞如佛性を以て所
 期とするといへどもしかも自力の修行は解しがたく入かたきあり故に劣りとす念佛往生は施戒
 忍進をも修せす禪定般若をも學びや觀法觀心をも用ひず身印口誦をも假らず坐禪工夫も依り
 ず唯他方口稱の易行をもつて直に極樂无爲の寶國よ入頓悟頓入の功德はるかに諸宗の法門に越
 たり故に勝れりとする此故に永觀の曰實に知彌陀の名號は殆陀羅尼の徳よも過たり又法華三

昧の行にも勝りたり唯佛名を稱れハ直よ道場に至る况や浄土往生せんと豈留難あらんと云々
 第六番に貞慶問て云他力の頓とは往生以後の得悟自力の頓とハ現世に即ち證入す聖道をもつて
 勝れりとし浄土を以て劣りとすべきをや源空答ていわく聖道門の人即身の證を期すといへども
 唯是自力にして他力の持なし故に現世の證入は方が一もこれちも縦ひたまへ證悟の人有りとい
 へども強て無塵法界の一理にとまりて他方洎沙の功德無方無礙の化用を出さず故にあを佛法
 の至極を知らざるなり浄土の頓教とは或は現世或は次世根の利鈍にしたがつて證入疑ひあきかゆ
 へに猶これ勝れりとするべし
 貞慶ハ藤原尙書貞憲の子之母夢に高祖來つて自稱つて貞慶と云懐に入と見て即ち懷妊す成長
 して後雅染し書を母に奉る署に貞慶と云母夢想の名と同じきをもつて奇とす興福寺に投して
 出家せしむ才の譽あり寂勝講の詔に應せしかれ共負しくして乗物奴僕を人にかる會衆みあ其
 破れし衣を匿に笑ふ講己て直に笠置の窟に入て止る解脱上人と云法相宗にして天台浄土を兼
 碩徳あり建曆三年二月二日卒す年五十九云々
 第七番に證眞問云く此宗の習ひに此土の入聖得果を許さずあんぞ現世の證入といふや源空答て
 曰此事誠にこれと思ふべし但し韋提希夫人第七觀のときに於て大悟が無生を得るを和尙これを

釋して證得往生と云々これすありち最上利根の人。他力本願の利を信知して現世に往生を證得するあり往生とはするはち無上あり此義かされて思釋すべし。第八に顯真僧都問曰和尚の意淨土の法門におひて無相離念の義をゆるさず何ぞ今無塵法界の理をもつて名號の實昧とすといわんや源空答ていわく有相は修因に約し無念は果證をさすなり諸師此ころを得ず修因成果どもに無相の義を存じて有相の願求を捨故に是を破するあり他力の實体を論ずるときは和尚の心無相離念の義をゆるすべきあり故に釋にいわく無生實國のあかく常たりと云々又云く彼無生を見れば自然を悟ると云々又いわく覺ゆる真如の門に轉入すと云々又云く法身常住よして比する虛空の如しと云云第九は湛數問て曰く天台宗の意ハ權教みある有教無人も圓教に非んば成佛の法なしと云云淨土宗の意又念佛往生の外は出離解脱の法なしといふべきかいかん源空答て曰く立宗の習ひ廣く教相を判じて衆機を納むといへども終よ一味の法歸するあり小乘は權所學の法に於て至極の想をさす如何にいはんや大乘をや故に諸宗のみ我所立を以て至極とし他の所修を以て方便とすしから淨土宗に聖道淨土の二門を立る本意ハ一往二門をのく其益を許すといへども再往これをいふ時と聖道の益を奪ふて淨土の一法にどり入なり此故に眞言止觀の妙術も證悟のときにいわたつては必ず淨土の果報を得華嚴禪門の悟入も解脱を遂る日ハ自然に法王の家

にいたるべし佛土といたつて社かならず佛身を念すべし諸教みある念佛あり淨土のなかにハ極樂を最ともとし諸佛の中には彌陀を本とす彼佛はこれ淨佛國の主諸佛慈悲の体あり往生と云は諸教諸宗の悟道の時の名あり茲に知ぬ未だ悟らざるの前は暫く隨緣の執情に封せられて自力の得道を期して淨土を願わぬといへども得悟の後にかへつて泥濘の樂邦に入て終に道場妙土にいたる也三世の諸佛はみある念佛三昧に仍て正覺を成すと此意あり是を思ふべし第十は俊乘房重源問て云く一切往生の行人必ず生無生の道理を知り名號の昧用の義理を心得て淨土の行を修すべき哉源空答て云く爾ありず今他力の昧用を明すとせば淺深を論ずる時宗旨の原つくる所をしらしめんか爲あり是智者の知る所あり一切の行人これを知べしといふには非や例せば三心具足の行人かあらず淨土に往生すと經釋ともこのべたり下智愚鈍の族田夫野客の輩なを三心の名義も暗ししかるに彌陀の名號を稱るものは必ず往生を得ると信すれば自然に三心を具足するが如し名號の昧用の義を明むるとも又以て是に據るべし造罪の凡夫具縛の底下一念十念の功力によつて決定して來迎にあつかると信知すれば即ち是他力の實昧を信じ生無生の道理を心得るに當るあり如何となれば極樂のこれ無漏眞實の勝相泥濘無爲の樂邦あり煩惱具足の凡夫容易以て入がたししかるに而も他力本願の不思議によつて罪障の輕重をも論せず戒行の持犯をも言す稱ふれ

ハ必ず生るゝことを得ると信すれば自然にこれ當に名號の体用を心得るにあたる。他力を離れて是をいへば此義誠に成すべからずといへども他力により佛智の照覽にあつかるに依て是を云故に名號を信すれば則ちこれ体用を信する義あり第十一に顯眞問て云く他力往生の義猶もつて明かからず罪惡の凡夫佛の願力に託して無漏寶國よ生ぜバ他作自受の義にあたる因果の道理に叶わすや源空答て云凡具如法性の理ハ自に非ず他にあらす修因も亦く感果も亦し無因果の中に強て因果を論ずるの時既に自の修因によつて感果をといはバ何ぞ又他の縁よつて感報せしめざらん彼縁覺の聖人飛花落葉の因果を待て煩惱を斷じて道果を證す草木無心あるも猶修道の縁とある況や彌陀誓ひを發し玉へる往生の便とならざらんや但し聖道門の意は行者の自行猛利ある時ハ他佛加被を垂玉ふか故に自力はつよく他力は弱し故に只これ自力にして他力の持とあきをいふあり淨土門の意は三心を發し名號を稱へて造惡をも止す忘念をも息されは行者の自力は至て弱し然るも佛願力つよくして惡業にも障られず忘念も染られず名號を稱へて必ず往生を得ることは本願名號の力は強く行者の自心の功力はよはきあり故に他力往生といふなり是又因縁果報の義にらむかず一向の他作自受にもあらす強弱の義を約して自力他力を分別するあり第十ニ永辦法印問云く罪業忘念は任他みづから専ら稱念とれば必ず往生すべしと許さバ人みあ惡

見に住して惡業を恐れず好で衆罪を作り忘念をおこさば返つて惡趣に墮すべきありしかれば一往先惡を制し忘を止るを以て發心の面として應強の罪をふられしむべけんや如何源空答て云く諸惡莫作諸善奉行は諸佛の通戒ありしかるよ造惡の凡夫も念佛よて往生すといふ義ハ全くこのみて惡業を造り忘念を起せと云にのあらず今惡趣の苦果をおうれ淨土の快樂をねがふ者ハ専ら三業の罪を制斷し三業の善を奉行すべしと此道理を知るといへども愚痴の凡夫なれば更に忘念惡業を制止しがたし此事歎てもしかる余りありたるべし。此に彌陀の本願ハ斯の如きの凡愚を救わんが爲に易行易修の名號を以て犯罪の咎を照せしむと此意を得るの徒あんを事を他力本願よよせて好て大惡を造べけんや縱又煩惱強盛あるによりて婦酒肉辛を禁せず貪愛瞋僧をやめざるものも好て惡を造るよ似たりといへども唯是本性のいたと所ハ本願を頼むによりて今更には是をなすとを許すには非ずしかれば應強の罪におひてハ聖道淨土とも後世を恐るゝの人あんそ是を禁ぜざらん細隱の罪にいたりてハ聖道といひ淨土といひ誰かこれを止せんやよろ造惡よたいて輕次重の三品あり五逆は重罪あり是れを造るものまれあり在家の十惡の中に殺盜の二罪はまたこれを禁ずると有といへども自余の八罪は盛んに是を犯す出家の罪に於ては持戒の人おれば破戒あるべし戒法を持つ人おらんハ何によつてか墮犯するとあらん無戒の

僧尼になひて在家と差別をせしむれば、（一）に捕縛肉等を禁ずといふことも、唯是一旦の制禁あり、妄念を止すんば戒行具足といふべからず、然るに虚受信施不淨說法等の自余の衆罪稱て計べからず禁る所の罪のわづかに一兩なり、犯す所の惡は數塵沙に過たり、斯のごとき造罪の徒、自力を以て争か解脱を得べけんや、此故に他力本願の滅罪増上縁の功用を頼みて、念々の稱名を以て隨犯隨懺するあり、但し惡見を禁るを安心の面とせしといふにいたりては、犯罪のものを解脱を得ずといふは、是聖道門の安心なり、惡業を造るといふことも、名號を稱れば往生を得るといふは、是淨土門の安心なり、此ゆへに聖道を捨て淨土に皈する、蓋障の罪障を制しかたき故なり、若夫罪業を制伏し、妄念を息べくんば、戒定慧の三學いづれの法これを修行せざらん、故に知ぬ此見を成ずる人は、永く他力本願を信すべからざる者なり、努々是を思ふべしと、淨土宗の義、理念佛の功力彌陀本願の旨を説玉ふと、明々たりざる程に、言口に定めし本性房も默然として、信伏し、畢ぬ顯眞僧都は、双眼より紅淚をながし、集會の人々も悉く歡喜の涙を流し、偏に皈伏渴仰す、源空重て曰く、予通世の當初より、衰老の中頃、至まで、竊に一代の教文と披きて、借出離の要義を案ずるに、顯につけ密につけ、開悟容易ならず、事といひ理といひ、修行成就しかたし、實圓融の意の内には、多年即是の妙觀につかれ、三密同軌の床の上には、今に現世の證入を失ふ、然る間、滲分を量て、淨土を願ひ、他方を憑て、名號を稱

ふ、誠は往生極樂の教行の直達道場の目足なり、有智無智誰の人か、皈せざらんや、而に諸宗の行人たるべらうと、口稱の念佛は、偏に愚鈍の機に被らしむ、至く眞言止觀の妙行に及ばず、更に華嚴禪門の宗旨に勝がたし、一文不通の頑愚に於ては、自ら往生の一路を蔽ふといふことも、利智精進の根氣に至ては、唯現世の證入を期すべしと云云、或云念佛往生は易きよ、似て易からず、如何なるべし、十惡五逆を造るといへども、深く改悔の心を發して、後に重ねて之を犯さるるがゆへに、往生を遂る也、罪業を制止せざれば、縱名號を稱すといへども、往生とべからず、又一念十念の往生の妄念、異念を休息して、一心不乱に之を行す、余念相交り、安心難起せば、行業成すべからず、故に知ぬ念佛三昧は、若は持戒清淨、道心堅固の人、若は智慧深遠、勇猛精進の徒、罪障を制伏し、余念を休息して、是を修し之を行すべしと云云、或は勝の儀を許せども、易の義を許さざるは、易の義をゆるすとも、勝の義を許さず、懸しひか、斯のごとき、輩證、其一を知つて、未だ其二を知らず、伏惟、眞宗の法門は、稍古今より異なり、文の主旨を知らざるの人、宗の元由を辨へざるの輩、妄りに弘願他力の淨業を輕しめて、空しく聖道自力の修行に疲る、極樂は是泥濘無爲の界、諸佛法王の家あり、縱ひ利根といへども、而も往生を欣ぶべし、況や鈍根をや、難ひ上智といへども、而も他力を憑へし、況や下智をや、十方佛土の中、たゞ唯往生の法のみ有て、二も、三も、なる佛の隨緣の説を除くを願く、異覺聖見の輩、別解別行

の人はやく邪雜の執をあらためて專修の門に入へし弘願の一稱は万行の宗致あり誰か是を行せざらん果號の三字は衆徳の根元なり敢て之を嘲るとなかれ人をして欣慕せしむるの教門の暫く淺近に似たれども自然に悟道の密意を究めて是深奥あり一念に佛意に契らんと欲するものは極樂を願ふべし一世に行業を成んと欲せば彌陀を念すべし於戲釋尊出世して衆生を濟度したまふに化道百億に遍く利益三千よ昔し化縁の薪盡て正像はやく過ぐ成等生を五濁六惡の末法に受て罪を四生十惡の業道に感と善根薄少あり根性遲鈍なり飛行持しがたく定惠證し難し妄りに其分を在世の正機よよせて現世の證入を期すへからず暗く此身を正像の賢聖に同ふして自力の得道を待てべからず況や在世の頓悟頓入は多くは是權化の示現に正像の得道得果は恐らくは實業の衆生少し末代の機根に望望するに足らず當今の凡愚に正校するよ及ばざる者か然るよ彌陀の名號に於てハ極善最上の法あり造惡の凡夫ありといへども之を修めれば往生することを得る他力難思の行あり具縛底下ありといへども之を信すれば來迎に預る此則ち念佛に於て勝易の二義あり勝の義といふハ謂く至極大乘の意は體の外に名く名の外は體なし万善の妙味は名號の六字よ即ち切沙の功德は口稱の一行に備ふ大願強力の擲出さるゝ所万徳を行者に讓與せしめ他力難思の巧方便なれば一稱を衆善に超過せしむ知難廣讚あれを猛火涼風とある善友教へて稱れば金蓮果日

の如し大利の名號は無上の功德あり易の義と云ハ行住坐臥を論せず是を修すれば來迎預る時處諸縁を謂す是を唱れば往生を遂く是則ち身心の濁亂によらず唯他力の引接よ依る故に凡聖道自力の修行は罪惡を制止せず妄念を休息せずんハ其行成就するとあし生死罪濁の心泥萬行水精の珠を穢すの義譬て知るべし此則ち珠の力用弱きが故に水清す水澄ざれば光色顯れざるあり本願名號の味はしからず一生造惡の凡夫相續忘念の衆生あれども隨犯隨懺すれば衆罪を消除し唯願唯行すれば淨刹に往生す此則ち陀彌如來の至極無上の淨摩尼珠は凡夫罪濁の心水に穢ざれそ珠の他力强によつて無量生死の泥濁頓に無漏法性の清水とある譬へて思ふべき者か凡癡惡修善は佛敎の正意なれども廢すれども廢られざる何んがせん息忘修心ハ行道の大途かれども息すれども息すれども息られざる何んがせん唯すべからず彌陀の本願を憑むべし只須と他力の名號を唱ふべし此則ち造惡の上の癡惡の法あり妄念の中の息忘の行なり佛法修行の中に是より易さハ有べからざる而已と他力本願の名號濁世末代機教相應して出離すへきよし聞からず之を説たまふふ聽入たる三百余人一人も疑の心なく人々虚空にむかふが如く言語を出す人あし願徳の偕侶證して云形をみれば源空上人實をたもへば應慈の彌陀如來かと疑がわる顯真僧普の落涙しのびがたく一心丹誠を抽んで自ら香爐をとりて持佛堂を旋繞し行道にて高聲に念

佛を唱ふ南北の明匠も西土のをしへに皈し信男信女參禮し聽衆の考若の諸人心中の誠を疑し各異口同音に三日三夜の間高聲に不斷念佛を修する其ひらき山谷に滿林樹を勵かす故に信を發し縁を結ぶ人多かりき（蓮生法師ハ大原の問答に律川の邊にやすらひて勝負の善惡によつて許多の衆徒をも取ひしぐべき勢ひにて堅睡をのんで窺ひしは通世の身といへども生質勇猛の武士たりし故時として奮撃の強氣を發するものありし）顯眞僧都は餘行をさし置一向專修の行者とあり給ひ自らの出離ひとへに念佛往生を期し玉ふのみに非そ他人をもしばぐすめ給ひける去ほとに妹の尼公を鞠めんが爲に念佛勸進の消息を遣はさる世間に流布して顯眞の消息と名づく（文章略之）奥の死替に文治二年十二月廿九日護摩堂尼御前へと云々顯眞專修の身とあり念佛を行とし給ひしと此消息に明あり又十二人の衆を定めあきて文治三年正月十五日より勝林院に不斷念佛を始め行れしに顯眞十二人の隨一にして成の刻をぞ勧めたまひける開關の夜之十二人皆參じ行道して同音の念佛を修するに毘沙門天王列に立給ひけるを顯眞眼前に拜み玉ひしと之又一の大願を立て此寺に五房を建立し一向稱名を相續して餘行を交へず勤めんと其願空しからず終に文治二年十月ふ成就しけり池上の阿闍梨皇慶の舊跡護法守護の靈地に五房を建楞嚴院安樂の谷をうつして新安樂と號け性智房境智房佛智房勝智房妙智房と號しける又湛敷上人も願

を發して來迎院松林院等にして不斷念佛をばじめたまふ无此時まで源空上人の勸化いまだ半ありしに既に大原の問答に勝たまひしかば日本一州皈依ますし繁昌し有難かりし事どもなり大原ハ京師の北山にして敷山の乾にあたり八瀬の里北一里にあり若狹往返の街道にて東西總て八箇村あり（端戸寺村上野村大長瀬村來迎院村勝林院村井出村草生村野村等）此に山門の別院凡四十八院ありて立禪寺ハ勝林院の内にありとそ來迎院松林院は此別院の名ありと云今大原に魚山勝林寺といふ古刹あり是宗論ありし舊趾にして本尊を證據の阿彌陀と稱す座像にして長七尺佛工の祖唐成の作あり寺記いわく當院ハ一條左大臣雅信公の息少將入道寂源法師の章創あり往昔敷山の僧都卒覺超同靜慮院の偏救とていみしき智者のたはしけるが此如來の前に於て佛果の空不空の議論ありけり覺超は不空といひしに如來相好を隠し偏救ハ空の義を立てたまふにかへつて相好を顯し給へり然れハ中道實相ころ如來の本意あれといふと此に於て顯れぬ夫より世人証據の彌陀と稱しける又文治二年の秋法然上人と山門の僧徒顯眞法印を始諸宗の碩學と一向專修の問答侍しに法然上人の談論あるときハ本尊光明を放ち給ふこれを大原問答といふ諸宗の知識みな工人の弘法に伏し顯眞も忽ち專修の行者とあり則ち法泉房に住玉ひ稱名念佛絶々と云云又寺門の傍に熊谷巖磐石（律川の橋の詰にあり蓮生法師此所

腰を掛けて法門の牌劣を聽聞しけると云傳ふ(鈍捨敷)呂川の傍にあり大原問答のとき蓮生
房鈍を袖にかくし携へて法然上人の供奉と蓮生云く師も對論にまけたまふとあらば法歌を
打ころさんとの用意なりと上人これを聞給ひ大に制し給ふによりこゝに捨じと云傳ふ等の古
跡あり

時に俊乘房重源一の意樂を起して云く此國の道俗男女閻魔王宮に至て跪て交名を答ふる
時佛名を唱しめんが爲めに阿彌陀佛の名を付べしとて先吾名を南無阿彌陀佛とす是我朝におひ
て阿彌陀佛の名を付け此時より始まれりこそ今何阿彌と號するは阿彌陀佛の畧語なり
三國七高僧傳圖會本朝卷本終

三國七高僧傳圖繪本朝之卷末

(第十二) 重衡請源空一授戒並於南都一被誅 元曆元年二月七日攝州一の谷の合戦に本三
位中將重衡卿源家の爲に虜られ九郎判官義經の下知によつて嚴るく武士に預られ給ふ爾後中
將重衡の卿の義經の許へ出家せよと思ふは免し給ひてんやと言ひければ義經が許ひにハ叶ひ
難し御所へやいれて其御左右に依へしとて奏聞ありし所は賴朝と仰合せずして出家の暇を免ん

と治りがたきの由仰下されければ御氣色かくとて力及たまはず中將重衡にて出家の御免あければ
今は申及ばずさらば年來相知て侍る上人を請して後世の事を尋問はやと有ければ上人は誰
にて御座ぞと問奉るに黒谷の法然房と申されける兼て貴き上人と聞給ひければ後世の情はと思
ひつゝ是を免し奉る三位中將斜ならず悦びて侍臣友時を使として黒谷の庵室へ申されたりしか
ば法然上人來り給ひて對面したまふ中將かく一言はく重衡が身の身にて侍りし時は榮花に誇
り驕樂橋々の心へありしかども當來の昇沈かへり見ることを侍らず運盡世みだれて後は此にて軍
彼にて戦ひ人を失ひ身を助んと勵す惡念の無間に逃つて一分の善心曾て起らず軍中南都炎上の
事公へ仕へ世に隨ふ習よて王命と申父命と申し衆徒の惡行を鎮ん爲にまかり向ふところに測ら
ざるに伽藍の滅亡に及べると勢及はざる次第ありといへども大將軍を勤めし上は重衡が罪業と
罷成候ひぬらん其報にや多き一門の中に我身一個虜られ京田舎に恥を曝すに附ても一生の所業
藝なく拙きこと今おほひ合せり罪業の須彌より高く善業の微塵のかりも善へはべらず借も空
もく終りあば火穴刀の苦果曾て獲あし出家の暇を申侍れども賣ての罪の深きに御免あければ
頂に髮剃を宛て出家は進へ奉り戒を授け侍らばや又斯る罪人の一業をも免るべきと侍らば
十句示し給へ年來の見參其除今に有る宜ひければ上人哀に聞給ひて誠に御一門の御榮花の官職

といひ傳祿を申務若無人にこり見ぬをばしませしが今斯成給へば盛者必衰の理夢幻のごと
 くありされば善あつき惡につき怨を起し悦をなす事有べからず電光朝露の無益の所とても斯て
 も有ぬべし永世の苦みこり恐ても恐あるべき事にて侍れ受難き人界の生あり値がたき如來の教
 たり而るは今惡逆を犯して惡心を翻し善根をくして善心に住して御座は三世の諸佛争か隨喜
 し給はざらん先非を悔て後世を恐るゝ是を懺悔滅罪の功德と名づく抑淨土十方に稱へ諸佛三世
 に出給へども罪惡不善の凡夫入事實にかたし彌陀の本願念佛の一行ばかりこり貴侍れ土を九
 品に分て破戒闍提これを嫌ふことなく行を六字についで愚痴暗鈍も唱るに便あり一念十念も
 正業となり十惡五逆も廻心すれば往生と見ぬたり念々稱名常懺悔と宣て念々毎に佛名を稱
 ずれば無始の罪障ごとくく消滅せられ一聲稱念佛皆除と釋して一聲彌陀を唱ふれば過現の
 罪みを除かる故に南無阿彌陀佛とまうす一念の間に能八十億劫の生死の罪を滅す憑ても憑む
 べきは五劫思惟の本願念でも念すべきは此彌陀の名號なり行住座臥を嫌ひねば四儀の稱念に
 煩ひなく時時諸縁を論ぜねば散亂の衆生に堪あり下品下生の五逆の人と稱して已に往生を遂
 げ未代末世の重罪の聲も唱れば必來迎に預るべし是を他方の本願と名く又頓教一乘の教とい
 ふ淨土の法門彌陀願行肝要斯のごとしと善知識せられたり其後上人剃刀をとり三位中將の頂よ

と度あて給ふ初には三戒を授け後はは十重禁を授け給ふ御衣施と覺して口よ金持たる紙
 箱二合差附給へり此箱ハ中將の秘藏とたまひけるを侍のまごに預置たまひたりけるが都落のど
 き取忘れ給ひたりけるを思ひ出たまひて友時をもつて召寄たまひしあり侍も三位中將ハ今の
 知徳の授戒の縁を以て必來世の解脱を助け給へと宣ひも取を泣給へば上人は衣の袖に雙紙箱を
 包向と書ふ詞もなくて涙は咽て出給ふと云々(源平盛衰記本意)

元暦元年三月十日日本三位中將重衡は(本三位中將重衡は平相國清盛公の五男にして宗盛知
 盛等の舍弟あり元暦元年一の谷の合戦に生田の副將軍たりしが軍破れて虜れたまひ都にの
 ばり給ふ折から上人を請じて淨土の法門を講聞し戒を授けしとへに往生を願ひ給ふを甚あわ
 れある此時布施として松蔭の硯を上人に進ぜある其硯今洛北百万遍知恩寺にありとぞ(兵備
 佐源賴朝申請らるに依下梶原景時相具して關東に下向あり同廿六日鎌倉に入廿七日兵衛
 佐殿重衡御に對面あり其後翌年又京都へ飯され南都の衆徒の願に任せ山崎國木津の邊の御堂
 においで誅せられ給ふ)六月二日といふ(今よ是を哀堂と號けたり衆徒等首を申請て法華寺の
 鳥居前に於て竿に貫き高く懸けて暴風吹くを治承の合戦に南都を亡じ伽藍を燒失ありも
 此硯を懸け置給ふ)三十三日(此硯は重衡上人の遺物にして松蔭硯と號し面を差進せらる此

鏡を結縁の爲とて後乘房直源の方へ送られけされしは、大佛を鑿奉る城の中へ入られし一飛
出て竟に溶化さりけり。故に大佛殿後面の柱に打付たりしとこそ是も又松永の兵火に罹りて燒
失せしとなん言傳ふ。

文治元年八月廿八日盧舍那佛の大像成就し元の如くに磨きあらたし奉り開眼供養あるにより
後白河法皇南都御幸のよし源平盛衰記に見たり。

〔第十三〕 維盛粉川寺跡 源空 並 奉 法華經受戒 元暦元年二月十五日權亮二位中將平
維盛の讚岐國屋島の館を忍び出與三兵衛重景石堂丸をいふ畫船に心得たる武里といへる舍人
此三人を具し玉ひ紀伊國由良の港に渡り玉ひ是より陸に上り粉川寺に參詣し給ふ折ふし此間よ
り源空上人此地に下り給ひて念佛法門の談論ありけり維盛かくと問玉ひ與三兵衛重景を招き態
ども都に上り源空上人に逢奉り後世のことも尋問べきにこゝろわれども道狭き身あれば力なし
上人たまし此寺に在すこそ幸なれば憐れみも見参し奉りたく思ひ如何あるべきとの給
ふ重景畏つて何の慎みかひべき上人をば生身の佛と承る然べき善知識にこそ後世菩提の御
爲に御聽助めらん折ふしに維盛等がめせ給ふとて重景召へたりと聞合願の境にして身を
失ひて修業の要所にも生歸するそめて此は國師國師の爲めとて命を亡す事あらば羅浮の淨刹に

在生せんと思ふさるべしとて小賢と申けれは然るももとて夜にきて重景を御使にて空觀上人へ
申されけるは維盛高野參詣の志し有て屋島の館を忍び出これ迄能くし侍るが折ふし上人此所に
在ると聞て出離の法門一句承たきよし仰遣めされけれは上人哀れ思しめして難て維盛卿を請し
大率り見参し玉ひて實に一ありかたくこそ思ひ奉るあれ身都を出玉ひて後人々愛かしこめ
せ亡び給ふと承るに付ては如何あらせ玉ふらんと心苦く思奉しに再見参に入奉ると哀に悦び
入侍り侍もさしもの世の亂の中にはるゝ高野參詣の志し愛度も思召立給ふ事かちとて泣
たまふ維盛のたまひけるは家門の榮華すでよ身に極りて先帝をばじめ一族悉く西海に落下りし
上人あみだに憶れ出侍りぬ憂ことも多かりし中に難波瀛一の谷にて卿上雲客屢亡びぬ
適討のこころ者も世に有空は侍らず夜は終夜今や水の底に沈むと歡さ晝は終日今は敵に失
るゝと悲むにも角にも靜心あしされば遂に還るまじき者ゆへに貴き結戒の地と承れは高野に
まゐり出家をどげ其後いかにも成ばやと思ふこと侍りて屋嶋を出て是まで來り不圖見ぬ奉る
こそうれしけれとて其夜は菴室に留り玉ひ泣口説て物語し玉ひけるが曉がたに維盛少より
身を放たず日毎に讀誦し玉ふ涉經あり水の底にも沈まん時へ同く沈奉らん事罪ふかく覺候ふ
若世になき身を聞たまわん時はたもひ出して后世用ひ玉へと宣ひてこれを遺せ玉ふ源空上人請

玉ひてたどむをたどむて我が法華のべきされども斯思召入と承れば披見ん折々の必用ひ奉るべしとて拜見し玉への四半の小冊紙よ金泥にて書小字の法華經あり最真にぞ思しける維盛卿は今日とてありて名残をも惜みたく侍れども維盛と平家の嫡々として頼朝ことに相尋ぬべしと披露あり世の人口を憚れハ戒を持眼申さばやと宣へば上人は此間説く戒のほどを問問あれかしと存ずれども急急と承れハ戒を授け奉るべしとて圓頓無作の大戒梵網の十重禁をぞ説玉ふ上人結して日塔中の釋迦は此法を説きて佛位十界の衆生に授臺上の舎那は此戒をうけて正覺を華藏世界に唱ふ法華一貫の妙戒は能持の一言よ戒珠を胸の間に研き合掌の十指に十界を實際に安んじ衆生正覺の直道即身成佛の要路なり是則ち薄地底下の凡夫の一毫の善なき者罪惡生死の衆生の出離の期なき靈修行覺道ふ入すとも速に佛果を成得る計此戒に如はなし之に仍て梵網經には一切有心者靈應攝佛戒衆生受佛戒即入諸佛位位同大覺位眞是諸佛子一度受此戒者入諸佛位同大覺位と説玉ハは誠に難有功徳あり戒師の戒を授るは授戒灌頂とて佛前の智水を後佛に授る意ありハ此戒を受るは自身に正覺を唱るあり故に此戒を得れば永く不失の戒とて一度うけて後永く失ふことなきとぞ宣ひける維盛も聽衆もみ涙隨喜の涙を流しけり其後念佛の法門禪陀の本願とぞまゝとて説給ひ奉るまゝ一教化せられければ維盛はありがなき善知識にあひ奉るとかなと泣く

立出給ひけるが契ありハ後生にハ必死參會と宣ひて夫より高野へ参り給ふ上人も哀におもひ給ひ遙に見送り奉り袖をぬらしたまへば見る人袂をもしほりけりと云云（維盛は小松内大臣重盛の子思あり）

〔第十四〕 東大寺供養 並 學近功德願論 壽永元曆の間源平の乱によつて命を都鄙に失ふもの其數をしらす茲に俊乘房重源無縁の慈悲をたれて後世の苦みを救はんために興福寺東大寺より始めて道俗の貴賤を勤め一七日の大念佛を修しけるよ其頃までは世人いまだ念佛のいみじきことを知ずして勤めに叶ふもの少かりけれハ俊乘房此事を歎きて人の信を勤めんが爲に大佛殿のいまだ半作ありける廬間に唐より渡奉る淨土の曼陀羅ならびに五祖の眞影をかけて供養し奉らん爲源空上人を南都へ招聘して導師とす上人領掌し玉ふ

五祖の眞影といふは唐且におひて淨土の法門を述る師多しといへども源空上人唐宋二代の高僧傳の中より曼陀羅道綽善導懷感少康の五師を抜卒て一宗の相承を立給へり爾後俊乘房重源入唐の時源空仰られて曰く居士に五祖の眞影あり必ず是を得て歸朝あるべしとこれよよつて重源渡唐して後普く尋請るに上人の仰に違わず果而五祖一幅に畫ける眞影を得たり重源いよ上人の眞影を違はざることをしる後大和國雲麻寺の曼陀羅院如來化冠となつて大炊帝の

御宇天平實字七年に續あらはし給へる靈儀あり中正の方々縁のさかひ日觀三障の雲の光景人
 さらば辨へたりしに其後文德帝の御宇天安二年に唐主より渡れる善導大師の御釋の觀經の
 疏の文を見て始て人不審をばらし天平實字七年より天安二年に至るまで其ありた九十六年お
 り往昔和朝にて續られたる曼陀羅の造の後に渡れる觀經の疏の文に合るを不思議とて尋
 傳への今上人先だつて淨土の宗義をひらき玉ひ後に重源入唐の時彼影像を渡すべきよしを命
 ぜられ得て版るところの影像上人の仰に違わざると豈奇特にあらずやされは道俗貴賤かの五
 祖の眞影を拜みていよく上人の徳に歸し倍念佛增長しけり當時嵯峨二尊院經藏に安置す
 るは彼重源將來の眞影なり

源空上人既に涉約束の日にありければ上人御弟子十四人を召具し給ひて入御あり上人の思召に
 は御通世の侈姿にて御供養あるべきよしありしを門下一統を評議ありて申けるは其義有べから
 ず本朝無双の大迦藍なり通世隱居の事は各別の義なり是は大法會諸佛菩薩の御影向の場より争
 か不法不義にてつとめられん事人々の嘲り有べしとて法會の具足と上人へ送り奉る上人力なく
 當寺にかみをとそ仰せける時所の衆議とて從僧大童子中童子力者人江に至るまで皆々南都
 の經講なり庭前に幢をたて佛檀華机天蓋寶散玉珠の華蓋高座禮盤錫杖香爐香管念數散華華

靈新調美曲なり招請の僧二十日出仕の跡は釋教にほとし轉脚の跡は瑠璃細網の法服は九條の香
 の袈裟威儀釋尊のごとし真の一天の眞體の如く佛會耳目を盡かし極盡風に飄し自在天の粧ひ
 をうつつし沈香砌に舞じて海素岸の匂ひを類じ持金剛僧の深奥は法界宮の侍從に似たり珠璣七寶
 をうろへ寶螺六端をあらはす凡靈肉の飾り供其の鉢言語道斷あり饒鉢虛空に響きて貴賤ねふり
 を愛ぬす梵唄雲を穿く伽陀妙をさねぬ大阿闍梨の法義は實智處城の教主かと疑がわれ三飯發
 願の音聲の舍衛の金言かとおやまたる當に今此曼陀羅を解説するに物じて四分あり一にの觀發
 大衆用心分二には緣起因緣生信分三には正說曼陀羅法門分四にの廻向法界往生分是より始め
 て彌陀觀音願主の深き信心を鑑み給ひて淨土の聖相の曼陀羅を續わらわし玉ふ人多く生信を賜
 わらしむ正說曼陀羅法門分とて右の縁は觀經の序分義卷の第二一代の法門を始として厭離
 穢土欣求淨土の旨禁父禁母の往生歴々たり右の縁は觀經正宗分卷の第三にわたる三昧正受の義
 に趣き若男若女の觀門明々たり下の縁は正宗分上中下品の來迎華臺宛然として憑あり中臺を仰
 けは四十八願莊嚴淨土の義式彌陀の垂迹あり物して三方の縁は釋迦發遣の思德肝に銘す彌陀如
 來願力所成の莊嚴觀音勢至諸菩薩九品蓮臺清淨大海來庭重殊勝なり凡定善十二願は觀經に
 念佛成佛し散華九品は品毎に往生すべし善哉善哉の詞は御讚ありけは聽聞の樂耳を盡し

并に諸王侯將士がたがたが其の美の盛も都京の都て天竺に於たり。然に三國の諸僧を遣じ正
 在王智の果位に登る然れば三賢十地の太子四神六欲の天衆も悉く侍衛す生前は所願も満足す
 る心地なり凡貴賤ををしほり衆徒衆を潤はす優心争むを失ひ國體も實に動き玉ふかど身の毛翹
 立てそ覺へける。故次の日より向五國の眞影を供養せらる凡三國傳來の血脉釋尊付歸の相承あり
 本宗を闡き深く靜土の眞門に結成せる旨を述給へり。惣じて前後七日の間御說法の音聲解説
 の跡大師の遺儀をうつし富樫郡を學び玉ふ偏執の諸宗も格劣の義を忘れ法相至極の習學者も衆
 徒の故録をうへめて上代も中項もかやうの碩徳大智不思議の法門さへ及ばざる由を褒美して選
 散しけり。爾後難波奈良の俗人舞樂の秘事をきわり新羅諸國の曲を盡す上下これを折角と見物す
 觀上人御版落あるべき由の御出立あり。茲に俊乘房重源まゐりて言されけるは。諸君此大佛を造り
 奉り同御堂建立斯の如し凡日本一の大善根と存じ候ふ。此間の御說法に遂に御意に掛られず候
 ふいかほどの功德といふと御禮候へず御供養各別のことにて候らへとも。當伽藍を稱揚候べき
 と存じ候らへば余所外の事とて。是はす向ふすの御意にて候ふ。ちりちり定めて經論所釋の文等
 衆ふもんと尋す上人仰られけるは。此大佛根は自由厚良。其の功も玉ふらり。御邊のためには斯
 等修造是れ大善根とて。見れば日本のみならず。諸國に於ても。佛邊は善根とあらす。や此佛

徳念佛二三反には劣るぞと見られたり。云云此事やがて風聞ありて興福寺に聞ひしかば。両門路の
 衆徒會合して。扱はこの此法然房此間の法門等。比類ひなき。學匠大智者と聞たれど。是は心に大偏執
 を持たるものなり。とて即時に大鐘を鳴し衆會して。會議をもちたり。一僧進み出言ける。當伽藍
 は是聖武天皇の御願行基菩薩文殊の化身として建立し給へり。然れば。聖觀門僧正は南浮第一と供
 養も給へり。斯るやんことなき。大伽藍を念佛二三遍の功力に。劣といふと。これ偏執のいたす處。ふ
 めりや。速に耻辱をあたへて。追下すへき者をや。と云云。時に追々與方同心の惡僧七百余人。雲霞
 のまどく集りたり。茲に覺範僧都の曰く。當寺はこれ法相唯識のどころ。大乘習學のみさん也。縱ひ經
 釋明文ありといふとも。其憚なく。斯の如き過言に及ぶべきか。是佛意も神慮にも違ふべき者。あ
 りはやく押寄て。追拂ふべきもの也。と云云。此中にも。定範僧都といふもの言けるは。面々の僉議しか
 りといへとも。如此の經論所釋。證文歷然たらは。争か種々の沙汰に及ぶべきか。夫は學匠義にあら
 ず。法然房も定めて證據あるらん。先子細を相尋ねて。其返答によるべき者をや。と云云。これに依て。若
 若ども大略。學匠。違あるわいだ。定範の義に同して。尤じかるべし。若不思議の文證あらんときは。無
 道の強辯なるべし。學匠の所存にあらすと。一同して。源空上人の宿房へ寄たりければ。上人とは。や御
 預湯と聞ひしかば。衆徒は急に。進ぶし。般若寺の前にて。廻つて。定範法然の衆玉ひし。興のまへよつ

かゝり立寄興の轍をもつて擡りて動かさず當伽藍造立の功德は念佛二三返に劣るとは私の語
 かいづれの經文にありやと云々其時源空の弟子等は心中に驚き今度南都への入御如何候べき
 と申しを人御ありて斯の如き珍事におよぶ口惜きよとて各色を變ず七百余人の衆徒其外
 偏報のともから次手をもつてあつはれ法門につまり脚にても誤わらは恥辱をあたへんと腕をさ
 すつて見ぬたりけり上人少しも憚りたまはせ定範が言もはてさるに華嚴經を引て見たまへと答
 たまふ定範もさる者にて華嚴經は國本ありづれの悉いづれの品に侍るうと上人佛地品を引て
 見玉へと仰られればとて上人の傍下りを押へて華嚴經をとり遣ける時をうつさず經をとり
 よせたり定範經をひらきければ上人其經をたびたまへ文は勝のごとし各は右左なく見附たまふ
 まじとて御手にとらせ玉ひて佛地品を卷よせて是是へまへと仰ければ老僧四五人立よりて是を
 覽れば十丈金色像六万五千餘十度造供養不如稱彌陀也見ぬたか上人の宣はく又妙塔勝心經を取
 よせたまへ引で見せ奉らん南無阿彌陀佛一念功德勝於一百三十五恒河沙成滿金塔者と云々此余
 釋經論勝て計ふべからず當伽藍ハ一佛一精舍一度造立の供養なり此等の經文の如く其大の金
 像供養あるべも念佛二三返の功德よ劣るとは源空が秘の會釋あく明文の如く只一返の功德にも
 劣るとこそ驚へたれ實にも斯る大乘經等の文を破りて言わば力なくとぞ仰ける定範いへく佛を

平等あり十力四無爲畏内證外用の功德皆もつて等し何れよりて彌陀を念ずる功德離佛の善根
 に勝れたるやと云々上人宣はく彌陀因位の執行別あり誓願別あり成佛別なり故に三世の諸佛
 に超過せりと云々其日の辰の上刻より終日の問答なりしが上人の御返答條々勝れ玉ひ且淨土
 の法門彌阿の名號諸教よすくれ三世諸佛の功德善根に秀肝心ともを仰せければ各學匠にて皆々
 歸伏し奉りけり(此條一書ふは建久二年のころと云明義抄ふは正治二年四月とあり按ずるに正
 治二年の大佛供養の五ヶ年後ありしかれば文治二年の誤ならん乎凡大原問答と同年よしして彼宗
 論の以前なるべし)

〔第十五〕 明遍僧都夢想 並 蓮臺野鬪饑供養 文治四年の春の頃明遍僧都いさゝか夢想を修覽
 ずるとありうの有さまは攝州荒 陵山四天王寺にいたりて西門をさし覗きて見給へば非人乞丐
 其外病者なんぞ許多臥たり看病人も又多くありて或は飯あるひは栗柿梨等を病者に與ふるに少
 しし受る者もありといへども病者多くは手をかくることなし茲に看病人の中に實に慈悲ふか
 げある僧ありて米飯をさまして病者に進めて通りたまへば力づきたる病者も大切にみへたるも
 皆此米飯を受て飲と見たまひ夢心地に情もひ給ふやう栗柿梨と與へたるふ大事なる病者の
 一口たに喰げと見たるの斯る堅き菓物は華嚴天台等の法門にして今此大事なる病者は極惡最下

の衆生ありされば法は難行あり衆生の機分の劣るなり機法おひ相叶わぬか然るに慈悲深げなる
 僧看病の爲に米飲を與へて通られたるに元氣有病者も衰へ勞れし大切の病者も皆々受て飲と見
 ゆるは彌陀の本願あり慈悲深き僧の善知識なり南無阿彌陀佛の名號はくだんの米飲なるべし機
 法相應して生死を離るべき瑞相を六方恒沙の諸佛のてらして見せしめ給ふよとぞ思ひ合せて
 此由を源空上人へ委しく書て進らせ是ひとへに上人の淨勸化の殊勝あるか故ありと益販伏し
 信心深かりしとぞ最尊かりし

同五年の春のころ源空弟子等十余人召具して蓮臺野(舟岳山西傍歟)に御出有て言ふやう源空
 兩三年前に聊夢みるとあり夢の實否をしるべき事ありとて少し高き塚の上にのぼり給ひ四
 面を見めぐらし有あふ彌體を彼是と取あつめさて塚に築行道して阿彌陀經數返とぞへ吊ひたま
 ひて

皮よこそ男女のしなるもあれ骨にはかある人形もあし
 と詠じ給ひて暫く首をあげ給ふに百四五十もありける其中に大なる彌體より血の涙を流した
 り御弟子等おどろきて余の不思議さにこれの如何ある人の彌體よて候らんと申すに源空もいか
 でしかるべき先かうを火葬せよとて件の彌體を焼しめ名號を書して立歸り玉ひ御弟子等に賜



院中 諸宗、願 道法門

り玉ふやう源空いにもる敷山に有し時同學の僧に三位註記祐尊といふ者あり然るに或時京師に
遊さしが二三日彼處にありて一夜矢たりき尋ねしかども其往去を知らず次の年人の風聞しける
り人に殺害せられ亡骸は連置野に捨たわんぬと聞て是を一族もせば知らずして空しく犬野干に
荒され果けり源空が夢に見て曰く我過去の宿習によりて人に殺害せられて空しく野外の土と
ありぬ日頃の同學の好吊らひて玉り候へ首の野原に存せり天台の習學おれどもいまだ得道せず
候ふとて涙を流して告たり吾も夢るゝるに涙をながし必ず吊ひ奉るべし心易くれもひ玉へと答
へしかば敷上るこびぬゆめさめての後も尙涙を流せりされは正しく彼祐尊が首あるらんと言ひ
ける上人其夜の夢に祐尊來りて多とふらひにあつかり忽ちに天上すると見玉ひしとぞ殊勝あり
し多とふらひありき

〔第十六〕 於ニ女院ニ設戒並 免免畜業生ニ天上ニ 同年修明門院にして女院へ源空上人を召され

七箇日の間淨戒あり南岳大師天台よ傳へ玉ひし戒品なり又慈覺大師五臺山にわたりて文珠の
即身に值奉て多相傳ありし三種の淨戒源空より傳わり玉ふ戒あり此三種淨戒といふは一には有
情違益戒二には勝善法戒三には勝律義戒あり此三種の戒よ十二の戒躰あり一得永不失の大乗戒
あり此等の戒行七日淨戒廣めり第五日にあたる朝にまた淨戒始らざるに香壇に火ありて兩三

日消えずこのけむりはあたるもの男七人女五人都合十二人醜態まで異香籠じて失すといへり女
 院上人の夢目には十四五ばかりある天童香爐に火を置いて修明院の夢前にて勢至菩薩大乘戒七日
 夢續嘆の結縁に梅檀を焚て刀利天へ登ると言て天をさして登ると見玉ふ余の人々の目には雀飛
 昇ると見玉ふとあり又説戒結願のときは杖垣の元より兎とび出て垣の上に昇り高く飛あかりて
 落ちて石にわたる國をうちて死す此兎の口より鬚脚ゆひたる童子天をさして昇りおわんぬ又畜生
 あれども不惜身命の志深くして忽ちに畜業を免れけるも不思議ありし事どもあり唐士よの隋唐
 二代の國士大極殿にして仁王般若を講じ玉ふ今の法然上人清涼殿よして説戒あり同女院に袈
 裟を授奉り玉ふ唐の安然和尚は戒品は傳へ玉ひるかども袈裟は授けられず古今に双をぎ大徳な
 れは彌和尚上人の位たかく尊きといも言すべかりもあしとなむ

〔第十七〕 耳四郎悔先非一歸一佛門一並 範長發起 完に河内國の住人天野四郎といふ惡黨の張
 本あり此者人の有徳あるを聞てハ夜討をかもて財寶を奪ひ山城をなし海賊を働らさける人異名
 をして耳四郎と名づく一時徒弟信空の宿所姉小路白河二階の房へ源空上人を招請申されける其
 折節耳四郎都は上りて在々所々を窺ひ歩けるが便よきにすかせ二階の坊へ潜び入り椽の下に盤
 りおりにて人靜らハ財寶を掠んと時の移るを待居たり上人常の夢事あれば出離の要道娑婆の有爲

無常轉變の所を常住と思ひ入たる意無さよ極樂無爲の不退の快樂を期すべきと彌陀本願の念佛
 にしくべからざる道理を説きたまし人界に生れるがら惡人となり程なく三惡道よかへりて无
 量永劫苦しみを受んこと悲しからずやと 感に夜三更に及ぶまで法談ありしが天野椽の下に
 おりて具は聽聞せし程に何ことも打わすれ嗚呼我身いがある心そや拙きものは我より外にはよ
 もわらし抑四方の人々は皆貴きも賤きも必後世を願ふあるに我はわづかに此身を發んとて種々
 無量の罪をつくることの淺ましきよと思ひ悔みて嘆さしが夜も既に明わたりしかば椽の下より徐
 くぞ還出つ上人の夢前に平伏し我身の所業の惡さをはしぬ此房の椽の下に昨夜より忍人て窺ふ
 折ふし上人の夢法門を承り先非を悔み年來の罪業を欺きて罷出候と涙をながし懺悔しければ上
 人打らあづき玉ひ實に神妙に思切たり維ひ日來惡業を犯正を志す今日よむて偏に念佛せば
 惡人攝取の本願あれは何かは捨たさふべき必ず決定往生あるべしと種々に夢法門を説きと玉
 ひければ夫より四郎ハ无極の過世者となりて少の罪を著犯さず愛度かりし道心あり然るに年來
 日頃よしみを含む歌なども多かりければ四郎が發心をつたへ聞て訓を擲めさせずして有けるが
 四郎は昔に引かへて腰刀だよ指す有ければ人みざる運便を捨て許しけり時に丹波國の住人
 篠村新左衛門範長といふ者ありて此なる京師に帶廻せるに在けるが三とせ已前に頼とせし一族を